

京都市内遺跡立会調査概報

平成 3 年度

京 都 市 文 化 觀 光 局

序

京都は恵まれた自然環境の中で1200年の歴史を織り込み、日本ばかりでなく今や世界の人々を引き付ける魅力ある都市に発展いたしました。

平安京の造営以来、美しい自然を守り育て、文化を創造し、幾多の試練を乗り越えながら着実な歩みを続けてきましたが、時代のうつり変りと共に、それらの多くは地上から姿を消し、埋蔵文化財となって地中に深く眠っております。

現在の市街地には、原始時代から平安遷都以前の埋蔵文化財をはじめとし、平安京跡を中心とするそれ以降の文化遺産が多く存在しています。

これらの埋蔵文化財も最近の著しい都市の再開発によって、重大な転機をむかえようとしています。

私達の生活をより心豊かなものとする上で、かけがえのない価値を有する埋蔵文化財をできるだけ保存し後世に伝えていくことは、現在の私達に課せられた大切な責任であると考えます。

本書は、京都市が平成3年度に文化庁の国庫補助を得て実施した、埋蔵文化財調査報告書ですが、調査の実施は平成2年度の立会調査、試掘調査、発掘調査並びに平成3年度の立会調査、発掘調査につきましては、助京都市埋蔵文化財研究所に本市が委託したものであり、平成3年度の試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが直接調査したものであります。

おわりに、調査に協力頂いた市民の方々及び御助言頂いた方々に心から感謝しますと共に、本報告書が皆様方に役立てられる事を期待しております。

平成4年3月

京都市文化観光局

例　　言

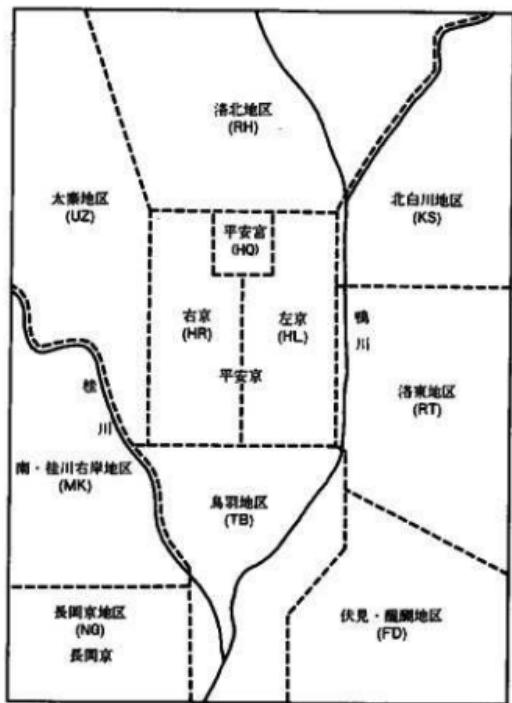
- 1 本書は京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助に伴う平成3年度の京都市内遺跡立会調査概要報告である。
- 2 本文の執筆分担は次のとおりである。

I 本弥八郎 II・III 竜子正彦 IV 吉村正親 V の1・2・4 竜子 3 小檜山一良 VI 伊藤 淑 VII の1 吉本健吾 2 平田 泰 3 小檜山(SD2)、吉村(SK20) 4 吉村(遺物)、平田(遺構) VIII 鈴木久男 IX 小松武彦 X の1・4 久世康博 2 尾藤徳行 3 吉村(土器類)、吉本(瓦類) XI の1 伊藤、吉本(瓦) 2 竜子 3~6 吉本
- 3 写真は遺構の一部を除き村井伸也、幸明綾子が担当した。
- 4 遺物復原は多田清治、村上 勉、田中利津子、出水みゆき、中村享子、児玉光世が行った。
- 5 京都市遺跡基準点を使用し、辻 純一、宮原健吾が測量を行った。座標は平面直角座標系VIである。座標の数値はm単位で、標高はT.P.による。
- 6 本書作成にあたっては、本、平田、小松、吉本、端美和子が編集を行った。整理、作成作業には上記の執筆者のほかに川村雅章、本田次男、宮下則子が参加した。調査一覧表の作成は近藤章子、調査地点位置図の作成は北川和子、端が行った。
- 7 本文の遺構実測図(製図)、遺物実測図(実測・製図)の作成者名を挿図目次に記載した。
- 8 本書に使用した遺構の略記号は奈良国立文化財研究所の用例にしたがった。
- 9 本書に掲載した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図(縮尺1/2,500)を以下のとおり複製して調整したものです。

平安宮跡 図版3 8,000分の1(聚楽園、壬生)
平安京跡 図版4~13 10,000分の1(花園、聚楽園、御所、山ノ内、壬生、三条大橋、西京極、島原、五条大橋、中河原、梅小路、京都駅)
中久世遺跡、白河街区、岡崎遺跡 図版14 10,000分の1(寺戸、中久世、御所、吉田、三条大橋、岡崎)
鳥羽離宮跡、下鳥羽遺跡 図版15 10,000分の1(城南宮、竹田、下鳥羽、中書島)
伏見城跡 図版16 10,000分の1(丹波橋、桃山、中書島、木幡池)

平安京右京七条二坊八町 図1 5,000分の1 (西京極、島原、中河原、梅小路)
平安京左京四条四坊三町 図6 5,000分の1 (三条大橋)
福西古墳群 図10 5,000分の1 (中山)
下津林遺跡 図18 5,000分の1 (川島)
中久世遺跡 図20 5,000分の1 (寺戸、久世)
法住寺跡跡 図37 5,000分の1 (五条大橋、京都駅)
栗栖野瓦窯跡 図39 5,000分の1 (幡枝)
平安京右京三条二坊 図47 5,000分の1 (山ノ内、壬生)
平安京左京四条四坊 図50 5,000分の1 (三条大橋)

地区設定図



目 次

I 調査概要	1	VII 中久世遺跡 (91MK142)	
II 平安京右京八条二坊(西市跡) (90H R99)		1 調査経過	31
1 調査経過	3	2 遺構	31
2 遺物	3	3 遺物	33
3 遺物	4	4 まとめ	38
4 まとめ	8		
III 平安京左京三条四坊 (91H L38)		VIII 烏羽離宮跡 (91T B189)	
1 調査経過	9	1 調査経過	47
2 遺構	9	2 遺構・遺物	48
3 遺物	10	3 まとめ	48
4 まとめ	11		
IV 福西22号墳 (90MK10)		IX 法住寺殿跡 (91RT6)	
1 調査経過	13	1 調査経過	49
2 古墳群の位置	13	2 遺構・遺物	49
3 遺構	15	3 まとめ	50
4 遺物	17		
5 まとめ	19	X 栗栖野瓦窯跡 (90R H 7)	
V 下津林遺跡 (90MK 8)		1 調査経過	51
1 調査経過	20	2 遺構	52
2 遺構	20	3 遺物	54
3 遺物	22	4 まとめ	61
4 まとめ	23		
VI 中久世遺跡 (90MK 9)		XI 主要な出土遺物	
1 調査経過	24	1 平安京右京三条二坊 (91H R75)	63
2 遺構	25	2 平安京左京四条四坊 (91H L170)	65
3 遺物	25	3 平安京右京四条二坊 (90H R91)	67
4 まとめ	29	4 平安京右京五条三坊 (91H R31)	67
		5 平安京左京八条三坊 (90H L161)	67
		6 仁和寺院跡 (91U Z57)	67

図版目次

- 図版1 平安京図葉分割図
図版2 平安宮復原図
図版3 平安宮
図版4 右京 北辺・一・二・三条 三・四坊
図版5 右京 北辺・一・二・三条 一・二坊
図版6 左京 北辺・一・二・三条 一・二坊
図版7 左京 北辺・一・二・三条 三・四坊
図版8 右京 四・五・六・七条 三・四坊
図版9 右京 四・五・六・七条 一・二坊
図版10 左京 四・五・六・七条 一・二坊
図版11 左京 四・五・六・七条 三・四坊
図版12 右京 八・九条 三・四坊 左京 八・九条 一・二坊
図版13 右京 八・九条 一・二坊 左京 八・九条 三・四坊
図版14 中久世遺跡 白河街区 岡崎遺跡
図版15 烏羽離宮跡
図版16 伏見城跡
図版17 遺跡 平安京右京八条二坊（西市跡）(90H R 99)
図版18 遺跡 平安京左京三条四坊 (91H L 38)
図版19 遺跡 福西22号墳 (90MK10)
図版20 遺跡 福西22号墳 (90MK10)
図版21 遺跡 下津林遺跡 (90MK 8)
図版22 遺跡 中久世遺跡 (90MK 9)
図版23 遺跡 中久世遺跡 (91MK142)
図版24 遺跡 烏羽離宮跡 (91T B189)
図版25 遺跡 法住寺殿跡 (91R T 6)
図版26 遺跡 栗栖野瓦窯跡 (90R H 7)
図版27 遺物 平安京右京八条二坊（西市跡）(90H R 99)

- 図版28 遺物 平安京右京八条二坊（西市跡）(90H R99)
- 図版29 遺物 平安京右京八条二坊（西市跡）(90H R99)
- 図版30 遺物 平安京左京三条四坊（91H L38）
- 図版31 遺物 福西22号墳（90MK10）
- 図版32 遺物 下津林遺跡（90MK 8）
- 図版33 遺物 中久世遺跡（90MK 9）
- 図版34 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版35 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版36 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版37 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版38 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版39 遺物 中久世遺跡（91MK142）
- 図版40 遺物 栗栖野瓦窯跡（90RH 7）
- 図版41 遺物 栗栖野瓦窯跡（90RH 7）
- 図版42 遺物 栗栖野瓦窯跡（90RH 7）
- 図版43 遺物 栗栖野瓦窯跡（90RH 7）
- 図版44 遺物 平安京・平安京外出土遺物

挿 図 目 次

(実測者・製図者)

図 1 調査位置図	3
図 2 土層断面実測図（製図 竜子）	4
図 3 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	5
図 4 錢貨拓影図	7
図 5 イヌの各部分骨の名称図	7
図 6 調査位置図	9
図 7 造構略測図（製図 竜子）	10
図 8 造構断面実測図（製図 竜子）	10
図 9 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	11

図10 調査位置図・分布図	14
図11 造構配置・復原図（製図 吉村）	15
図12 石室平面図・立面図（製図 吉村）	16
図13 造構断面実測図（製図 吉村）	17
図14 遺物実測図（実測・製図 吉村）	18
図15 遺物実測図（実測・製図 吉村）	18
図16 遺物実測図（実測・製図 吉村）	19
図17 造構断面図（製図 竜子）	20
図18 調査位置図	21
図19 遺物実測図（実測・製図 小檜山）	22
図20 調査位置図	24
図21 造構位置図（製図 伊藤）	25
図22 造構実測図（製図 伊藤）	26
図23 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	27
図24 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	29
図25 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	29
図26 造構実測図（製図 平田）	32
図27 S D 2 出土遺物実測図（実測・製図 小檜山）	35
図28 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	37
図29 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	41
図30 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	42
図31 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	43
図32 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	44
図33 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	45
図34 S K20出土遺物実測図（実測・製図 吉村）	46
図35 調査位置図	47
図36 造構実測図（製図 鈴木）	48
図37 調査位置図	49
図38 造構実測図（製図 吉村）	50
図39 調査位置図	51

図40 No.13遺構断面図（製図 竜子）	52
図41 No.24遺構断面図（製図 竜子）	52
図42 遺物実測図（実測 吉村 製図 平田）	55
図43 遺物実測図（実測・製図 吉村）	56
図44 遺物実測・拓影図（実測 吉本 製図 吉村）	59
図45 遺物実測・拓影図（実測 吉本 製図 吉村）	60
図46 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	61
図47 調査位置図	63
図48 墨書き土器	64
図49 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	64
図50 調査位置図	65
図51 遺物実測図（実測・製図 伊藤）	66
図52 遺物実測図（実測 吉村（土器）、吉本（瓦） 製図 吉村）	68

表 目 次

調査一覧表	69
-------	----

I 調査の概要

本報告は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。文化庁国庫補助による平成3年度の京都市内遺跡の立会調査概要報告である。本書では、平成3年1月4日から平成3年12月27日までの間に実施した立会調査の概要を報告する。

本年度の立会調査の総件数392件である。その内訳は、平安宮地区(HQ)57件、平安京右京地区(HR)75件、平安京左京地区(HL)125件、南・桂川右岸地区(MK)14件、長岡京地区(NG)12件、鳥羽地区(TB)22件、伏見・醍醐地区(FD)25件、洛東地区(RT)21件、北白川地区(KS)20件、洛北地区(RH)13件、太秦地区(UZ)8件である。ここでは、本年度の調査で新たに知り得た成果について、以下にその概略を述べる。

平安宮地区 (HQ)

平安宮域で立会調査の対象となるのは、比較的小規模な建設工事が多い。したがって調査面積は狭く、掘削深度も浅くなり、新しい盛土までの確認にとどまる場合も多い。しかし、遺構面が浅い地域では着実にその成果を上げている。朝堂院跡付近では、従来の調査で古墳時代の遺構・遺物が多く発見されており、豊楽院跡(HQ187)の調査でも、良好な包含層を確認している。また朝堂院跡(HQ144)では、平安時代の瓦を含む整地層を検出。中和院の西に位置する真言院跡(HQ89)では土壌を1基検出している。

平安京右京(HR)・左京(HL)地区

平安京の大路、小路は現道路との重複が多く、主に道路敷を掘削する水道管等の布設工事に伴う立会調査では、路面、側溝が多く検出される。今年度は16件の調査で15例の大路、小路の路面を検出しており、そのほとんどが幾層にも重なり、10層以上、近代にまで及ぶ例もある。建築遺構としては(HR21)、(HL184)で平安時代の柱穴を、(HL140)で平安時代の井戸を検出している。

平安京域では湿地状あるいは池状の堆積層が多く認められる。今年度は、右京(HR)11件、左京(HL)で7件ある。これらは庭園遺構につながるものもある。高陽院跡(HL49)の調査では池の一部を検出しており、この池は、昭和56年度の発掘調査で確認されたもので、池の範囲を究明するうえで貴重である。また、右京八条二坊八町の水道管布設工事に伴う調査(90HR99)では、広範に湿地状堆積を確認している。この遺構は昭和58

年度に調査され、報告されているが、本書でもその成果を報告する。また、(H L170) の調査成果も掲載した。

南・桂川右岸地区（MK）では、福西古墳群（90MK10）で新たな古墳を、下津林遺跡（90MK 8）では弥生時代の遺構・遺物を、中久世遺跡（90MK 9）、(MK142) では弥生時代、古墳時代の遺構・遺物をそれぞれ発見した。この4件は本書に掲載した。

長岡京地区（NG）では、長岡京跡で弥生時代の流路（NG83）・湿地（NG119）、古墳時代の包含層などを確認している。

鳥羽地区（TB）では、鳥羽離宮跡で田中殿の基壇の一部を検出。(TB189) で勝光明院北殿の一部とその周辺部の状況を把握できた。成果は本書に掲載した。

伏見・醍醐地区（FD）では、伏見城跡の調査が20件と多く、(90 FD 32) で桃山時代の溝を検出、(90 FD 35) で弥生土器を検出した。

洛東地区（RT）では、法住寺殿跡（RT 6）で溝、柱穴などを検出した。

北白川地区（KS）では、白河街区の調査が13件と最も多く、平安時代後期、室町時代の包含層・土壌を検出している。京都大学構内遺跡（KS 259）では縄文土器を検出している。縄文遺跡である沖殿町遺跡（90KS 21）では縄文土器を採取し、平安時代後期の景石を持つ庭園遺構を発見した。

洛北地区（RH）では、相国寺旧境内で土壌、包含層等を検出している。栗栖野瓦窯跡の調査（90RH 7）では灰原が発見されており、その出土遺物は本書に掲載した。

太秦地区（UZ）では、西野町遺跡で嵯峨野小学校プール改築工事に伴う調査を実施した。遺構の密度は濃く、弥生時代から古墳時代にかけての土壌・溝、平安時代の土壌・溝などを検出した。

以上が本年度の立会調査概要である。通常、立会調査では、遺構の面的な把握が困難な場合が多く、断面観察という手段で対処する。このように遺跡破壊と直面する調査であっても、その成果は大きく、特に遺跡の範囲を把握する為に欠かすことのできない調査である。本年度の調査件数は例年に比べかなり減少傾向にあるが、建設工事等の減少ではなく、京都の上・下水道工事や宅地造成工事などが市周辺部に及んだ為であろう。遺跡地図で、遺跡の密度の薄い地域、遺跡と認められていない地域での工事の場合、遺跡が存在しても、そのほとんどが返り見られていないのが現状であろう。今年度の立会調査をとおして遺跡範囲の見直しを計る必要を痛感するものである。

II 平安京右京八条二坊（西市跡）(90H R99)

1 調査経過

調査地は、北は下京区七条通南側から南は七条小学校西門の東西通まで、西は西大路通から東は御前通までの道路部分である。当該地は平安京の西市にあたるため、水道管布設に伴う掘削の立会調査を実施した。

調査の結果、七条小学校の西側と北側において時期不明の湿地の肩口、七条小学校の西側南北道路では平安時代前期の流路や湿地堆積、七条通南側歩道では七条大路の路面を検出した。調査期間は1991年3月12日から5月9日までであった。

2 遺構（図2）（図版17）

調査地の現地形では、七条小学校の西側の南北道路を境に、東は急激に高くなり、西は全体に南西方向になだらかに傾斜している。



図1 調査位置図 (1/5,000)

東側での基本層序は、盛土以下、地表下0.42mまでが整地層で、以下は茶灰色泥砂層(礫混 ϕ 1~3cm)の地山である。西側では地表下0.4~0.5m以下が湿地状堆積層である。湿地状堆積の範囲は、上記南北道路と七条通の一本南の東西道路との交差点を基点にして東へ約20m、西へ85m、北へ50m付近までである。ただし、南側については調査地内では確認はできなかった。また、湿地状堆積層でも、南北通路で確認した土層だけに砂礫層と泥土層との互層堆積が認められた。この付近に、湿地状造構へ北から流れ込む流路があったと推定できる。

七条大路の路面は、七条通南側歩道上の工事掘削が夜間かつ断続的なため、一部でしか確認できなかったが、時期不明ながら地表下0.5m以下に7面を検出した。

3 遺物(図3・4)(図版27・28・29)

出土した遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器、瓦、錢貨、金属製品、木製品、獸骨などがある。遺物の総量は整理箱にして7箱であった。大部分の遺物は湿地堆積層から出土している。

土師器 蓋 (1) 口径17.4cm、現存高1.9cmで、外面にヘラミガキを施す。胎土は茶褐色を呈する。外面にススが付着する。皿(2~4)。(2)は、口径14.0cm、器高2.0cm。(3)は、口径15.4cm、器高2.6cm。(4)は、口径18.4cm、現存高1.8cm。口縁端部は、丸くお



図2 土層断面実測図(1/40)

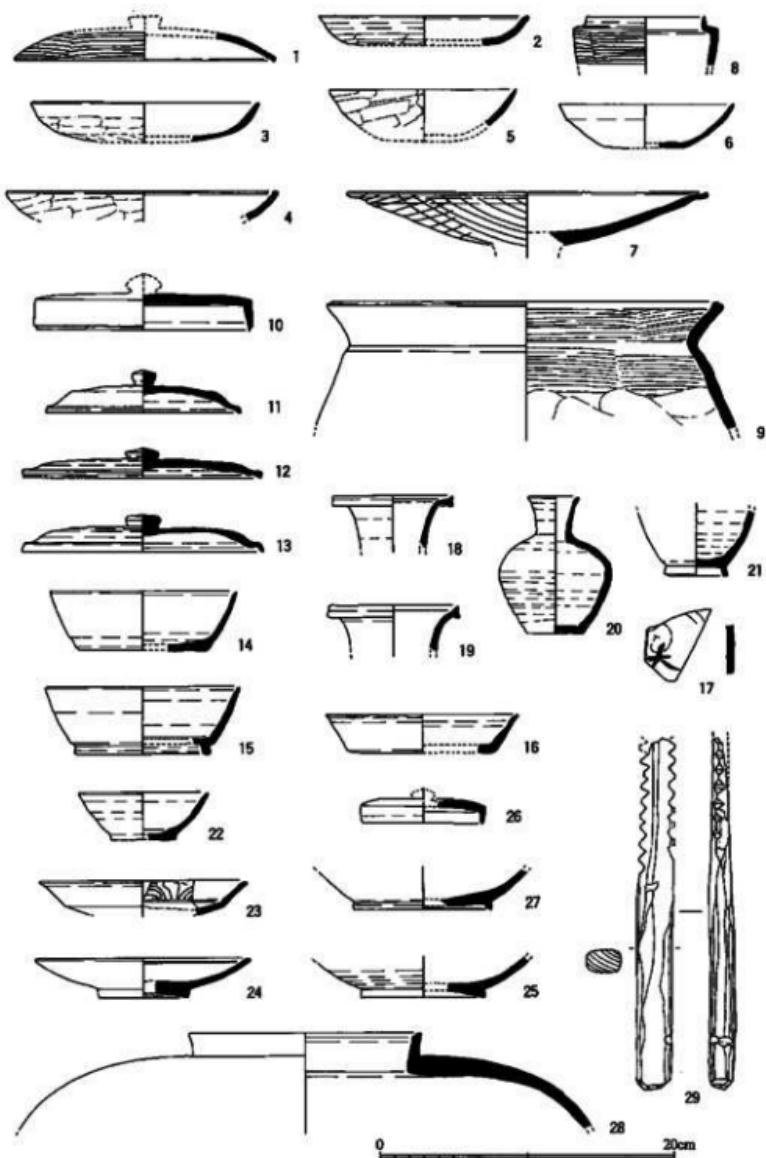
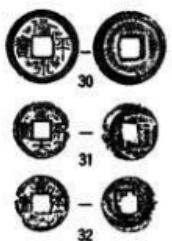


図3 造物実測図 (1/4)

さめるもの（2、3）と、内方へ巻き込むように肥厚するもの（4）がある。ヘラケズリは、体部外面下半、底部外面に施すもの（2）、体・底部外面のもの（3）、口縁端部を除く外面全体に施すもの（4）とがある。椀（5・6）。（5）は、口径12.8cm、現存器高2.5cm。（6）は、口径11.8cm、器高2.9cmを測る。外面調整が、全面ヘラケズリするもの（5）、体・底部未調整で口縁部を横ナデ調整を施すもの（6）とがある。高杯（7）は、口径24.4cmで、杯部のみ残存する。調整は外面ヘラミガキで、内面は一定方向のかかるいハケメ調整である。胎土は橙色を呈する。外面に白泥を塗っている。壺（8）口径8.0cm、最大径9.8cm。蓋受け状の短い口縁部を持つ広口壺である。胎土には白色砂粒を含み、明赤褐色を呈する。甕（9）口径26.2cm、現存器高8.7cmで、上部1/3が残存する。口縁部は外反し、端部は内側に肥厚する。胎土は淡灰色を呈する。外面にススが付着する。

須恵器 壺（10～13）。（10）は、口径14.4cm、現存器高2.5cmで、つまみが欠損する。（11）は、口径13.1cm、器高2.9cm。（12）は、口径16.0cm、器高2.0cm。（13）は、口径16.4cm、器高2.5cm。器形は、肩部で下方に垂直に折れ曲がるもの（10）、肩でなだらかに下方に曲がり、口縁がつよく屈曲するもの（11・12・13）がある。やや盛り上がった宝珠形つまみのつくもの（12・13）がある。内面に墨が付着するもの（12）がある。杯（14・15・17）。（14）は、口径12.6cm、器高4.0cm。（15）は、口径13.0cm、器高4.6cm。口縁端部は直線的に外上方へのび、高台のつくもの（15）と、つかないもの（14）とがある。底部外面に墨書「大」を記すもの（17）がある。皿（16）は、口径13.0cm、器高2.6cm。口縁部は外上方へのび、端部はさらに外反し丸くおさめる。壺（18～21）。（18）は、口径8.2cm、現存器高3.6cmで、口頸部のみ残存。（19）は、口径8.8cm、現存器高3.2cmで、口頸部のみ残存。内外面とも厚く自然釉がかかる。（20）は、口径3.4cm、最大径7.8cm、器高9.3cm。完形品。（21）は、底径4.4cm、現存器高4.4cm。高台がつく。胴部下半残存。

綠釉 梗（22・25）。（22）は、口径9.0cm、器高3.2cm。底部外面を糸切り、その他をナデ調整。淡黄灰色の素地に淡緑黄色の釉薬を、底部外面以外に施釉。（25）は、底径8.4cm、現存器高2.6cm。底部は蛇ノ目高台。体部外面はヘラケズリ。にぶい黄色の素地にオリーブ灰色の釉を全面に施釉する。内面の底部と体部の境目に、重ね焼痕がある。皿（23・24）。（23）は、口径13.8cm、現存器高2.3cm。体部と口縁部の境目に、外面に鈍い棱、内面に凹線がある。口縁内面に陰刻花文がある。須恵質の素地に緑釉を、全面に施釉する。（24）は、口径14.2cm、器高2.7cm。底部は蛇ノ目高台。口縁部は外反せず、内面に凹線をめぐらす。内外面ヘラケズリ。須恵質の素地に緑釉を、全面に施釉する。



灰釉 壺 (26) は、口径8.0cm、現存器高1.6cm。天井部は平坦で、口縁部は鋭く下方に折れ曲がり、わずかに内傾する。つまみ部分を欠く。天井部に灰釉がかかる。**壺 (27)** は、底径9.2cm、現存器高2.6cm。底部に断面方形の輪高台が付く。**壺 (28)** は、口径15.6cm、現存器高6.7cm。肩の張った体部が、頸部で鋭く上方に折れ曲がり、口縁端部は内傾する面をなす短頸壺。体部中段以下を欠く。灰釉は外面、口縁内面に施す。

図4 銭貨拓影図(1/2) 木器 (29)。現存長23.9cm、幅2.4cm、厚さ1.6cm。刀剣状の材の側面を鋸齒状に刻む。用途は不明。材質はヒノキ。

錢貨 (30~32)。(30) は、隆平永寶(初鑄796年)。重量3.79g、外径25mm、外径厚1.5mm。残存状態は良好。ヤスリ痕があり、わずかに縁背がふく。(31) は、寛平大寶(初鑄890年)。重量1.89g、外径19mm、外径厚1.5mm。残存状態は良好。鎧が少し付着。裏面は型ずれしている。外縁部は一部欠損する。(32) は、寛平大寶。重量2.10g、外径19mm、外径厚1.5mm。表面に鎧が付着し、文字はやや不鮮明。裏面は型ずれしている。外縁部が一部欠損する。

骨 (33~38)。イヌの骨が出土している。出土している骨部は、頭蓋骨2点、左下頸骨

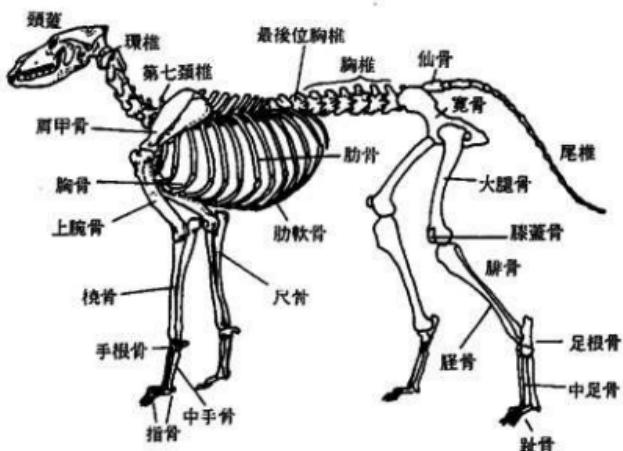


図5 イヌの各部骨の名称^(註1)

1点、右下顎骨2点、環椎1点、左寛骨1点がある。頭蓋骨、下顎骨、環椎は完形であるが、寛骨は中央部分の破片である。いずれの骨も残存状態は良好。頭蓋骨(33・34)には大小がある。大(33)は、頭骨最大長165mm、頬骨弓幅95mm。中央稜は強く発達し、後頭骨頭頂部の骨隆起は突出する。頬骨突起間は42mmと狭く、上顎はやや細長い。色は暗褐色を呈する。小(34)は、頭骨最大長151mm以上、頬骨弓幅91mm。後頭骨頭頂部の隆起は少ない。頬骨突起間は45mmと広く、前頭骨も膨張している。色は(33)よりやや明るい。この個体の差は雄雌の差に起因するとも考えられる。下顎骨(35・36)(35)は、同一個体の左右の下顎骨である。さらに、出土状況、適合性などから大きい方の頭蓋骨(33)と同一個体のものと考えられる。左下顎骨全長124mm。色は暗褐色を呈する。(36)は、右下顎骨である。下顎骨全長119mmである。小さい方の頭蓋骨(34)と同一個体と考えられる。その他には頸部最上部の骨である環椎(37)、人間の骨盤にあたる寛骨(38)が出土している。いずれかの個体のものである可能性が高い。これら2個体のイヌの骨は、頭蓋骨、下顎骨、環椎が同一個体でまとめて出土していることを考えると、解体されたとは考えにくく、そのままの状態で投棄あるいは遺棄されたものと思われる。

4 ま と め

今回検出した湿地状遺構からは、平安時代前期から中期にかけての遺物が出土している。また、七条小学校内の発掘調査や市域立会調査で、平安時代前期の湿地状遺構から土器と多量の木製品が出土しており、出土遺物や湿地の状況から、これらと今回の湿地状堆積層との関連性をうかがわせる。また、条坊関連の遺構は七条大路の路面だけであったが、7回にわたる長期の補修跡が認められた。七条大路は、従来の立会・発掘調査で、東は河原町通付近から西は西高瀬川近くまで検出しており、大路路面が広範かつ良好に残存することが判明した。今回の調査で得られたこの広範な湿地状遺構と条坊遺構とが、どのような関係にあるかを解明することが、今後の課題といえよう。

註1 中西靖人、宮崎泰史、西村尋文『亀井遺跡一寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告II』朝大阪文化財センター 1982年 第165図を転載

III 平安京左京三条四坊 (91H L 38)

1 調査経過

調査地は、中京区寺町通二条下る妙満寺前町454-3に所在する。今回、当地で住宅建設に伴う掘削工事が行われたため、立会調査を実施した。

周辺地の調査では、寺町通に沿って推定東京極大路並びに同側溝が検出されている。また、文献によれば、同町の周辺は江戸時代に商家が建ち並んでいたことがわかる。

調査にあたり、上記の点に留意しながら調査をすすめた。その結果、推定東京極大路面と同東側溝、加工痕のある獸骨（牛・馬）を多量に含む江戸時代の落込みなどを検出した。調査期間は1991年5月1日から5月10日までである。

2 遺構（図7・8）(図版18)

調査は、工事掘削と並行するかたちとなり、制約された条件下での調査であった。調査区中央部では、地表（標高42.6m）下1.5mで平安時代後期の遺物包含層を検出し、以下1.9mで地山である黄褐色砂礫層を確認した。調査区西半部では、地表下1.85～1.95mまで重機により既に削平され、断面にも一部横矢板が入れられていた。しかし、一部の掘削断面・平面で調査可能な箇所があり、地表下1.65mで、推定東京極大路と同東側溝を検出した。調査区西端では、地表下1.75mで江戸時代初期の落込みを検出した。

路面は、西側を中世の土壤により搅乱されており、検出できたのは東西幅2.3m、南北長は敷地幅の5.2mである。路面敷は径が1～3cmの小砾を含み、堅くたたき締まった面をなし、その厚さは8cmほどであった。

側溝は幅1.3m、深さ0.55mを測り、検出長は南北敷地幅の5.2mである。溝は路面と地山である黄褐色砂礫層を切って成立する。溝の埋土は2層に分かれ、上層は砂礫混じりの灰黄褐色泥砂層で、下層は水の浸んでいたと思われる暗褐灰色泥土層である。遺物が検出



図6 調査位置図 (1/5,000)

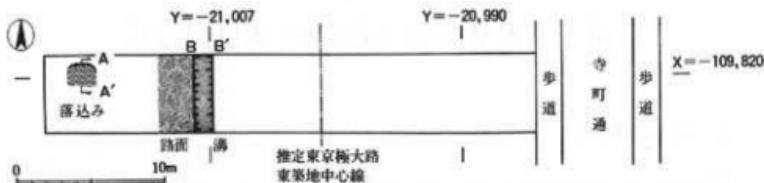


図7 遺構略測図(1/400)

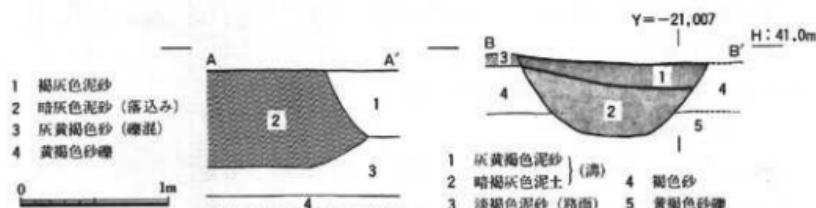


図8 遺構断面実測図(1/40)

できたのは下層のみで、平安時代後期の土師器皿と瓦がある。

落込みは、南側に横矢板が入れられており北肩部しか確認できなかったが、南へ1.8mまでは認められた。底部の深さは地表下2.4mであるが断面形状は他の土壤に切られたり、横矢板が入れられていたため底部が平坦である以外の事は不明である。

3 遺物(図9)(図版30)

東京極大路東側溝出土土器

土師器皿(1)は、口径9.2cm、器高1.3cm、皿(2)は、口径9.8cm、器高1.6cmで、器形はいずれも、平底の底部から体部にかけて外反し、口縁の端部は上方につまみあげ丸い。胎土はにぶい橙色を呈する。

落込み出土土器

土師器皿(3)は、口径10.0cm、器高2.0cmで、底部は上方にやや凹み、体部は内湾気味に立ちあがる。口縁は肥厚し、内面にナデ調整によるへこみがあり、端部は丸くおさまる。胎土は橙色を呈する。皿(4)は、口径10.2cm、現存器高2.2cmで、底部と体部の境に

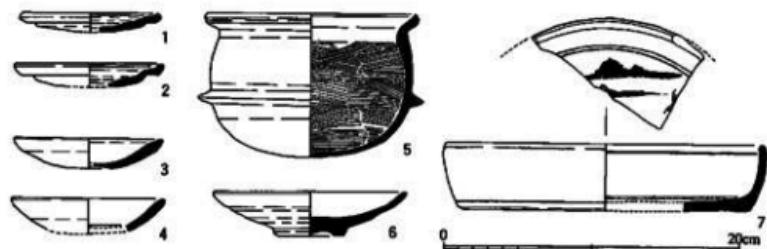


図9 遺物実測図 (1/4)

圓線を有する。胎土はによい橙色を呈する。羽釜（5）は、口径14.1cm、器高9.7cmで、底部は丸く体部は内湾する。頸部は肥厚し、口縁部は強く外反し、端部は上方に立ちあがる。鉗は体部中央に水平に付き、断面は三角形を呈する。内面は頸部以下に横方向のハケメ調整を施す。鉗より下にスヌが付着する。胎土は橙色を呈する。

陶器 盆（6）は、口径12.8cm、器高3.0cmで、高台はケズリ出しで逆台形状を呈する。底部は厚く、体部は内湾する。底部内面と高台端部に3箇所ずつ重ね焼の胎土メアトが残る。赤褐色の素地に灰オリーブ色の釉薬を浸けがけしている。

輸入陶磁器 平鉢（7）は、口径21.8cm、器高4.5cmで、底部は平らである。体部は内湾気味に立ちあがり、端部は丸くおさまる。明青灰色の釉薬で圓線、底部内面に山水文様を描き、底部外面を除く全面に灰白色の釉を施す。口縁端部の両側の釉は剥離がはげしい。

獸骨（8・9）。ほとんどが、牛、馬の中手骨、中足骨片である。骨片は、両端より4～5cmの所を、厚さ0.5mm程の道具で切断した両端部分である。一部の骨片は暗緑色を呈し、染色後切断されている。加工品には、厚さ0.4cm、長さ5.7cm、幅1.5cm（現存寸法）で、たてに割れたヘラ状のもの（A）や、厚さ1cmほどで輪切りにした骨の中心の空洞部分に、他の骨を丸く削り出して充填したもの（B）がある。ヘラ状のものには下半中央部に、ボタン風に削り出そうとした痕跡がある。

4 ま と め

今回検出した東京極大路東側溝は、復原推定位置より5m余り西へ寄っている。地下鉄東西線の調査^{註2}で、復原推定される位置に平安時代前期の南北溝が検出され、今回の溝が平安時代後期であることを考えあわせると、東京極大路東側溝は平安時代後期頃に、道路幅をせばめて作り替えられていることになる。また、これまでの立会調査等の成果では、東

京極大路は南は高辻通付近から北は丸太町通まで、路面が検出されている。^{註3}

落込み出土の骨については、大部分が両端部分で、一部に削りくずや未製品があったが、^{註4}完成品は見られなかった。製品としては、東京都の三栄遺跡において江戸時代中期～後期頃の牛・馬の骨製の簪と笄が出土しており、製品の形状が類推できる。元禄時代の『京独案内手引集』によれば、同町には角細工を生業としている店があり、出土した骨との関連性がうかがわれる。

また富小路通夷川上る大炊町の調査においても、同様の骨片が出土している。今後出土例が増加すれば、より詳細が判明するだろう。^{註5}

註1 「京独案内手引集」「新修京都叢書」第3巻

註2 「地下鉄東西線建設工事に伴う発掘調査」(TR No.19)『京都新聞』1991年6月13日

註3 本書 調査一覧表参照 (91H L 104)

註4 堀内明博「左京二条三・四坊」「昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要」(試掘・立会調査編) 朝京都市埋蔵文化財研究所 1983年

註5 金子浩昌「江戸時代食文化の考古学—動物遺体にみる料理の素材ー」『月刊文化財11』文化庁文化財保護課監修 1991年

註6 九川義広、中村教「左京二条四坊」「昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要」(発掘調査編) 朝京都市埋蔵文化財研究所 1983年

IV 福西22号墳 (90MK10)

1 調査経過

京都市西京区大枝東長町1-211において1991年1月23日に、アパート新築工事に伴う立会調査中、敷地北東隅付近から石室の一部と思われる石材多数と須恵器片が発見され、古墳の存在が明らかになった。

このため、ただちに京都市埋蔵文化財調査センターに状況を報告、本格的な調査が必要であることを指摘した。センターはこれを受け原因者に指導、協議を行なった結果、1991年1月25日から7日間の予定で緊急調査を実施することになった。調査は1月25日に墳丘の規模を明らかにする調査から開始し、写真撮影など記録作業を実施し、最後に平板による墳丘測量を行なった。2月1日に土壠による石室の仮保存をもってすべての現場作業を終了した。

2 古墳群の位置 (図10)

福西古墳群を構成する各古墳の位置については、各文献によって正確な明示もなく一定しない。古墳数についても「京都市遺跡地図」では29基、「京都府遺跡地図」^{註1}で23基、「嵯峨野の古墳時代」^{註2}では21基と登録されていて、それぞれ食い違いが見られる。

古墳群北半地区にあたる14号墳以北が今まで比較的良好に保存してきた。古墳分布と位置については「嵯峨野の古墳時代」を参考にして地図作成を試みた。22号墳以降は新しく付加したもので、各種文献と実地の分布調査による確認である。白抜きの各古墳については全壙しており、現地でもその確認は困難なもので、文献資料のみで位置復原を試みた。「嵯峨野の古墳時代」には21号墳まで確認されているのでこれを踏襲、22号墳から27号墳までの6基を新たに加えた。23号墳は畑の中にあり墳丘が実見できる。至近距離で須恵器片も採集した。この近くに10号墳の墳丘と思われる高まりも認められる。24号墳、25号墳についてはすでに住宅が建てられており、全壙したものと考えられる。26号墳は4号墳(石室を確認)の東側竹林中にある。27号墳は推定復原位置で須恵器片を採集しており、この付近に存在したと考えられるが現在は全壙している。

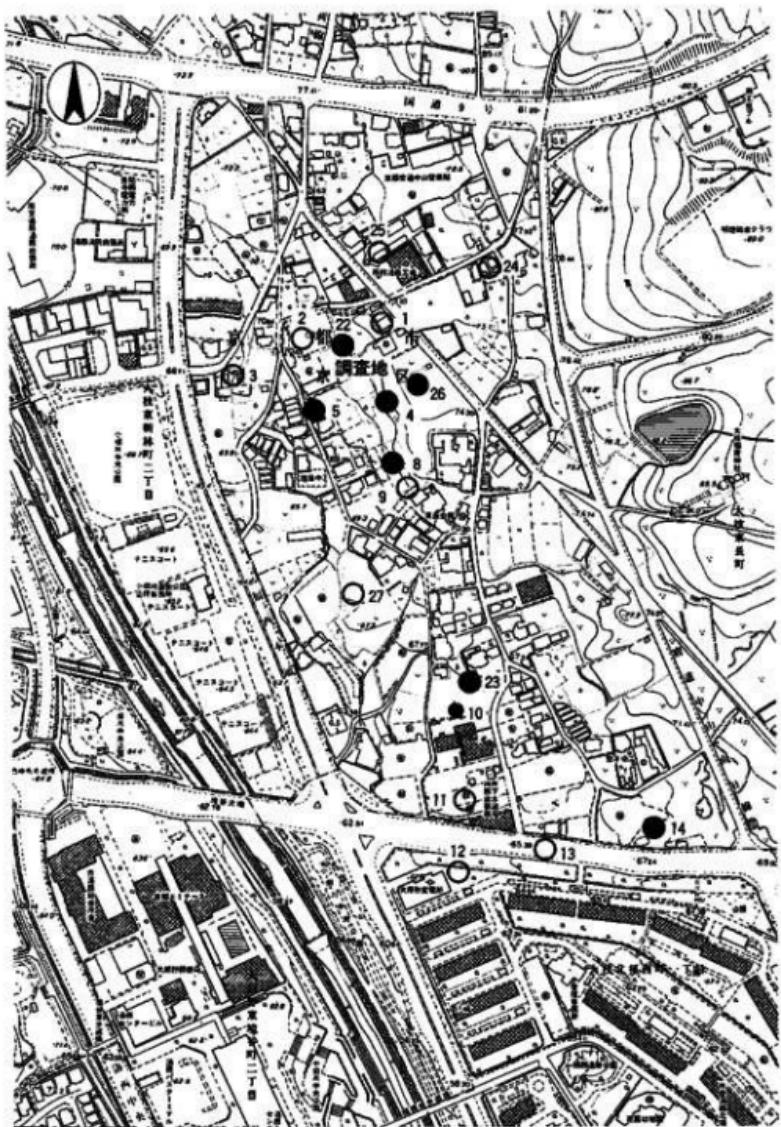


図10 調査位置図・分布図 (1/5,000)

3 遺構 (図11~13) (図版19・20)

調査開始時には、羨道の入口から玄室にかけての西側が既に破壊を受け、石材も撤去されて敷地内に盛り上げられていた。古墳の墳丘は、削平以前には高さ3mを越したものと考えられるが、今回の工事によって基底部にまで及ぶ破壊が進行したものである。

調査は墳丘の規模と

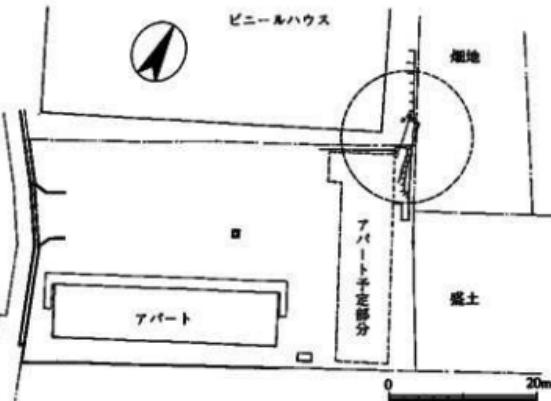
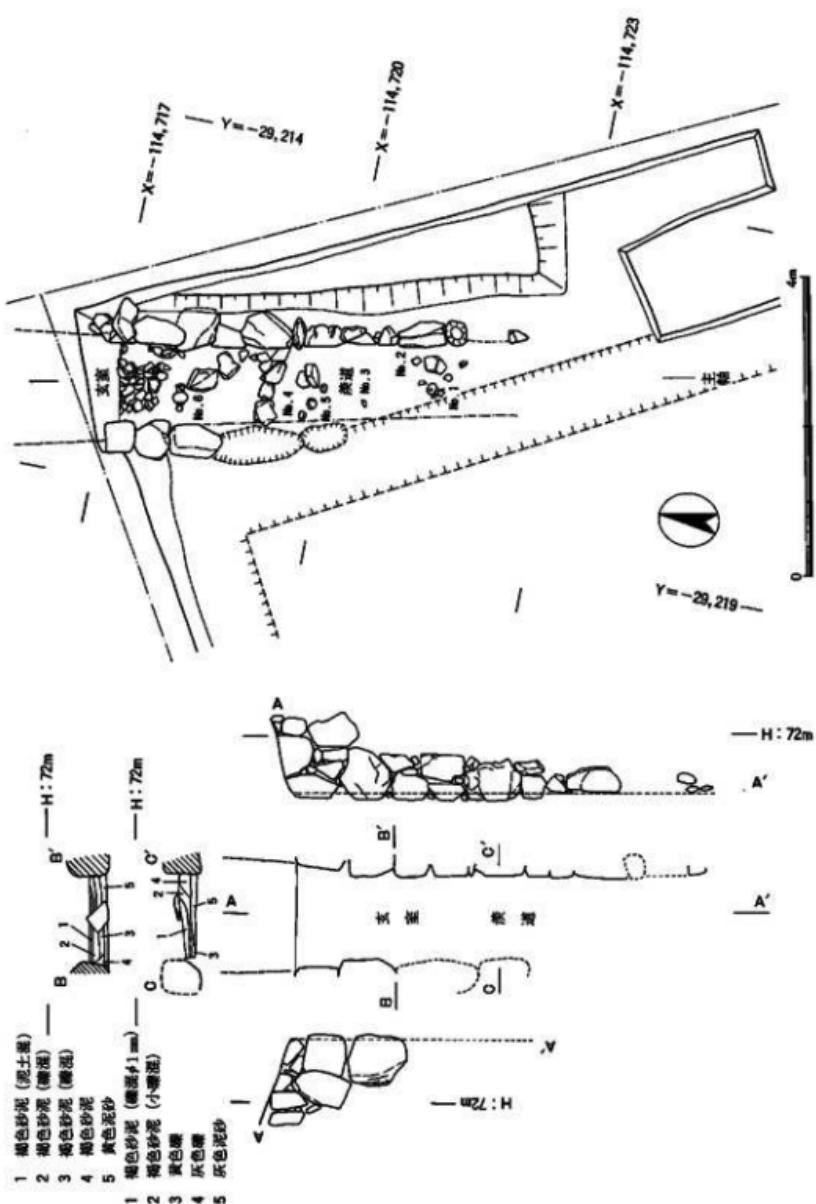


図11 遺構配置・復原図 (1/800)

石室の方位及び周溝の有無を明らかにすることから開始した。墳丘は石室底より約1mが残っている。石室は一段目ないし二段目の石列が残り、そのほとんどは羨道部で玄室部は袖部と北側約1mが確認された。玄室中央部は敷地外に伸びている。石室の主軸は真北に対して12度西に傾く。両袖式石室といえるが、袖部は明瞭なものではない。簡略化した時期の特徴を持つ石室構造と考えられる。玄室は幅1.3m、推定長約4.5mである。北側隣地には玄室のものと思われる石材が露出状態となっている。玄室底には20cm大の河原礫が中心付近に敷かれており、棺台の用途があったものと推定される。玄室部では須恵器(杯・長頸壺・高杯)、金属製品(釘)が出土した。玄室部外側には閉塞石と考えられる角石が認められる。羨道部は幅1.1m、推定長5mを測る。西半の側壁石材は工事によって破壊されたが、底部30cmは搅乱を免っていた。この羨道部には角石による区画の痕跡が見られること、遺物が北側と南側にまとまって出土することから、羨道部埋葬が行なわれた可能性がある。土器は玄室底部に堆積する土層の上層から出土し、時期的にも玄室部埋葬より確実に新しい時期の追葬と言える。周溝は墳丘南側の推定位置の一部の確認にとどまったが、明瞭な形では検出されなかった。地形に沿ってゆるやかに傾斜する墳丘裾部を構成している。この地区の墳丘裾部から須恵器(平瓶)一個体分が破碎された状態で出土している。

图12 石室平面图·立面图(1/80)



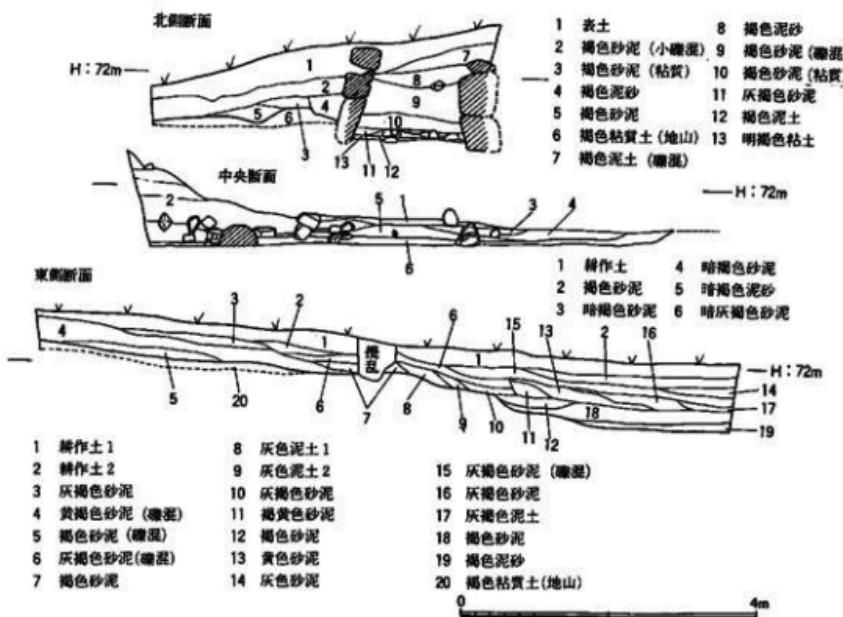


図13 造構断面実測図 (1/80)

4 遺物 (図14~16) (図版31)

遺物は、玄室部・羨道部・墳丘裾部から出土した。

玄室部 (10・11)

無蓋高杯 (10) 口径10cm、器高6.3cm、完形である。杯 (9) に脚部がついた形態を示す。脚部は短く、裾部下半は水平に横方向に伸びる。端部は下方に広がる。脚部中位に凹線がめぐる。暗灰色を呈し、自然釉がかかる。逆転した状態で出土。出土地点はNo.6。

脚付長颈壺 (11) 口径11cm、体部高22cm、脚部は欠失するが体部以上は完形である。脚部には三方に透かしがあった痕跡が認められる。肩部付近に二条の凹線がめぐる。体部下半にカキメ調整を施す。出土地点はNo.6。

羨道部 (1~9)

蓋 (3) 口径16cm、器高4cm、上半に自然釉がかかり完形である。全体に歪みが目立ち、内面にかえりをもつ。出土地点はNo.1。

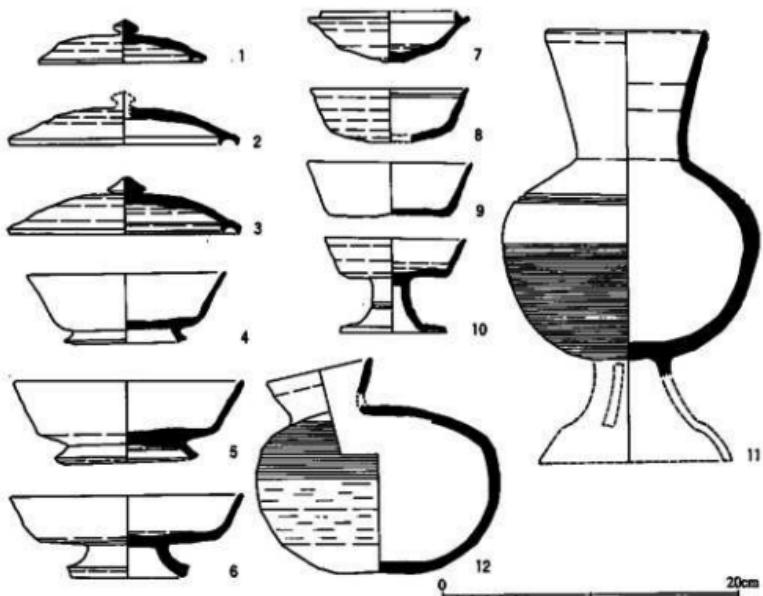


図14 逸物実測図 (1/4)

杯(4) 口径13.5cm、器高4.8cm、一部は欠失する。焼成は良好である。底部外面にヘラオコシ痕が見られ、高台は外方に張る。蓋(3)と重なった状態で出土した。

杯(5) 口径16cm、器高5.8cm、やや高い高台が強く外反する。

台付皿(6) 口径16cm、器高5.8cm、皿部の高さ3.4cm、2cmほどの高台が付き、淡灰色を呈し、1/3が欠失する。

杯(7) 口径9.2cm、器高3.4cm、完形である。底部外面はヘラオコシ痕がみられる。灰白色を呈する。出土地点No.3。

杯(8) 口径10.7cmになる破片である。外面はロクロの挽き上げ痕が見られ、内面に一条の沈線がある。暗灰色を呈する。出土地点No.4。

杯(9) 口径11cm、器高3.5cm、完形である。底部外面は回転ヘラオコシ、濃い灰色を呈し、自然釉がかかる。

蓋(1) 口径11.3cm、器高2.8cm、外面はヘラケズリ調整、やや偏平な宝珠つまみが付く。内面にかえりをもつ。No.1地点下層出土。

蓋(2) 口径15.6cm、宝珠形と考えられるつまみが付くが欠失する。内



図15 逸物
実測図 (1/2)

面にかえりをもつ。No.1 地点下層からの出土。

壇丘壠部 (12)

平瓶 (12) 器高14.5cm、腹径16cm、やや軟質である。1/3が残る。口縁部はロート状になる。腹部上半にカキメを施す。

その他

金属製品 鉤 (13) No.6 地点から木棺に使用されたと考えられる鉤が出土した。

石製品 錫 (14) 羨道部で石錫が一点出土した。縄文時代に属するものと考えられる。



図16 遺物実測図 (1/1)

5 まとめ

古墳群は小畠川左岸丘陵に展開し、洛西ニュータウン開発に伴い南北地区はすでに消滅している。今回調査の22号墳はアパート敷地の北東端にあって、南北と西側の私有地によって3分されている。石室は羨道部西側が破壊を受けるが、羨道、玄室の基底部には及ばず、遺物は現位置を保っていたものと考えられる。遺物の出土地点は玄室部と羨道部に分かれる。玄室部出土の脚付長頸壺 (11) を7世紀初頭に比定すると、供伴出土した無蓋高杯 (10) とは時期差が大きい。このため7世紀後半に至り玄室部内の整理が行われたものと解釈すべきであろう。羨道部での検出遺物は7世紀中葉から後半にわたるもので、この時期玄室内埋葬が何らかの理由で制約されたことが考えられ、追葬が羨道部に及んだと解釈できる。また福西14号墳からは「和銅開塚」が検出されていることから、少なくとも奈良時代初期に至るまで、祭祀ないし再利用の歴史があったことがうかがえる。

最後に玄室部は玄門より北側は完全に遺存するが、土地所有者も早急な開発は行なわないと、これ以上の調査は不可能なことなどのため断ち割り調査は実施しなかった。土壟による応急の保存対策を施し、今後の玄室を含めた再調査に備えて現場作業を終了した。

註1 『京都市遺跡地図』京都市文化観光局 1986年

註2 『京都府遺跡地図』京都府教育委員会 1990年

註3 『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会 1971年

註4 『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査—福西古墳群の発掘調査報告一』京都市都市開発局洛西開発室 1970年

V 下津林遺跡 (90MK 8)

1 調査経過

本調査は、南区久世高田町336にある陸上自衛隊関西地区補給処桂支処における、給水管新設工事に伴う立会調査である。当該地は、弥生～古墳時代の遺跡散布地で、過去に弥生時代の竪穴住居址、溝なども発見されている。^{註1} 遺跡の範囲は、東西700m、南北450mであり、今回の調査地はその南部170mに該当する。調査期間は1990年12月から1991年2月までである。

2 遺構 (図17・18) (図版21)

調査地の標高は約20.7mで平坦な地形である。基本層序は、地表下30～40cmまでが盛土及び旧耕土であり、以下に地山と考えられる黄褐色系の粘土層が堆積する。検出した遺構はNo.4～16地点に集中しており、これらは總て地山を切って成立する。各遺構は、幅60cmの工事掘削の断面での確認であるため、形状、性格などは明確ではない。しかし遺構として捉えられるものは總数で15ある。No.7地点で検出した土壌は、幅1.9m、深さ0.5mで、埋土は2層に分けられ下層には炭と弥生土器を含む。No.11地点で検出した土壌は、幅1m、深さ0.3mで、この土壌からも比較的多量の弥生土器が出土している。その他No.4～6、8～10、14～16地点の土壌からも土器が出土している。No.6、8、9、10、13、14地点では炭の混入が認められた。No.20地点では唯一古墳時代の遺物が出土している。

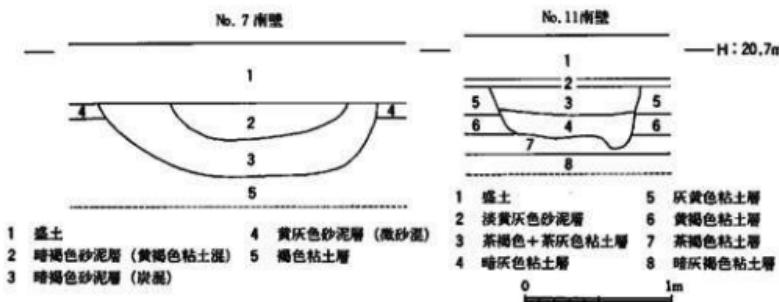


図17 遺構断面図 (1/40)

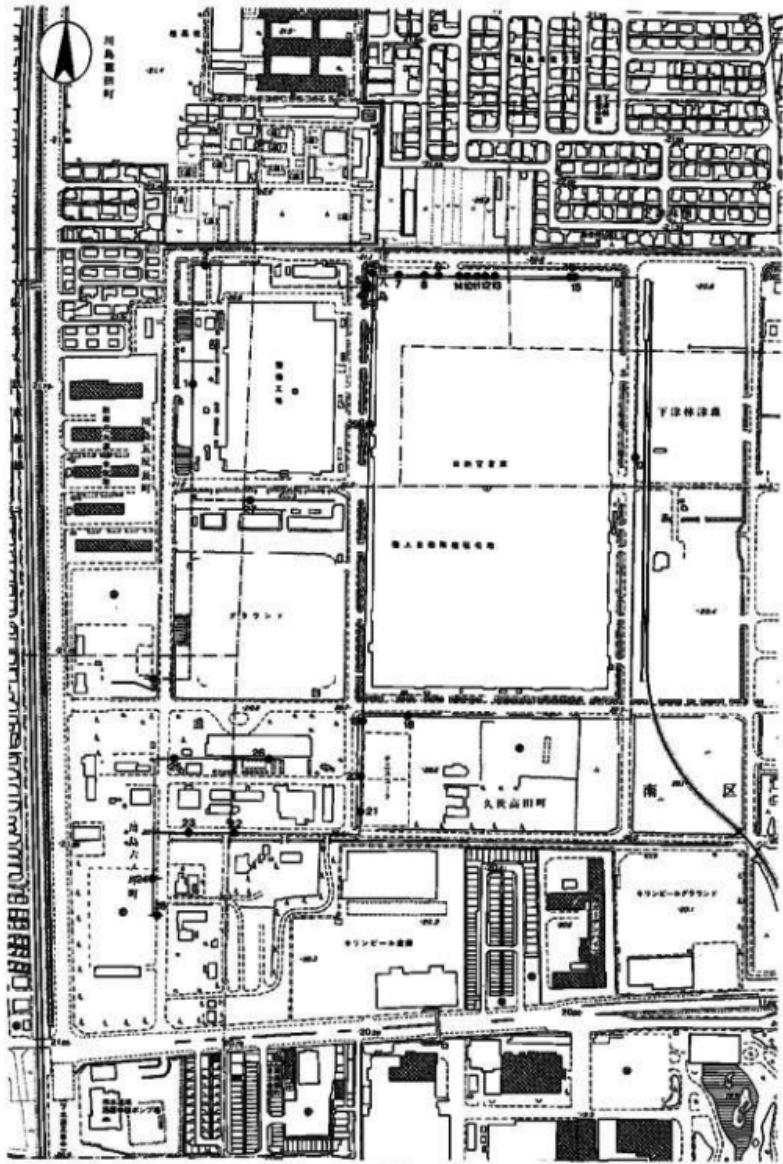


図18 調査位置図 (1/5,000)

3 遺物 (図19) (図版32)

上記の各地点より弥生時代中期後半の土器が出土した。弥生土器には壺・甕の器形がある。他に石器の剥片も各地点より出土している。

壺 全形を知りうるものはないが、口縁部の形態の差異によりA・B・C・Dに分類することができる。

壺A (4) 口縁部は大きく外反し、口縁部端面は下方向にやや拡張し、刻み目を施す。頸部外面は幅広の複帯構成の櫛描直線文である。口径35cm、器厚約1cmを測る大型の壺で灰白色を呈する。

壺B (5) 口縁部は大きく外反し、口縁部端面を上方にやや拡張している。口縁部には装飾は施されていない。口径19.5cm。乳白色を呈する。

壺C (1) 口縁部は短く外反し、口縁部端面には凹線がめぐる。口縁部には装飾は施さ

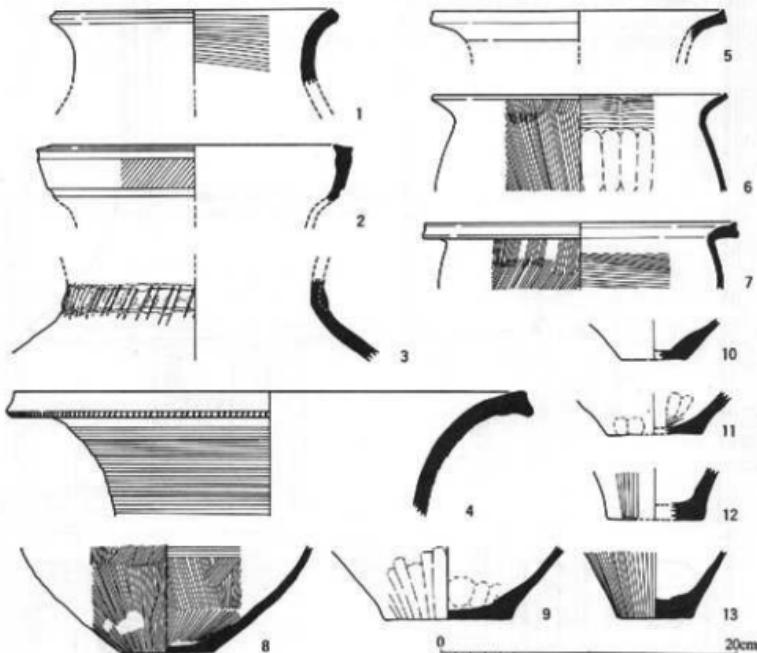


図19 遺物実測図 (1/4)

れていない。口径18.5cm。淡灰褐色を呈する。

壺D（2・3）（2）は口縁部は外反する頸部に屈曲して上方に向って立ち上がり、端部は内側方向にやや拡張し面をなす。口縁部上下に2条の凹線文をめぐらせ、その間に斜め方向のハケメを施す。口縁部内面は横方向のハケメ調整の後横方向のナデ。口径19cmを測る有段広口壺である。（3）は口縁部を欠く。頸部と体部の境界付近にはヘラで刻み目を付けた突帯がある。これは指頭圧痕文の簡略化が進んだものである。頸部径約17cm。

甕 全形を知りうるものはないが、口縁部の形態によりA・Bに分けられる。

甕A（6）ゆるやかに外反する口縁部を有し、口縁端部は小さな面をなす。外面には縦方向のハケメ調整、口縁部内面には横方向のハケメを施す。口径約19.5cm。

甕B（7）「く」字状に強く外反する口縁部端部を上下にやや拡張している。体部外面は縦方向のハケメ調整、口縁部内面は横方向のハケメの後に横方向のナデを施す。口径21cm。

8～13は底部である。平底ないし若干の凹み底をもつものがある。

4 ま と め

遺構の検出状況から考えて、従来の下津林遺跡の範囲内に遺構は收まり、遺跡の南限は、北へ約100m変更できるものと考えられる。遺跡の主要部分は、今回の土壤群を含め北側に広がる様相を示している。

現在、遺跡内及び隣接地では、いまだに木造住宅や畠地などであり大規模な改変が加えられていない土地が多くある。今後の調査で遺跡の範囲、性格がより明確になることを期待したい。

註1 大槻真純「下津林遺跡」「埋蔵文化財発掘調査概要1980-1」京都府教育委員会 1980年

VI 中久世遺跡（90MK9）

1 調査経過

南区久世中久世町四丁目20番地（No.1地点）、同四丁目12番地（No.3地点）、久世殿城町208（No.2地点）の3地点で、送電線路改修に伴う仮柱支線および既存鉄塔建替工事が行なわれる為立会調査を実施した。No.1、No.2地点は1990年12月25・26日の両日立会調査を実施した。No.1地点では、遺構は検出できなかったが、弥生時代の包含層を検出した。No.2地点は、盛土・耕土以下地山となり、遺構・遺物は検出されなかった。

No.3地点は、No.1地点の南20mに位置し、旧鉄塔の基礎により、大半が擾乱されている。中央部で島状に2箇所旧地層が残存（10m²）しており、1991年4月17日の立会調査で住居址状の落込みを検出した。京都市埋蔵文化財調査センターの指導で原因者と協議し、工事を中断して4月20日～24日まで調査を実施した。



図20 調査位置図 (1/5,000)

2 遺構 (図21・22) (図版22)

調査地の基本層序は上から盛土 (50cm)、旧耕土 (15cm)、床土 (5cm)、以下茶灰色砂泥 (地山)となり、茶灰色砂泥層上面で各時期の遺構を検出した。

検出した遺構は、平安時代の溝1条、Pit 4基、古墳時代中期の竪穴住居址1棟 (1号住居)、弥生時代中期後半の性格不明遺構1基 (SX 2)、Pit 13基である。

1号住居址 大半が擾乱により削られており、北西コーナー部、北壁の一部 (2.4m)と床面を検出したにすぎない。平面形

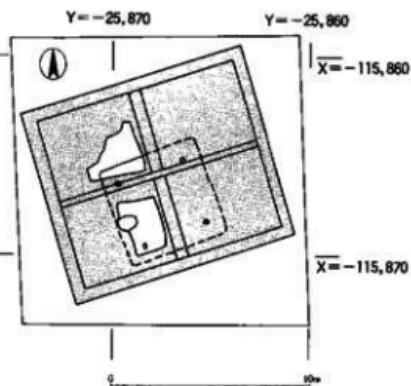


図21 遺構位置図 (1/300)

は方形を呈する。検出面から床面までの深さは22cmである。壁溝は全周せず部分的に検出し、幅24cm、床面からの深さ10cmである。柱穴は南西部の一箇所だけ検出した。西壁中央部付近にあたると考えられる位置に長軸1m、短軸70cm、深さ25cmを測る橢円形を呈する貯蔵穴を検出した。住居址の埋土は3層に分層でき、暗褐色泥砂 (上層)、炭・焼土を多く含む黒褐色泥砂 (下層)、黒褐色泥砂 (壁溝)である。上層では須恵器小片を含む。遺物は、貯蔵穴南側よりまとまって出土した。

弥生時代の遺構 SX 2は、1号住居址南半部と重複しており、地山ブロックを多く含んだ、にぶい黄褐色砂泥層で厚さ10cmある。周囲はすべて擾乱により削平されており、形状等は不明であるが、調査区北半部では同層は検出されておらず、遺構の一部であると考えられる。

弥生時代中期のPitはSX 2の下で13基検出したが、調査面積が狭いため詳細不明である。Pitの深さは検出面から40~50cmあり、1mを測るもの (Pit 21)もある。底部に20cm大の河原石をもつもの (Pit 11・17)や、礎板をもつもの (Pit 19・20・21)がある。遺物の出土量は多くはないがSX 2、Pitから弥生時代中期の土器、石器が出土した。

3 遺物 (図23~25) (図版33)

遺物は、各遺構から、弥生時代中期の土器、石器、木器 (礎板)、古墳時代中期の土器、

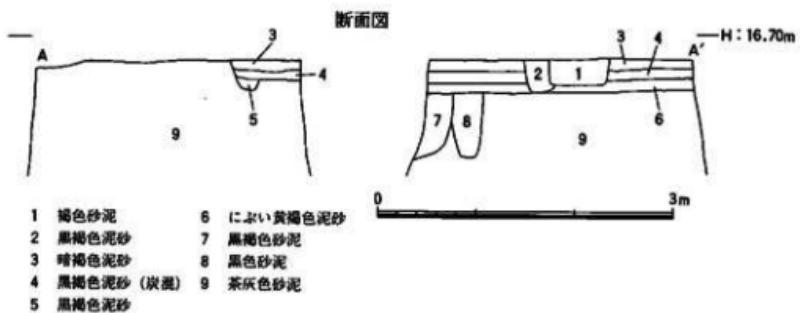
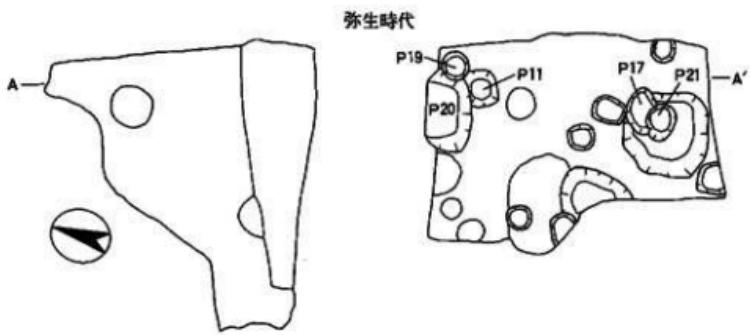
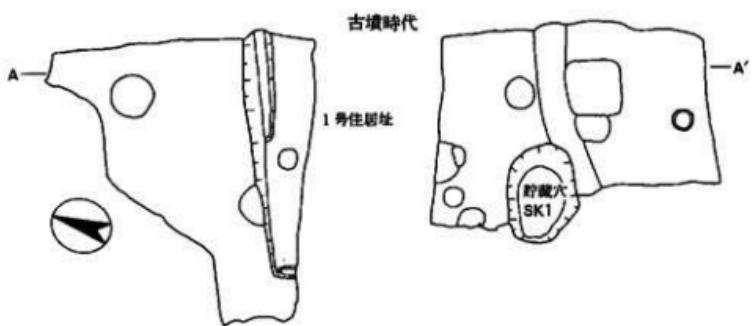


図22 造構実測図 (1/60)

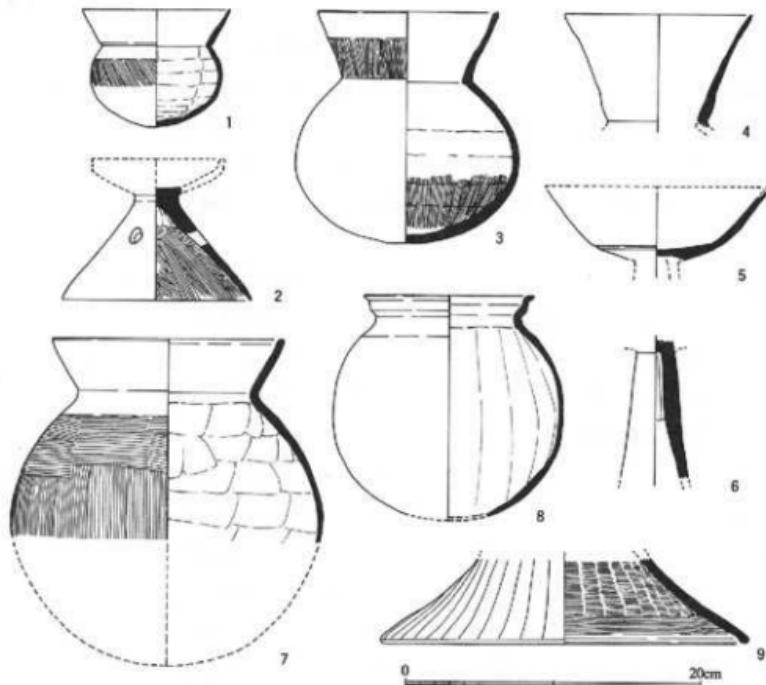


図23 遺物実測図 (1/4)

奈良～平安時代の土器などが遺物整理箱に5箱出土した。このうち、1号住居址、S X 2などから出土した主な遺物を図示した。

1号住居址出土遺物

出土土器の器形には、小型丸底壺、器台、高杯、壺、甕などがある。

小型丸底壺（1） 口縁部は直線的に外上方に開き、体部はわずかに張りをもち、口径は胴部最大径より大きい。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整し、体部外面は斜め方向のハケメ調整を施し、肩部を丁寧にナデ消している。体部内面は横方向のヘラケズリ調整である。

器台（2・9） 2は、皿状の受部と直線的に下方に拡がる脚部からなる小型器台の脚部である。脚部には3個の円孔を穿ち、裾端部はうすく丸くおさめる。外面は細かく横方向の密なヘラミガキを施し、内面は斜め方向のやや粗いハケメ調整である。9は、いわゆる鼓型器台の脚部である。裾端部は内側に肥厚し、端面は内傾する。外面は横方向のナデの

のちやや精彩を欠く放射状暗文を施す。内面は細かい横方向のハケメ調整である。

高杯（5・6） 5は、平らな底部に外傾する口縁部からなる杯部をもつ。杯部外面の底部と口縁部の境は稜をなす。口縁部はナデ調整のちへラミガキを施し、杯部外面はヘラケズリのち粗いヘラミガキを施す。脚部との接合部分には下方から穿たれた4mm程の小円穴が認められる。6は、脚柱部で外面は横方向のヘラミガキが施され、内面はしばり痕が残る。

壺（3・4） 3は、口縁部が直線的に外上方にのび、体部は扁球形をなす。口縁部は比較的短い。摩滅しており調整の観察が不可能であるが、口縁部外面はハケメ調整のち横方向のナデ、体部外面は下半部はヘラケズリ痕が残るが横方向のヘラミガキ調整である。体部内面下半は一定方向のハケメ調整を施す。4は、口縁部が長く直線的に外上方へのびる。内外面とも横方向のヘラミガキを施す。

甕（7・8） 7は、肩の張った丸い体部に外反する口縁部のつく丸底の甕である。口縁端部は内側に折り返しがなく肥厚しないが、端面が内傾するものもある。口縁部内外面を横方向のナデ、体部外面をハケメ、内面をケズリで調整する。肩部はナデ調整で磨消している。8は、丸い体部にS字状に屈曲する短い口縁部のつく東海系の甕である。口縁部は立ち上りをみせ、端部に平坦面をもつ。口縁部は内外面とも横方向のナデ、体部は内外面とも縦方向のヘラケズリ調整を施す。体部の器壁はきわめて薄く、中位付近で2mm前後を測る。底部外面には火熱による器面の変質がみられる。通常台が付く。

弥生時代中期の遺物

全て破片であり全形を知りうるものはない。壺、甕、把手付鉢、脚部のほか、高杯、鉢、水差形土器片もある。

壺（10～13） 10、11は口縁部が大きく外反する広口壺で、口縁端部を上下に拡張する。端面に構造波状文を施す。10は頸部外面に縦方向のハケメ調整を施し、上半部はナデ消している。10はPit 11出土。11はSX 2出土。13は外反する頸部に屈曲して上方へたちあがる口縁部をもつ広口壺である。口縁部に2条の凹線文を施す。Pit 7出土。12はやや内湾気味に直立する筒状の口縁部をもつ細頸甕である。口縁部外面に4条の凹線文と構造刺突文を施す。SX 2出土。

甕（14） 「く」字状に外傾する口縁部をもつ。内外面とも摩滅しているが体部外面は横方向の叩目、内面は粗い斜め方向のハケメ調整の痕跡が認められる。SX 2出土。

把手付鉢（15） 口縁部がわずかに内湾する楕円形の体部を有し、縦位の半環状把手がつ

く。口縁部は刻目と凹線文を施し、体部には櫛描刺突文、櫛描波状文を施す。内面は横方向のハケメ調整をする。Pit 20出土。

脚部(16) 内湾気味の脚部で裾端部は平坦である。脚部外面は縱方向のヘラミガキ、裾部には3条の凹線文をめぐらす。内

面は横方向のヘラケズリ調整である。台付鉢の脚部か。Pit 20出土。

石器 石槍、石錐、磨製石鎌がS X 2より出土した。

石槍(20) 嶺内地方弥生時代の石槍の一般的なものである。基底が欠損しており全長はわからない。両面加工によって仕上げられている。形態的には鋭く尖る先端の三角形部分とそれにつながる中間部からなる。先端部は部厚く尖り、中間部も部厚い菱形の断面をなす。石材はサヌカイト。

石錐(21) 全体がすんぐりした楕円形を呈し、頭部と錐部が明確に区別されていない。剥離加工は粗雑である。両端とも錐部として使用されている。石材はサヌカイト。

磨製石鎌(22) 細長い柳葉形に近い鎌身に茎を作り出している。

4 まとめ

中久世遺跡は桂川右岸沖積平野の微高地上に立地する縄文時代から中世に至る複合遺跡

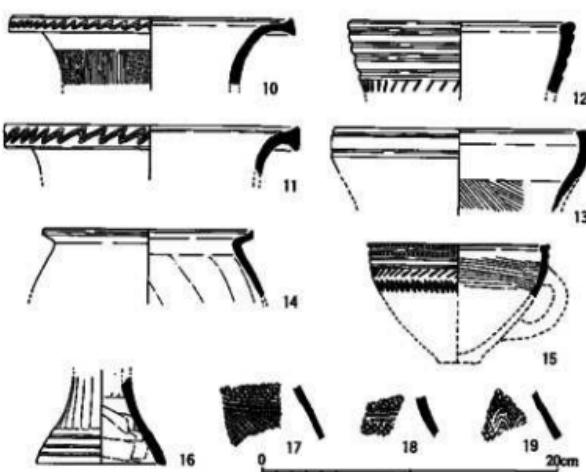


図24 遺物実測図 (1/4)

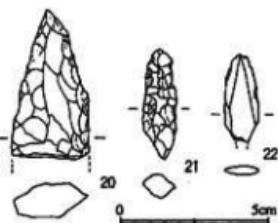


図25 遺物実測図 (1/2)

であり、弥生時代の大規模集落址として知られている。1970年から現在まで発掘調査14件、試掘立会調査85件の調査が実施され、弥生時代から古墳時代の遺構としては竪穴住居址、方形周溝墓、土壙、溝、河川などが検出され、多量の土器類・石器類・木器類などが出土している。これらの調査成果をもとに弥生時代から古墳時代の遺構復原が試みられ、集落や墓域などが想定されている。復原図によれば遺跡の推定範囲の中央部付近で弥生時代から古墳時代にかけて南東方向に流れる河川跡が数条あり、これらの河川に挟まれた微高地に集落が営なまれている。今回の調査地もこの微高地上に位置し、古墳時代中期の住居址及び弥生時代中期の性格不明遺構（住居址の可能性がある）を検出した。当調査地の北80mの調査では、弥生時代後期の住居址4棟、南北30mの調査では弥生時代中期の土壙、溝などとともに、古墳時代前期（庄内式併行期）の住居址1棟が検出されている。当調査地周辺に集落址を想定できるが、住居址の検出数も少なく、また各時期にわたっており、詳細を検討するには至らない。しかし集落址の一端を明らかにしたことは大きな成果である。

中久世遺跡における古墳時代中期の土器の出土量は他の時代の遺物に比べて少なく、その実態も余り把握されていない。今回の調査では比較的良好な一括遺物が得られた。

乙訓地域においては鴨田I～IV類の編年案が提唱されている。^{註1} 鴨田遺跡SX2401、SX3007出土遺物を中心に、型式学的方法のみによって分類されたものであり、やや資料不足という問題を残している。今後の調査において更に良好な一括資料の増加が待ち望まれる。

註1 「鴨田遺跡」「向日市埋蔵文化財調査報告書」第14集 向日市教育委員会 1985年

VII 中久世遺跡 (91MK142)

1 調査経過

南区久世中久世町四丁目45の日新電機株式会社敷地内において社員寮の増築工事が行われる事になった。当該地は中久世遺跡に位置し、周辺では多数の発掘調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の溝・流路、平安時代の掘立柱建物・井戸などが検出され多大な成果をおさめている。また、調査地北東30mの地点にある関西電力の高圧線鉄塔工事に伴う立会調査(90MK9)においても、古墳時代の竪穴住居址と弥生時代の柱穴跡が検出されており、遺構の残存状況がきわめて良好な地域である。

1991年7月25日より建物基礎工事に伴う立会調査を実施したところ、26日に調査地東部において竪穴住居址を検出した。そのため、京都市埋蔵文化財調査センターに本格的調査が必要であることを報告した。同センターの指導で工事関係者と協議した結果、工事日程の変更は困難であるとの事情で、7月27日から30日の3日間、工事と並行して調査を実施した。このため竪穴住居址を含む東部地区約60m²を対象に調査した。

2 遺構 (図26) (図版23)

遺構 調査地周辺一帯は工場や倉庫、事務所となっており、旧耕土面から現道路面まで約1mの盛土が観察される。盛土下、10~20cmの旧耕土(黄灰色砂泥)が認められ、この下層に5cmの床土(によい黄褐色泥砂)と考えられる堅く締った土層がある。これを耕土した時点で各期の遺構が同一面に検出される。遺構成立面は浅黄色砂泥層で各時期の遺構埋土は灰黄色砂泥層からによい黄色砂泥層のものが大半である。遺構成立面の標高は北端で16.25m、南端で16.20mを測り、東西に関してはほとんど差はなくほぼ同一標高面といえる。

検出した遺構には、竪穴住居址1棟、土壙6基、溝4条、河川跡、柱穴17基がある。遺構を時期別に分けると、弥生時代中期、古墳時代前期・中期に属する遺構がある。その他、遺構に伴わない土器の検出として弥生時代後期・奈良・長岡京期のものがある。

古墳時代中期の遺構は、土壙(SK14・16・20)、溝(SD2・3・12)、柱穴(Pit4・19・23・25)などが検出された。柱穴に関しては建築遺構としてまとまるものはない。

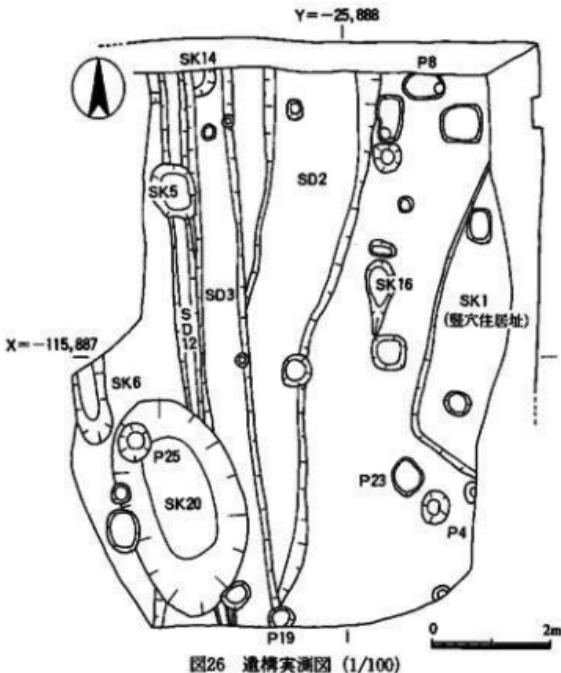


図26 造構実測図 (1/100)

である。中期後半（第IV様式中相）に属する土器を伴う。

S K 20 調査区南西地区に検出した。南北3.5m、東西2.1m、深さは中央最深部で1.4mを測り、断面掘り鉢状を呈する。堆積土層は上層に黄灰色砂泥層、中央下層に青灰色泥土が観察され、下層に滲水の痕跡が認められる。平面形はやや長楕円の卵形を呈する。100個体に近い土器を包蔵しており、完形土器や石器、木片なども出土した。これらの土器は整然と埋納されたものとは考えにくい。中央底部の滲水痕跡は土壤成立から埋没までに若干の時間経過を表したものか。

S D 2 調査区中央部で検出。やや北東から南西に振れる。幅は最大広部で2.1m、狭部で1.3m、深さ40cmを測る。SD3、SD12、SK20、などと重複関係にある。堆積土層は黄灰色系の単純堆積で、ベースである浅黄色砂泥層に掘り込まれた人工的な開削溝と考えられる。出土土器量は少ないが、大型品の投棄が目立つ。

S D 3 調査区中央や西よりに検出。ほぼ南北に通る。幅80cm、深さ30cmを測る。黄灰色泥砂系の堆積土層を持つ。出土土器は少ない。

S K 14 調査区北西隅に検出した。北半と西半が調査区外である。東西1.1m以上、南北50cm以上、深さ30cmを測る。ややまとまった量の土器が出土しており、本調査区では最古期の要素を持つ土器で、中期初頭（縦内第II様式中相）に比定できよう。

S K 16 調査区中央やや北東寄りに検出された。南北1.2m、東西60cm、深さ30cmを測る。平面形は涙滴状を呈する、やや不定形な土壤

S D 12 調査区西寄りで南北方向に検出した。幅40cm、深さ30cmを測る。S D 2、S D 3、S D 12と続く一連の溝遺構の中で最後に開削され機能したものと考えられる。

古墳時代前期の遺構は、竪穴住居址 (S K 1)、土壙 (S K 5・6)、柱穴 (Pit 8)、河川跡 (S D 28) がある。

S K 1 調査区東側で検出、主要部は調査区東壁外にある。西南コーナーから西北コーナーと南西地区の柱穴を検出した。壁溝は不明瞭。埋土は暗黄灰色砂泥、暗青灰色砂泥層の2層の堆積が見られる。最上層には須恵器小片を含む。床面はやや締まった茶褐色泥砂層から成る。この直上に古墳時代前期（庄内式新相）に属する土器の出土があった。住居址検出面から床面までは15cmを測る。

S K 5 調査区西北地区に検出した。東西70cm、南北90cm、深さ30cmを測る。埋土には灰黄色泥砂層の堆積が見られ、平面形は隅丸方形を呈する。

S K 6 調査区南西地区で検出した。南半のみの検出で北半は攪乱される。南北1.4m以上、東西60cm、深さ50cmを測る。平面形は長楕円形を呈する。土器出土量は多い。

S D 28 図示しなかったが調査区西側で確認した。昭和56年度広域立会調査により検出した河川跡の一部と考えられる。S D 2 西方約7mの地点に東肩を検出した。幅は20m以上、深さ2mを測る。ただし調査では東肩方付近に推定ラインを設定されていたが、調査地西方の道路より修正する必要がある。この東肩周辺には多数の土器片の出土があった。東肩約3m前後の確認によれば、古墳時代中期（布留式古相）の土器が量的に最も多く、これを下限として弥生時代中期、後期の土器が検出された。

3 遺物 (図27~34) (図版34~39)

S D 2 出土遺物

S D 2 より弥生時代中期の土器を出土した。弥生土器には壺・甕・高杯の各器形がある。少量であるが石器の未製品も出土している。

壺 全形を知りうるものはないが、形態の差異によりA・B・C・Dに分類することができる。

壺A (2) 口縁部は大きく外反し水平に近く開き、端部下方に刻み目を施す。口縁部内面には3個のコブ状突起を貼り付け、横方向のハケメを施す。胎土に多くの小石粒を含み、頸部外面は剥離が激しい。口径17cm。乳白色を呈する。

壺B (3) 口縁部は大きく外反し水平に近く開き、端面を下方に拡張し、刻み目を施

す。口縁部内面は横方向のヘラミガキを施し、頸部外面は縦方向のヘラミガキと数条の構描文を施す。口径18cm。乳赤褐色を呈する。

壺C（1） 頸部は斜め上方に立ち上がり、上方に屈曲する口縁部をもつ直口の壺である。口縁端部は丸くおさめ、口縁部外面には横方向のハケメの後横方向のナデを施す。頸部は櫛描波状文で装飾する。口径11cm。淡茶色を呈する。

壺D（4） 口縁部はゆるく外反し、端部はわずかな面をなし装飾はない。口縁部内面は横方向のハケメを施し、頸部は縦方向のハケメを施す。口径17cm。淡茶灰色を呈する。

甕 形態の差異によりA・B・C・Dに分類できる。

甕A（6） 波状口縁をもつ小型のもので、頸部でゆるく大きく屈曲し口縁部に移行する。口縁外面に粗い横方向のハケメ、内面には横方向のハケメと波状文を施し、胴部外面は縦方向のハケメ調整の上から上半部に構描文をめぐらす。口径約16.5cm。茶褐色から淡茶灰色を呈する。

甕B（8） 山形口縁をもつ大型のもので、頸部でゆるく大きく屈曲し口縁部に移行する。口縁部外面に斜め方向の粗いハケメ、内面には波状文を施し、胴部外面は縦方向のハケメ調整の上から頸部に直線文をめぐらす。口径約30cm。茶褐色で胴部は淡茶褐色を呈する。甕Aと共に近江系である。

甕C（5・7）（7）は「く」字状に屈曲する口縁部をもち、端部に刻み目を入れる。口縁部内面に横方向のハケメを施し、胴部外面は縦方向のハケメ調整を施し、胴部内面は斜め方向のハケメ調整を施す。口径17.5cm。淡赤茶色を呈する。（5）は口径15.2cm。

甕D（9） 刻み目を口縁部にもつ大型のもので、頸部で屈曲した後、大きく外反して口縁部に移行する。胴部最大径は中位上半にある。胴部外面は縦方向のハケメ調整の上から頸部に一条の直線文を施し、口縁部内面は横方向のハケメ調整を施す。胴部下半から底部にかけては縦方向のヘラミガキが施される。口径29cm、器高45cm。淡赤褐色を呈する。

（10～13）は底部である。平底ないし若干の凹み底を持つものがある。10は底部中央に焼成前に円孔を穿つ。（14）は高杯の破片と思われる。

S K20出土遺物

S K20からはコンテナ40箱を越す量の弥生土器及び石製品が出土した。土器には壺、甕、高杯などの器形がみられる。このうち量的に最も多いのは甕で、ついで壺、高杯の順になる。遺構の性格から見ても他時期の土器の混入ににくいことや遺構規模に比べて出土土器量が多いこと、完形土器の検出があったことなど一括性に富む良好な遺物群と捉えること

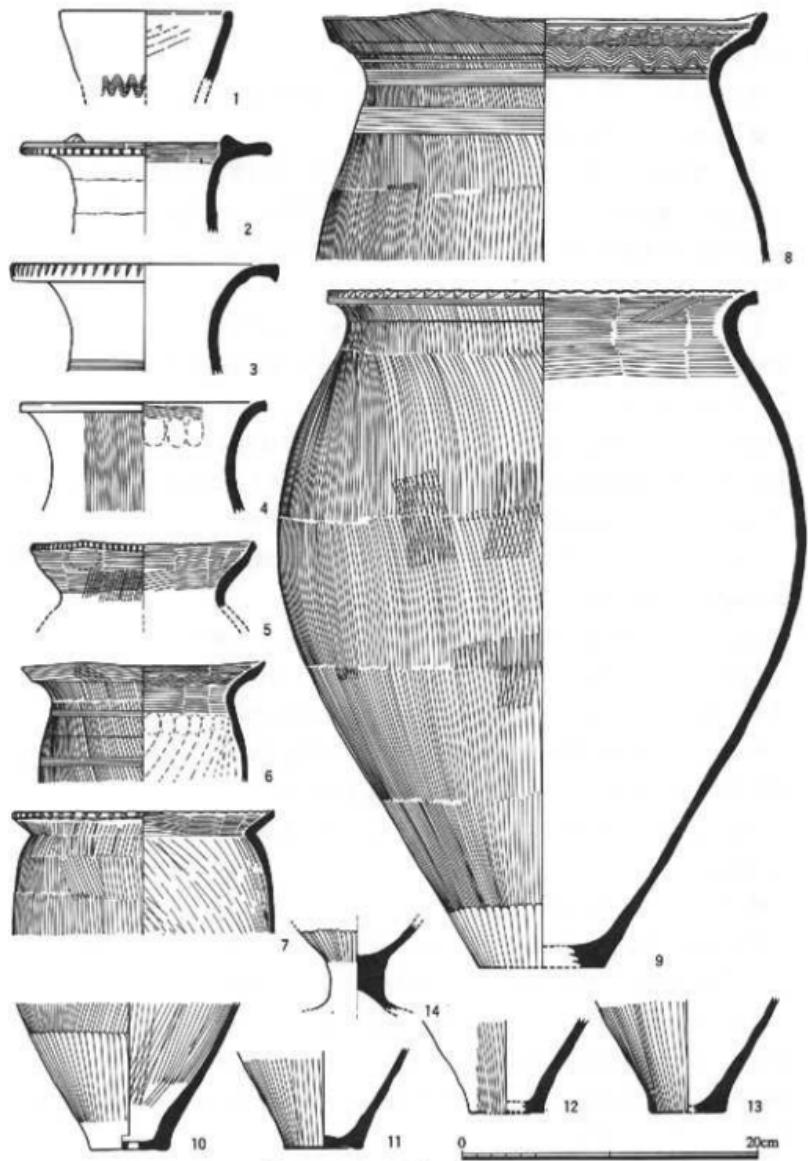


图27 SD 2出土遺物実測図 (1/4)

ができる。

以下土器を中心にして、壺、甕、高杯の順に器形分類と各土器の特徴を列記する。

壺 形態からA～Gに分類できる。

壺A (15・16・21・34～37) 朝顔形に開く口縁部を持つ広口壺で、口縁部端面をやや下方に拡張し、横描波状文や刻み目で飾る。口縁部内面を幅広のハケメ調整、胴部外面は横方向の横描文か横描波状文で飾る場合が多い。胴部下半は縱方向のヘラミガキで器面を調整する。器形は変化しないが大小がある。

壺B (20・22・23・38) 口縁部の外反度が壺Aに比べてやや少ない広口壺である。口縁部外面は横方向の横描文で飾るが、他の文様は施さない。胴部外面上半は縱方向の長いヘラミガキで、内面はナデによる調整を行う。

壺C (26～30) 口縁部内面に1ないし2個一対のコブ状突起を持つ広口壺である。(26・29・30)は横描波状文や横描文で飾るが、(27・28)のようにほとんど飾らないものの二種類がある。口縁部端面を斜め下方に垂下させるものが多い。

壺D (17・32) 小型の壺で、2点が完形で出土した。胴部外面は、ほぼ全面をヘラミガキで調整し、文様は施さない。

壺E (18・24・25) 口縁部に段を持つ有段広口壺である。口縁部端面を内側に拡張するものとしないものがある。いずれも上端に水平面を持つ。段の部分を横描文で飾るものがある。(18)のように小型のものも見られるが、大型の器形が多い。

壺F (31) いわゆる無頸壺で、口縁部外面に2条の凸帯を貼り付け、刻み目を入れる。胴部上半は縱方向のハケメ調整の後、横描文と横描波状文で飾る。

壺G (19・33) 壺と甕の中間型と考えられるもので、口縁部外面を鋭角的な横描波状文で飾る。

甕 形態からA～Eに分類できる。

甕A (41) 図示したのは一点であるが、二点確認することができた。口縁部が短く「く」字状に屈曲し、端面は拡張せず、刻み目が入る。大型の器形を持つ。

甕B (42・78) 口縁部に3ないし4箇所の山形口縁を持つもので、近江地域に類例が見られる。口縁部内面上位に稚拙なハケメの波状文を、下位に粗い横方向のハケメを施す。胴部外面上半には縱方向のハケメの後、横方向の横描文を4条入れる。(42)は3箇所に山形口縁を持ち、深草遺跡出土例がある。

甕C (40・58・60・77) (40)に代表される。口縁部が「く」字状に曲がるもので、胴

部の張りは比較的弱い。胴部外面に縦方向のハケメ、口縁部内面は横方向の粗いハケメを施す。口縁部端面に一条の凹線状の凹みが巡るものが多い。

甕D (43・45・46・48・50・51・54~57・59・61~63・65・68・69・71~76) 口縁部はゆるく外反し、端面は拡張しない。胴部はやや張りが見られるが顕著ではない。口縁部内面は横方向のハケメ調整、頭部から胴部にかけては縦方向の連続したハケメ調整を施すものが多い。口縁部端面に刻み目をいれるものもあるが、無文のものが多い。

甕E (44・47・49・52・53・64・66・67) 口縁部はゆるく外反する。口縁部端面をやや拡張し、稚拙な描波状文を施す。大型の器形を持つものが多い。

高杯 (39) は口縁部内面に横方向のハケメ調整を施す。杯部はやや内湾氣味に斜め上方に立ち上がり、口縁部で小さく外反する。脚部は欠ける。

底部 (82~87) 底部外面にミガキを施すものを疊、ハケメ調整したもの疊とした。このうち木の葉圧痕を持つものと、持たないもの (84) がある。木の葉圧痕を持つものには底部が平坦なもの (82)、ドーム状に凹むもの (83)、高台状になるもの (86) がある。高台状になるもの (85) には内外の葉痕がずれるものも認められる。(87) は底部にヘラケズリを施す。

石製品 (88~90)

石庖丁 (88) 半円形に湾曲する完形品である。池上遺跡分類のFタイプとされるもので、内湾刃形態をとる。長さ14cm、幅4cmを測る。条痕が斜めと縦方向に認められ、頻繁な使用を物語る手擦れ摩滅が観察できる。材質は黒色片岩である。

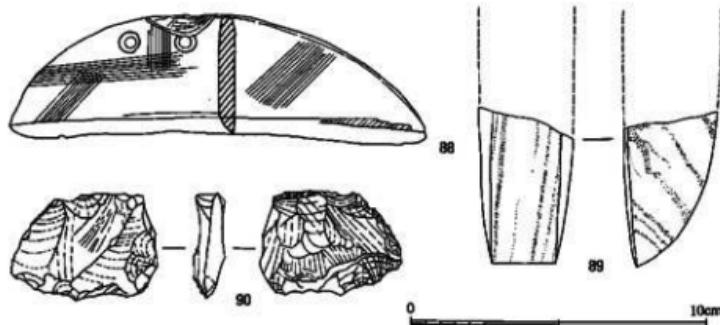


図28 SK20出土遺物実測図 (1/2)

柱状片刀石斧（89）のみ形を呈する。中央部は折損するが、刃部は鋭さを保ち摩滅はしていない。材質は緑色砂岩である。

不定形刃器（90）一見剝片に見えるが、少なくとも2方向に刃の調整痕が認められるところより、石器と認めた。材質はサヌカイトである。

4 まとめ

遺物 今回調査の土器整理に関しては完結状態ではない。しかしSK20出土の土器群の重要性を考慮すれば、この土器の紹介と評価を含めた将来的な叩き台の必要が迫られているといえよう。整理途中ではあるが、土器群の特徴と傾向から時期的位置付けを敢えて試みる。SK20を構成する壺には、ラッパ状に開くやや長頸気味の頸部を持つものや、同様な突起を持つものがある。しかし口縁部端面は充分な拡張傾向を示しているとはいえない。また有段口縁壺も口縁部が短く、段部へ移行するカーブにきれがなく古式の要素を残すと言えよう。壺全体に対する櫛描文や櫛描波状文の施文傾向も完成されたものとは言いがたく、稚拙な要素を濃く持っている。壺は口縁部がゆるく外反する第II様式以来の伝統的な如意形口縁を持つものと、新式の口頸部から口縁部にかけての屈曲が明瞭化する、いわゆる「く」字状口縁部を持つものがある。壺全体では、この「く」字状口縁を持つものがほぼ1/3程度を占めているのが観察される。胴部の張りに関しては、上位付近に最大径を持つものが見受けられるものの量は少ない。近江地方の影響を受けると考えられる、山形口縁を持つものが含まれ、より古式と考えられる波状口縁を持つものも一点確認できる。壺の施文に関しては口縁部端面に刻み目を持つが多く無文のものは少ない。高杯は一点ではあるが第II様式に通有な形態を持つものが出土しており、古相的な傾向を保つ。

以上を総合して、土器群に対する時期を付加すれば、弥生時代中期中葉としての位置付けは動かないと言える。ただ畿内地方の中での地域的要素を加味した位置付けを考えるなら、畿内第III様式古相を中心として、第II様式新相を色濃く残す土器群と言うことができよう。さらに地域的特徴は、近江、山城、摂津の共通の範囲に含まれ、その中の小変化は、遺跡の立地する地域によって異なる。近江地域の山形口縁を持つ壺はSK20では2点、その他で2点と少なく、乳状突起を持つ壺の方が量的に多い。波状文は摂津地域よりも稚拙である。投棄された状態が反映しているとは言え、全体的には乙訓地域の特色をよく示している。さらに北山城盆地西側と東側でも土器変化が認められるなど、土器比較研究上きわめて良好な一括的土器群である。

遺構 調査地での時期的に最も古相を示す土器を伴う遺構はSK14であり、SD2、SD3、SD12、SK20、と続く。SK14が弥生時代中期初頭（畿内第II様式中相）で、その他のやや後出して中期前半（第III様式古相）と比定できよう。しかし後者4遺構に関しては、土器形式からの時期差を示す要素は抽出し難く、重複関係から上記の成立順位を付与した。以下、中期後半や後期では一部の柱穴を除いて明確な遺構の成立はない。古墳時代前期（庄内式新相）にはSK1、SK5、Pit8、及びSD28（布留式古相）など、再び遺構の増加が窺える。その後、奈良・長岡京期に至るまで土壙、柱穴などの遺構・遺物が少量ではあるが連続している。

調査地での遺構の展開と消長の特徴として、弥生時代中期後半・後期（畿内IV様式・第V様式）の遺構の減少あるいは希薄化が挙げられる。中久世遺跡は中期初頭に始まり、中期前半に増加期を迎えるが、その後沈滯に向かう。後期末葉から古墳時代前期にかけて再び増加期が訪れる。農耕を基礎とする社会にとって、天候を含めた自然条件の変化は、社会構造の流動化に直接繋がる可能性が高い。中久世遺跡は、遺跡主要部を幅20mを越す河川が貫流するという極めて特殊な条件を抱えており、生産基地としての村落立地上の脆弱性が指摘できる。

こうした観点と調査の成果から、畿内及び山城地域を巻き込んだ、第III様式から第IV様式、第IV様式から第V様式への土器変化の推移を、中久世遺跡はより切実な消長といった形で具現した可能性として読み取るべきかもしれない。既往の主要調査出土の土器様相に限ってもほぼ同様な報告があり、調査地の遺構の増減傾向と軌を一にしたものと言ふことができる。

一方竪穴住居址に関しては、既往の調査でもその検出は少なく、集落としての主要部を確定できていない。弥生時代後期及び古墳時代前期の住居址については、昭和56年度概要^{注1}、平成元年度概報^{注2}、本年度概報（90MK9）に報告がある。本調査検出の住居址は古墳時代前期のものであり、弥生時代中期初頭から前半にかかる住居址の検出報告はない。しかしながら大量の中期土器を一括出土した土壙（SK20）の検出は、中久世遺跡調査史上最初のものであり、中期住居址を展開する中心地区が調査地周辺に比定できる重要な根拠が得られたといえる。この意味で今回検出の遺構群は、中久世遺跡調査上重要な画期を提供したものと評価できよう。

- 註1 久世康博「Ⅲ—5 中久世遺跡」昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編) 京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 註2 星野歎二、他「裸草遺跡」「古代学研究」第13号 1965年
- 註3 「池上遺跡・四ツ池遺跡発掘調査報告書」石器編 關大阪文化財センター 1979年
- 註4 「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市教育委員会 1982年
- 註5 「京都府桂川右岸流域下水道管渠布設工事に伴う発掘・立会調査報告」昭和54・55年度 京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 註6 關京都市埋蔵文化財研究所「中久世遺跡発掘調査概報」昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
- 註7 家崎孝治「I—3 中久世遺跡」「京都市内遺跡試掘立会調査概報」昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
- 註8 吉村正親「II 中久世遺跡」「京都市内遺跡試掘立会調査概報」昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
- 註9 上村和直「中久世遺跡発掘調査概報」昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 註10 吉崎伸「中久世遺跡発掘調査概報」平成元年度 京都市文化観光局 1990年

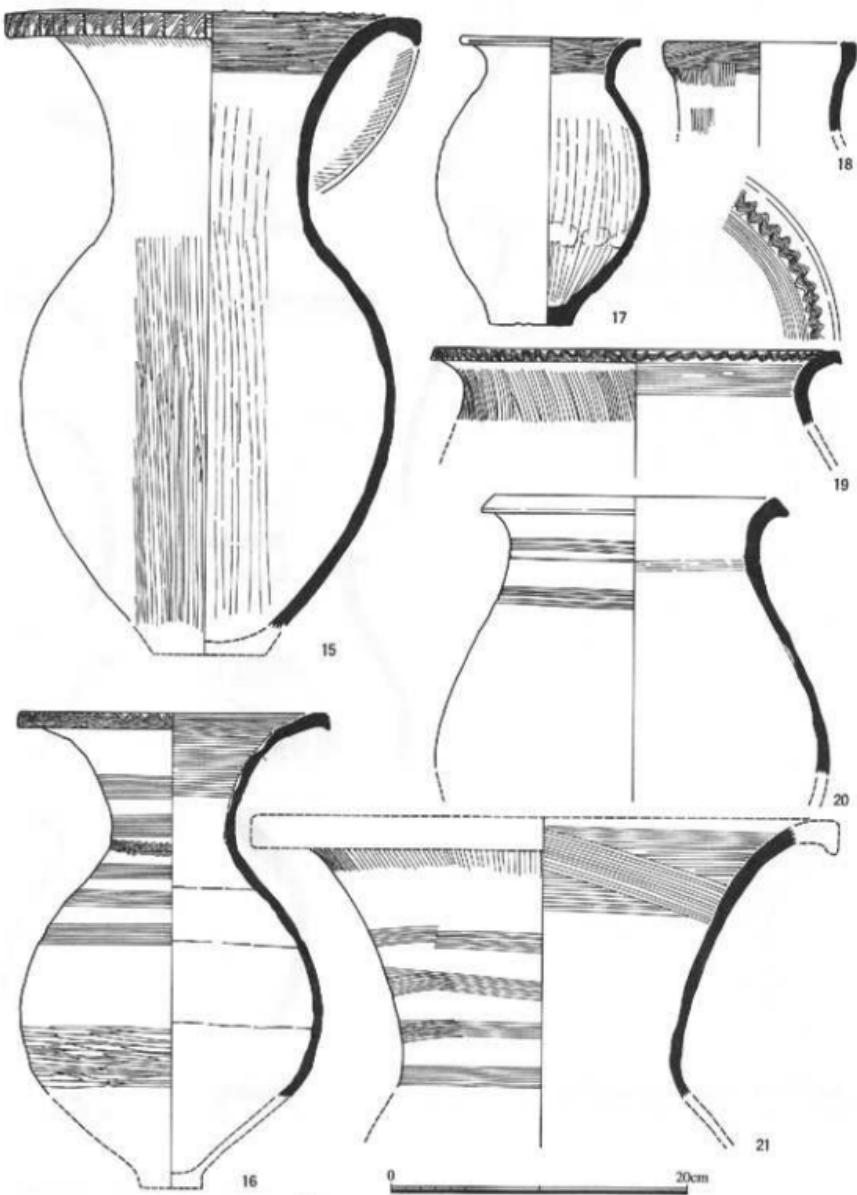


图29 SK20出土遗物实测图 (1/4)

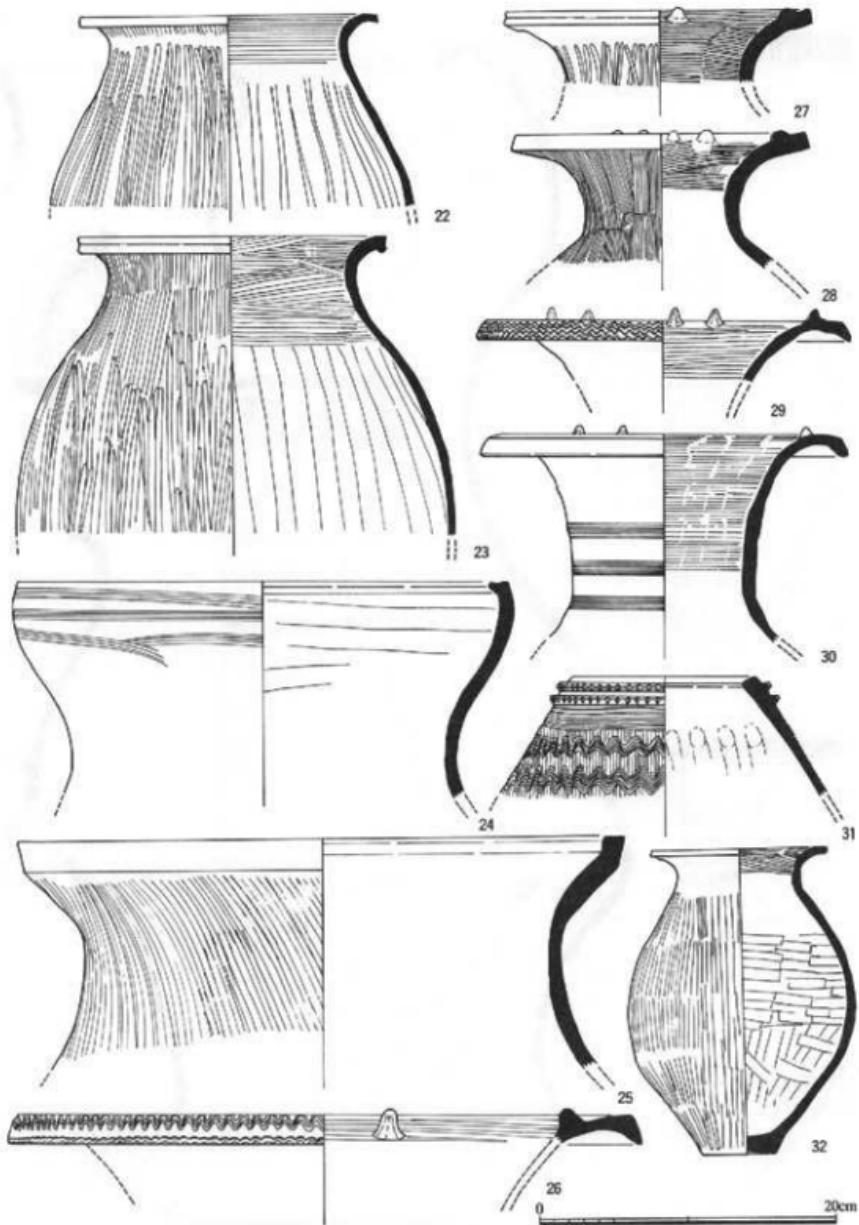


图30 SK20出土遗物实测图 (1/4)

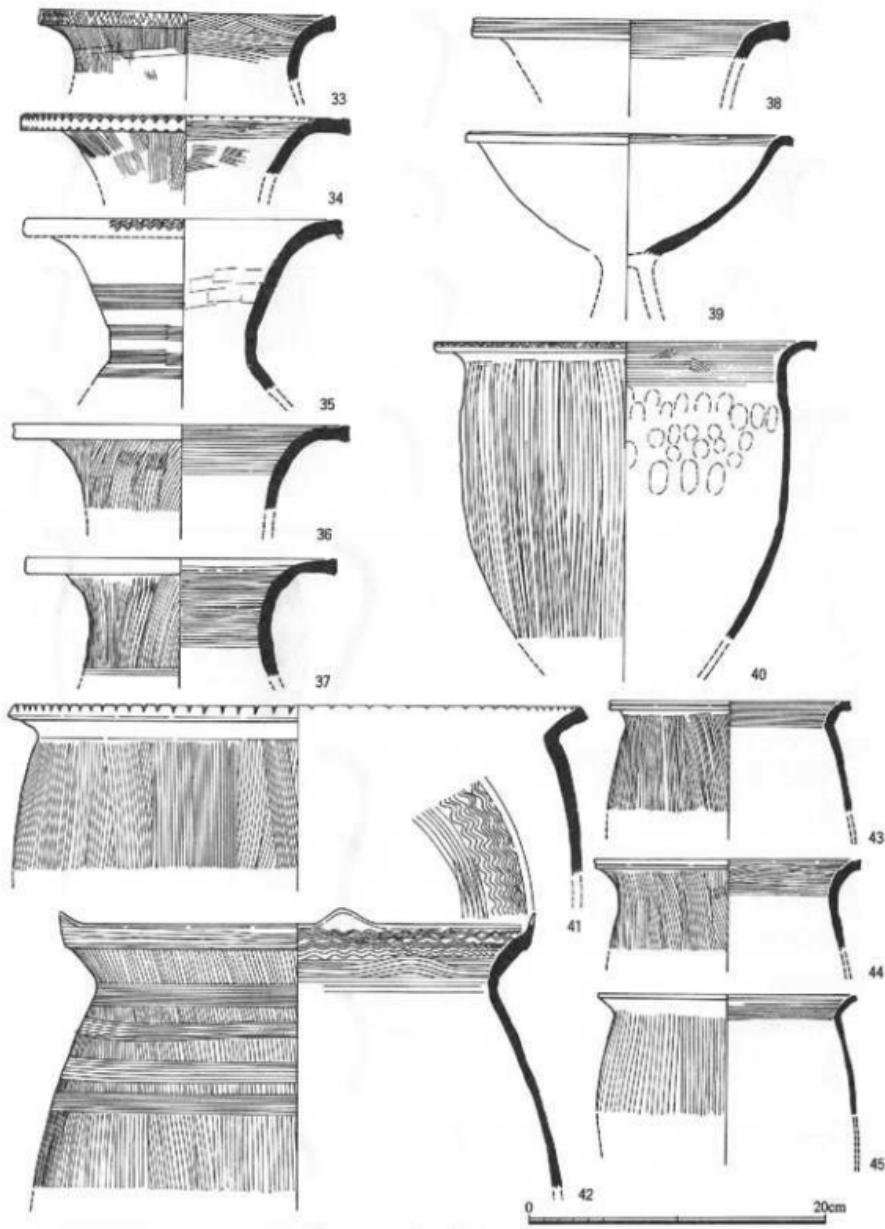


图31 SK20出土遗物実測図 (1/4)

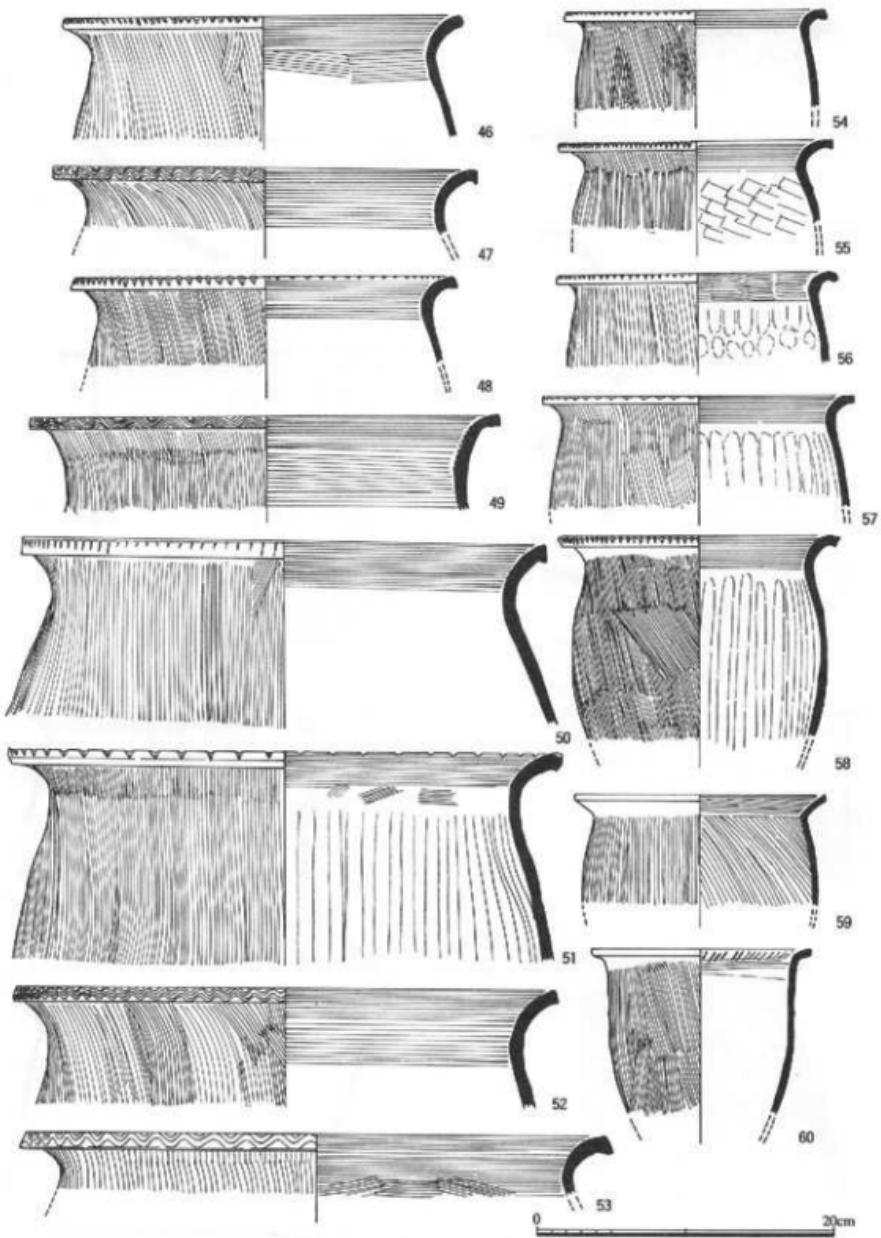


图32 SK20出土遺物実測図 (1/4)

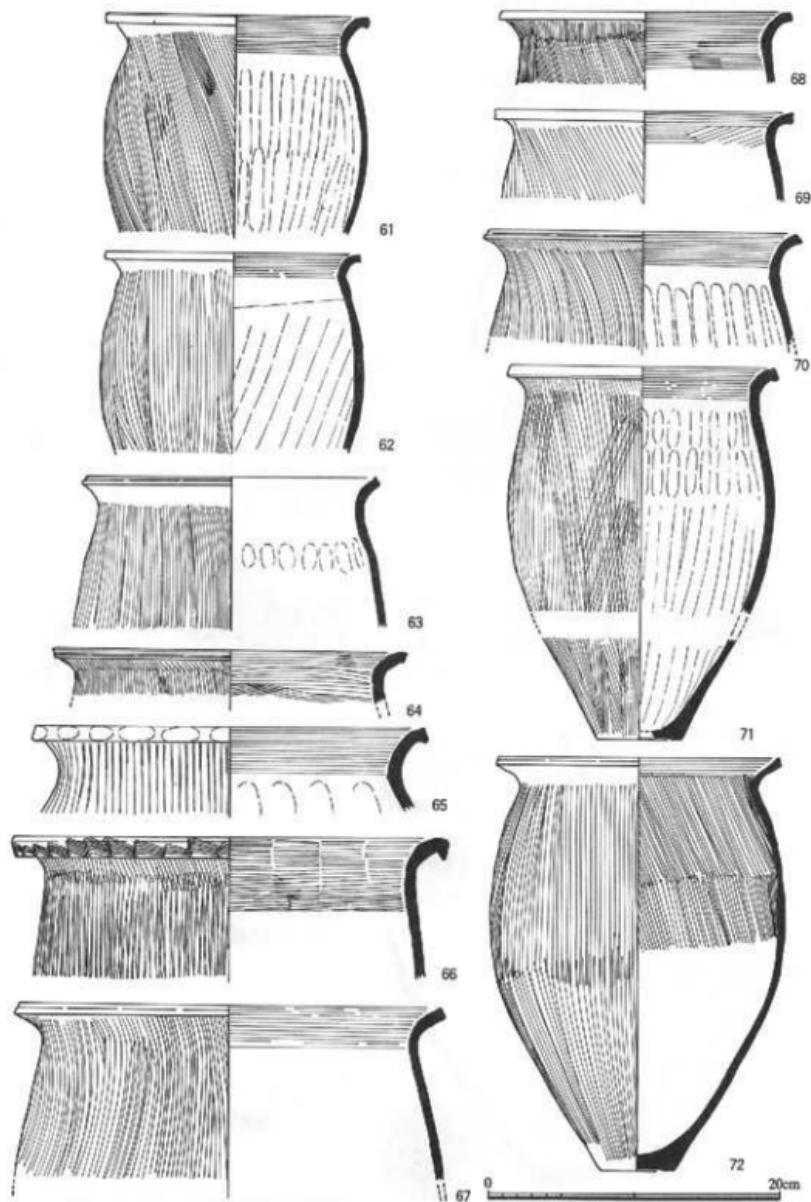


図33 SK20出土遺物実測図 (1/4)

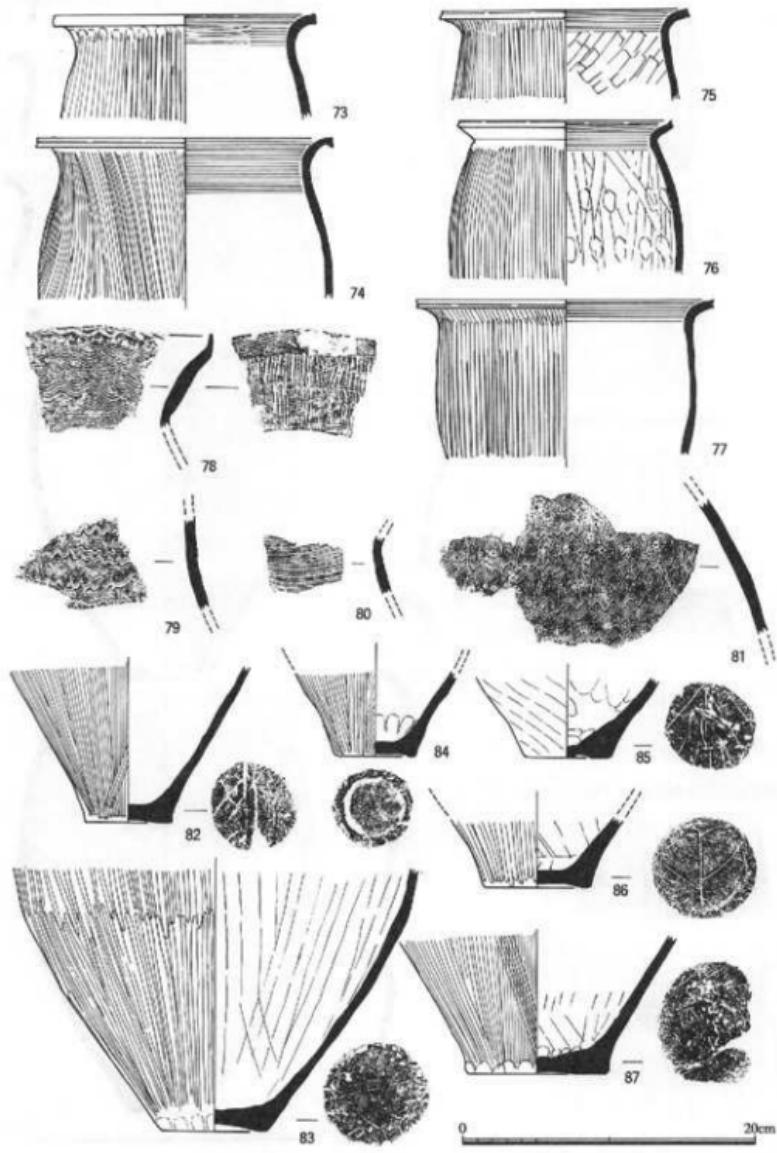


図34 SK20出土遺物実測図 (1/4)

VIII 烏羽離宮跡 (91T B189)

1 調査経過

調査地は、京都市伏見区中島秋ノ山町に位置し北殿跡の推定地内に相当する。敷地の北側には名神高速道路が東西に通り、すぐ西側には鴨川が南北方向に流れている。当地に事務所の建設が京都市埋蔵文化財調査センターへ提示されたため、その工事に並行し埋蔵文化財の立会調査を実施した。

建設用の掘削は、地表下1.2m前後の深さで敷地の北側から始められた。その結果、地表下1.1mから1.2mで、烏羽離宮に使用されていたと考えられる平安時代後期の瓦が出土した。また、断面にも烏羽離宮跡の造構面が所々で観察できた。このため、原因者・工事関係者と現地で今後の調査について協議をした結果、建設業者が造構面に影響しない深さで掘り下げを終了した後に一部発掘調査が実施できることになった。

発掘調査は、重機掘削した後に調査区を設定し掘り下げを開始した。調査区の北東部では、瓦の出土が顕著であった。また、南西部では流路跡を検出した。調査終了後は、残土の搬出をした後に、調査区を碎石で復旧した。

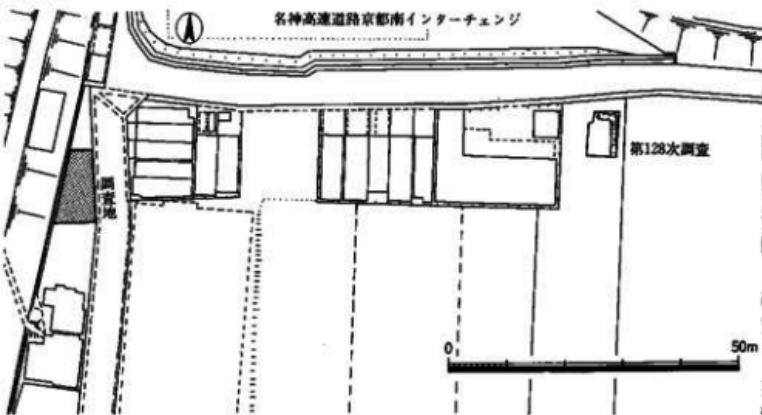


図35 調査位置図 (1/1,000)

2 遺構・遺物 (図36) (図版24)

調査の結果、検出した遺構は瓦溜め・土壌・流路などである。また、鳥羽離宮造営以前の遺物を含む包含層も発見した。調査地は、数年前に一部盛土され駐車場として利用されていた場所である。

調査区の基本層位は、現地表面から20cmまでは最近の盛土である。その下には、オリーブ褐色砂泥・褐色砂泥の2層が地表下70cmまでみられる。その下層には、暗褐色粘土・褐色砂泥の各層が堆積している。そして、鳥羽離宮跡関係の遺構直上面にみられる暗褐色砂泥となる。

S X 1 丸瓦・平瓦が折り重なるように出土したが土壌内に廃棄されたものではない。

S K 2 東西に長い方形の土壌と考えられる。深さは10cmから20cm前後と浅い。埋土内からは、平安時代後期の土師器片が若干出土した。

S D 3 南北方向へ流れる流路の東肩の一部を検出した。層位の前後関係や出土遺物などから流路は、鳥羽離宮が廃絶した以降に成立したものである。

遺物は、S X 1 から丸瓦・平瓦が整理箱にして3箱前後出土した。これらの瓦は全て山城産であった。この他、鳥羽離宮造営以前の遺物包含層から平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器・綠釉陶器・灰釉陶器などが出土したがいずれも小片である。

3 まとめ

今回の調査や付近の立会調査などによって、北殿跡の遺構配置をかなり具体的に知ることができるようにになった。これによって第116次調査地が比較的新しい時期の流路内に位置していた可能性が考えられる。

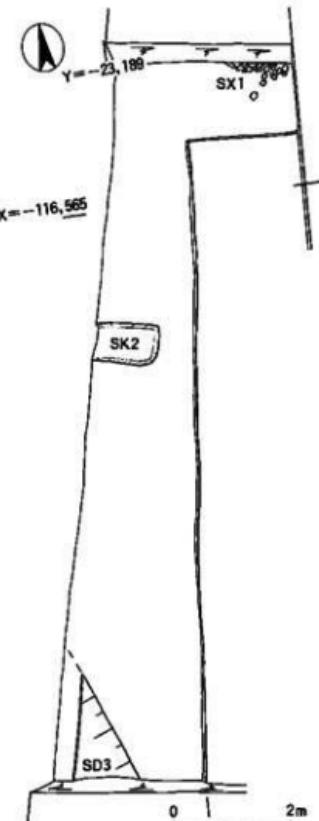


図36 遺構実測図 (1/100)

IX 法住寺殿跡 (91R T 6)

1 調査経過

調査地は東山区本町六丁目3番地に所在する。鉄筋コンクリート建物建設に伴う立会調査である。当該地は後白河法皇が永歴二年(1161)に院御所を営んだ法住寺殿の北西部に位置する。1991年4月16日に調査を実施したところ、調査地南側の地表下0.6mで柱穴、土壙を検出。さらに北側でも地表下0.8mで室町時代の東西方向の溝、路面状遺構を検出した。遺存状態が良好なため、京都市埋蔵文化財調査センターに実状を報告した。同センターの指導で施工業者と協議した結果、4月17・18日の2日間で調査を実施することになった。

調査は北側の溝を主眼におき、東西2.5m、南北7mの調査区を設定して行った。

2 遺構・遺物(図38)(図版25)

調査地の基本層序は地表下0.4~0.5mの現代盛土、0.2mの旧耕土が調査地全体に堆積する。南側では、この下層がオリーブ灰色砂泥層(17層)の地山となる。この面で近世の井戸、土壙、柱穴を検出した。北側では暗灰黄色砂泥層(礫混)(4層)、暗褐色泥砂層(5層)の下層に室町時代の柱穴(Pit 1)、東西方向の溝を3条(S D 2~4)、平安時代後期の東西方向の溝1条(S D 5)を検出した。

Pit 1 径0.3m、深さ0.2mで円形を呈する。埋土より土師器片が出土。

S D 2 幅0.5m、深さ0.1mと浅い。

S D 3 オリーブ褐色泥砂層(礫混)(10層)を南肩として成立する。幅0.9m、深さ0.3m。堆積土はオリーブ灰色砂礫層(9層)である。溝内からは土師器、焼締陶器、青磁など室町時代の遺物に混って平安時代後期の瓦、土器類も出土した。

S D 4 暗灰黄色砂泥層(13層)を南肩として成立する。幅1.7m以上、深さ0.7mを測



図37 調査位置図(1/5,000)

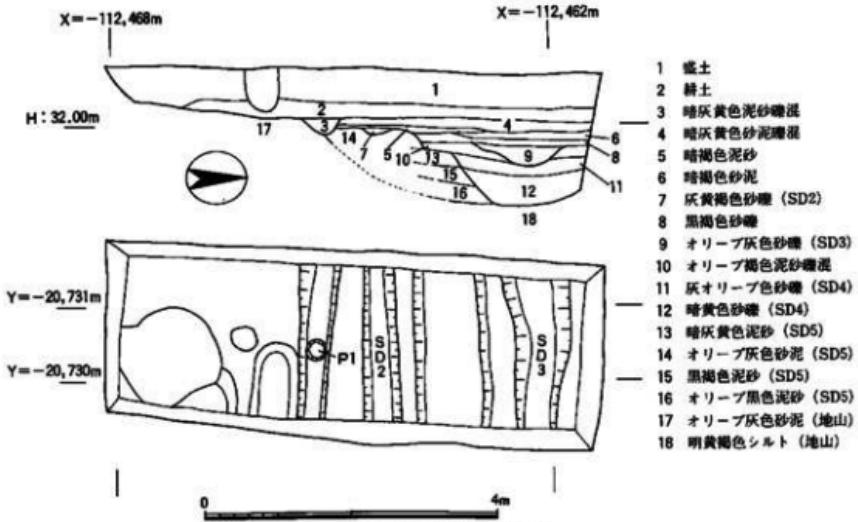


図38 遺構実測図 (1/80)

る。堆積土層は2層に分かれいずれも砂礫層である。溝内からの出土遺物は土師器、青磁、焼締陶器、瓦器、瓦などが出土した。SD 3と同様に平安時代後期の遺物を共に出土する。

SD 5 SD 4 の肩部を堆積土とする溝で、深さ0.7mを確認したのみである。溝内より平安時代後期の土師器皿が数片出土した。

3 ま と め

今回の調査で検出した遺構は、開始当初、立会調査で暗灰黄色砂泥礫混（4層）が平安京七条大路の延長上の路面状遺構と想定し調査を実施した。しかし調査の結果、礫が大きく、凹凸があり、土の綺りかたなど堆積状態は通常平安京跡で検出される路面遺構とは異なっていた。つまり、これらの堆積土は平安時代後期から室町時代の溝（SD 2～5）が埋まり、整地されていた土層であることが判明した。

鴨川を越えて東山地域にも白河街区のような平安京の条坊制に基づく区画の存在を明らかにすることは出来なかった。しかし、平安時代後期から室町時代の東西方向の溝を検出したこと、及び溝が時代の経過と共に規模の縮小が行われる変遷過程を確認できたことの意義は大きい。この周辺での法住寺殿に関連した明確な遺構はまだ発見されていない。今後の調査に期待する。

X 栗栖野瓦窯跡 (90 R H 7)

1 調査経過

調査地は、左京区岩倉幡枝町一帯において公共下水道を敷設することになり、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により工事に伴う立会調査を実施した。当地域は奈良時代前期から平安時代後期に至る「史跡栗栖野瓦窯」を中心とした岩倉幡枝瓦窯群にあたる。また、調査地中央は元稻荷窯跡・平安後期の散布地、北端は妙満寺窯跡に該当しており、関連する遺構などの検出が期待された。立会調査は、1990年5月25日から1991年4月24日にわたって断続的に行なった。

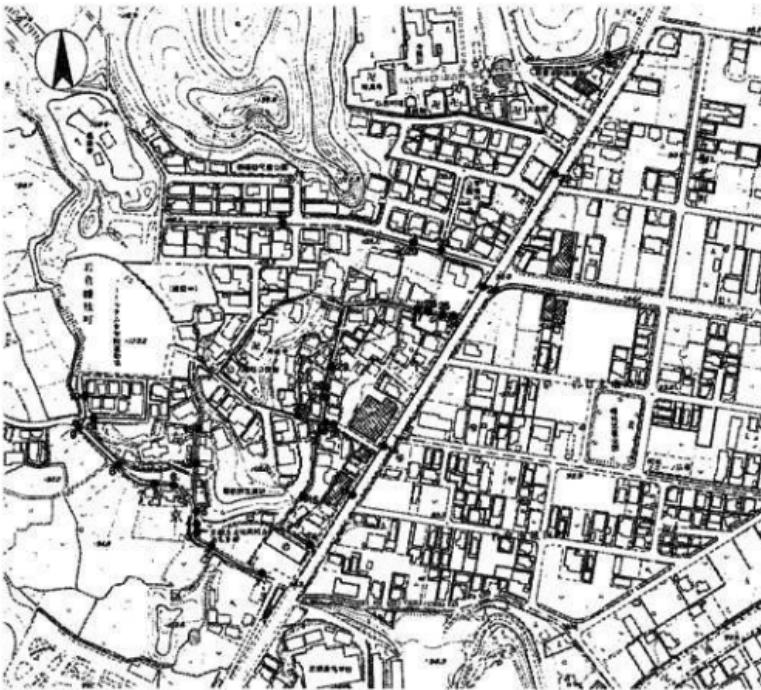


図39 調査位置図 (1/5,000)

調査の結果、新たな窯跡などは検出されなかったが、平安時代前期の遺物を含む灰原、多量の室町時代の土師器皿を含む土壤を検出した。また、遺跡周辺の旧地形や地質などを確認した。

2 遺構 (図39~41) (図版26)

丘陵南側 栗栖野瓦窯跡の点在する丘陵地の南側

の旧道沿いでは、地表下1.0~2.0mにて上層の湿地

状堆積と下層の流れ堆積層が西 (No.9) ~東 (No.1)

盛 土

H: 97.5m

へ深くなつて続いている。No.12・13は谷筋部分で、

丘陵地西側の窯跡から流出した灰原などが検出され

た。湿地はNo.4を肩口としてNo.3~1へとより深く

南へ落ち込んでいた。

No.1では、地表下2.65m以下の流れ堆積の砂礫層

より平安時代中期の須恵器杯片、軒丸瓦片が出土し

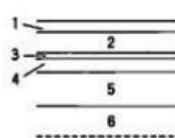
た。窯跡から流出したものと考えられる。

No.12では、地表下0.63mにて、幅1.25m、深さ37

cmの灰原層で埋まった落込みを検出した。埋土は6

層に分けられ、綠釉瓦片、土師器片、須恵器片が出

土した。



0 1m

- 1 暗茶褐色泥土層 (小礫・炭混)
- 2 暗茶褐色泥土層 (粗砂・炭混)
- 3 灰層
- 4 暗茶褐色泥砂層 (炭混)
- 5 灰白色粘土層
- 6 灰色粘土層

図40 No.13遺構断面図 (1/40)

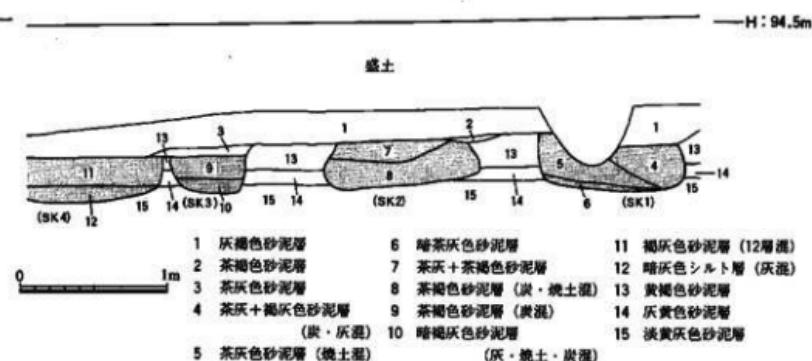


図41 No.24遺構断面図 (1/40)

No13はマンホール部分で、地表下0.83~1.27mにて灰原が検出され、1.27m以下は粘土の地山となっていた。灰原は、4面の掘削断面で観察できたが、北東から南西に少し傾斜していた。灰原は上から小礫・炭混じりの泥土層、粗砂・炭混じりの泥土層、炭層、泥砂層の4層に分けられ、上の3層からは平安前期の綠釉瓦片・鶴尾片・軒丸瓦片・須恵器壺・杯・甕片などが多く出土した。東側の丘陵地西斜面の灰原で、1985年に当研究所が立会調査で検出したものと同一と考えられる。

丘陵東側 丘陵地の東側の南北幹線道路沿いでは、流れ堆積・湿地状堆積で、No32・28・16・17・14と北から次第に深くなる。全体的には地表下0.8~1.2m以下から2mぐらいにて認められた。

No15地点は幹線道路より1本西側の道路にあたる。京都市埋蔵文化財調査センターが1985年に発掘した瓦窯跡の東側にあたるが、斜面を削平して道路を作ったため遺構面から一段低くなっている。盛土下で泥砂・礫の地山となっていた。

さらに北側の十字路近辺のNo18~23では、全体的に地表下0.5~1.0mあたりで平安時代の包含層や整地層がみられ、1~1.5m以下では粘土・砂泥の地山となる。No19では、遺物はみられなかったが、幅2.8m以上の大な落込みも検出した。立会調査では明確な遺構は検出できなかったが、現地形の傾斜はゆるやかであり残存状態は良好と考えられる。

丘陵北側 丘陵地の北東のNo24~27では6基の土壙を検出した。No24では、盛土下に厚さ15~30cmの耕土層があり、地表下0.7~0.8m以下は砂泥の地山となる。この層を肩とし、SK1は幅1m、深さ40cm、SK2は幅1.1m、深さ35cm、SK3は幅60cm、深さ35cm、SK4は幅1.1m以上、深さ30cmと4基の土壙を検出した。いずれの土壙も室町時代の土師器皿が重なってぎっしりと詰まっていたが、土圧ですべて粉々になっていた。どの土壙も焼土・炭・灰が多く混じっており、当初は土師器皿を焼いた窯かと考えたが、土壙の内面の土は焼けておらず、窯跡ではないと結論を出した。^{註3-4}

No25では、地表下32~47cmの包含層から炭片・焼土・窯体などが出土した。さらに60cm以下は粘土の地山となり、これを肩とする幅55cm、深さ20cmの土壙を検出した。土師器皿片と根石と考えられる15cm角の石が1個出土した。

No27の東側では、地表下35cm以下は泥砂・粘土・粗砂の地山となる。西側では30~47cmの包含層から室町時代の土師器皿片、瓦片などが出土した。この層を肩とした、幅1m、深さ60cmの土壙を検出したが、遺物は出土しなかった。

丘陵西・北東側 丘陵地の西側と北側のNo10・11・29・30・31は国立京都国際会議場建

設時の土取りなどで削平されたため、盛土下は岩盤の地山となっていた。また、北端のNo.33では、妙満寺窯跡に推定されたが、関連する遺構は検出されなかった。

3 遺物 (図42~46) (図版40~43)

土器類

ここで図示したものは、No.13地点で出土したものである。

須恵器 (1~21・26~29・68)

壺 (1~4) 口径18~21cm、器高2~3cmである。天井部の形態は平坦なものと、やや高くなる2種類がある。口縁部は強く屈曲する。

杯A (10・11) (10) は口径が12cm。いずれも高台をもたない。底部に回転ヘラオコシのまま調整を加えない。

杯B (5~9) 口径は大型 (7・8) が19cm前後、小型 (5・6・9) 15cm前後である。いずれも高台をもつと考えられる。(9) はほぼ完形で、底部外面に「南」の墨書きがある。

皿 (12・13) (12) は口径が20cm、(13) が口径22cmである。回転ヘラオコシ時に、屈曲に力が加わり変形する。底部は平坦に仕上がっていらない。

壺 (17) 下半部のみの破片。体部はほぼ直角に立ち上がる。通常の巻き上げ長頸壺とは、胎土、調整ともに異なる。

壺 (18) 割部のみの破片。ロクロの引き上げ痕が認められる。

羽釜 (19・68) (19) は口径28cm。頸部はやや上向に張り付けた後に横ナデを施す。口縁は内傾する。色調は灰色で、別に灰白色のもの (68) もある。同様のものは、以前の調査で出土している。

甕 (14・26・28) (14) はよく焼きしまっているが、乳白色を呈する。2個体出土。(26) は口径43cm。口縁が大きく外反し、口縁端部は下方に鋭く尖る。(28) は口径62cmの大甕。口縁はやや外傾し直線的に立ち上がる。内面には青海波タタキ、外面は縦方向のタタキを施す。

鉢A (15・16) (15) は口径18cmの小型、(16) は口径24cmの大型である。口縁部が「く」字状に屈曲する。

鉢B (20・29) (20) は口径36cmの大型品で、底部を欠失する。体部は外上方へ直線的にのび、口縁端部は水平面をなす。色調は灰白色の瓦質、(29) は灰色を呈する。

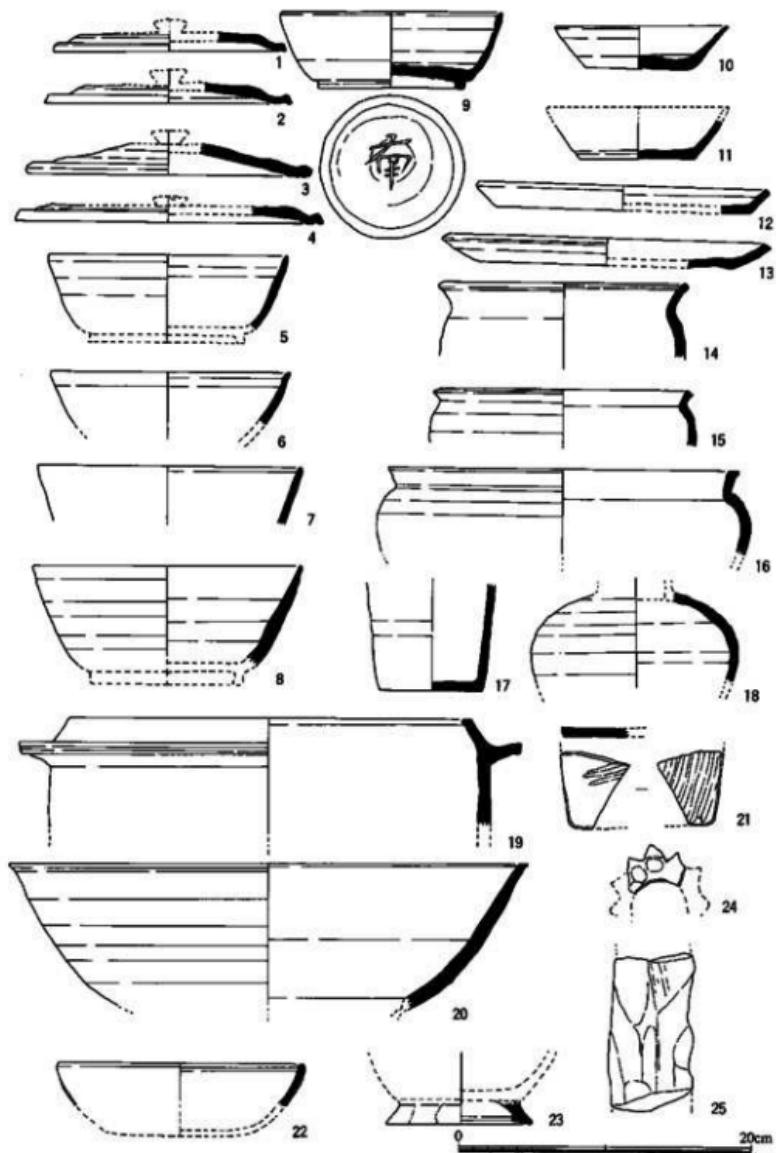


図42 遺物実測図 (1/4)

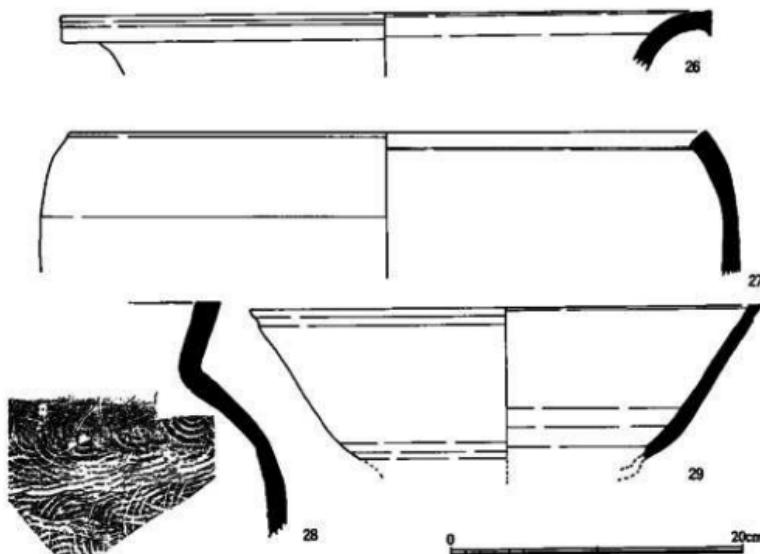


図43 遺物実測図 (1/4)

鉢C (27) 口径44cm。外面は粗いケズリを施し、内面には太い指ナデ痕がみられる。表面は多孔質で、やや瓦質である。

硯 (21) 砚後部の破片である。片面には丁寧なミガキを施す。

縦釉陶器 桶 (22) は体部はやや内湾し、口縁内面に一条の凹線を施す、素地は明褐色を呈す。

二彩陶器 壺 (23) は高台部分のみの破片である。濃緑色の釉と淡黄色の釉で二彩をなす。焼成は良好である。高台は貼り付けで斜め外方に直線的に伸び、端面は内傾にやや広がる。

窯道具 (24・25) (24) は粘土板の中央部を円形に切り取り、外周を角状に切り取るもので裏面には粗い指ナデが認められる。(25)は円柱状を呈し、両先端部が剥離する。指頭圧痕が明瞭に残る。成形は粗雑なものである。

瓦類

軒丸瓦 (30~34・64・65)

縦釉単弁八葉蓮華文瓦 (30・31) (30) は内区が全く失なわれているが、施釉されている事と内区と外区を分かつ二重圓線から見て (31) と同じ文様と考える。胎土に砂粒を多

く含み、焼成は良好、灰白色を呈する。釉調は淡緑色を呈する。出土地点No13。(31)は胎土に砂粒を含み、焼成は甘く、淡黄灰色を呈する。施釉状態も悪く、黄緑灰色を呈する。同文(無釉)は過去の調査でも出土している。出土地点No.7。

綠釉瓦片 (64・65) (64)は丸瓦部と接合する瓦当部の裏面である。中央上部に横方向に丸瓦接合痕が、下部には施釉されていない瓦当裏面が残る。胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや甘く、黄灰色を呈する。綠釉は緑灰色を呈する。(65)は瓦当部裏面下部の破片である。胎土は小石及び砂粒を含み、焼成はやや甘く、黄灰色を呈する。綠釉は黄緑色を呈する。出土地点No13。

複弁八葉蓮華文瓦 (32) 瓦当部がほぼ完形で残る。瓦当面は中房及び弁区が中心に向かって盛り上がり、中房で微かに中心の蓮子を取り巻く圓線が確認できる。多数の范傷が横方向に走っており、とりわけ真中の范傷は、瓦当を半截するよう外区から外区まで走っている。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、灰白色を呈する。奈良時代後期東大寺式軒九瓦のモチーフを受け継いだ文様で、『平安京古瓦図録』27・30・33の系統である。^{註5}

複弁蓮華文瓦 (33・34) (34)は瓦当部の下半分の破片である。瓦当面は(32)と同様に中房及び弁区が中心に向かって盛り上がるが、中房と弁区の間に圓線が存在しない。瓦当部外周には、成形時にできた型枠の痕跡(かせ型)が確認できる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。出土地点No.1。(33)は瓦当面の弁区の一部から外区にかけての破片である。外縁まで范押しされていないのか、外縁に范押し以前の成形痕が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、灰白色を呈する。弁区の文様から見て『平安京古瓦図録』の79・80の系統であろう。

軒平瓦 (35・36)

均整唐草文瓦 (35) 瓦当部中央より右半部を残す破片である。瓦当部上下両端はヘラケズリの後ナデ調整を施している。胎土は小石及び砂粒を含み、焼成は良好、暗灰色を呈する。(30・31)と対をなす軒平瓦であるが施釉されていない。『平安京古瓦図録』の317の系統であろう。出土地点No13。

左偏向唐草文瓦 (36) 瓦当部左半を残す破片である。文様は瓦当面の左から主葉が展開し、各所で枝葉が枝分かれするものである。胎土は砂粒を多く含み、灰色を呈する。『平安京古瓦図録』の462・463の系統であろう。出土地点No.21。

綠釉丸瓦片 (63・67) (63)は胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好、淡黄灰色を呈する。綠釉は淡緑色を呈する。出土地点No13。(67)は胎土は砂粒を多く含み、焼成はやや甘く、

淡黄灰色を呈する。縁軸は黄緑灰色を呈する。出土地点No.13。この2点は共に丸瓦の前面や側面の整った部分を用いて、同じような大きさに破断しているところから、別の用途に使用された可能性もある。

縁軸質斗瓦 (66) 棟に利用される縁軸質斗瓦は、外に露呈する側に縁軸を施している。凸面の施釉幅は1.5cmを測る。露呈する側面及び、凸面の露呈側から幅11cm、凹面の露呈側から幅3cmがヘラケズリの後ナデ調整を施し、丹念に成形されている。露呈しないほうの側面には深さ0.7cmの半裁用の切り込み痕が残る。短辺15.2cm、厚さ3.2cmを測る（長形は不明）。胎土は小石及び、砂粒を含み、焼成はやや甘く、灰白色を呈する。出土地点No.13。

質斗瓦 (37) 長辺41.8cm、短辺14.5cm、厚さ2.3cmを測るほぼ完形品である。この瓦も露呈しない側の側面に深さ0.3~1cmの半裁用の切り込み痕が残るが、質斗瓦の形状から見て平瓦を半裁して転用したものではなく、始めから質斗瓦を二枚作る目的で制作されている。露呈する側面がヘラケズリの後ナデ調整、凸面の露呈側から幅4cm、凹面の露呈側から1.5cmがナデ調整を施し、丹念に成形されている。凹面にはやや粗い布目痕が残る。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、淡黄色を呈する。出土地点No.13。

縁軸鰐尾 (38) 鰐部から縦帯外側の突帯にかけての破片である。突帯は張り付けで、鰐部の外面は逆段型で段幅6.8cm、内面は正段型で段幅6cmを測る。破面に同心円文の叩き痕が確認できる。おそらく叩き締めを行い粘土を貼り付けていったのであろう。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好、暗灰色を呈する。縁軸は鰐部の外面が黄緑色、内面が濃緑色を呈する。出土地点No.13。

鰐尾 (39~41) (39) は外面は逆段型で段幅7cm、内面は正段型で段幅7.2cmを測る。外面は叩きの後、ヘラケズリにより丁寧に鰐を成形するが、内面は粗く調整している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、灰色を呈する。出土地点No.2。(40) は鰐部端面が曲がりを持っているので、尾部への曲がりの部分の破片と思われる。外面は逆段型で段幅7cmを測るが、平行叩き痕が残るなど粗い成形である。内面には鰐の段ではなく、平行叩きとヘラケズリが見られるのみである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、オリーブ灰色を呈する。出土地点No.3。(41) は鰐部の腹部分の破片であると思われる。表面の成形痕は仕上げが丁寧なため不明である。裏面は同心円文の叩きと平行叩きが認められる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、暗灰色を呈する。出土地点No.13。

土師器皿 (42~62)

No.24地点から比較的まとまった量の土師器皿が出土した。土師器皿を法量で分類すると、

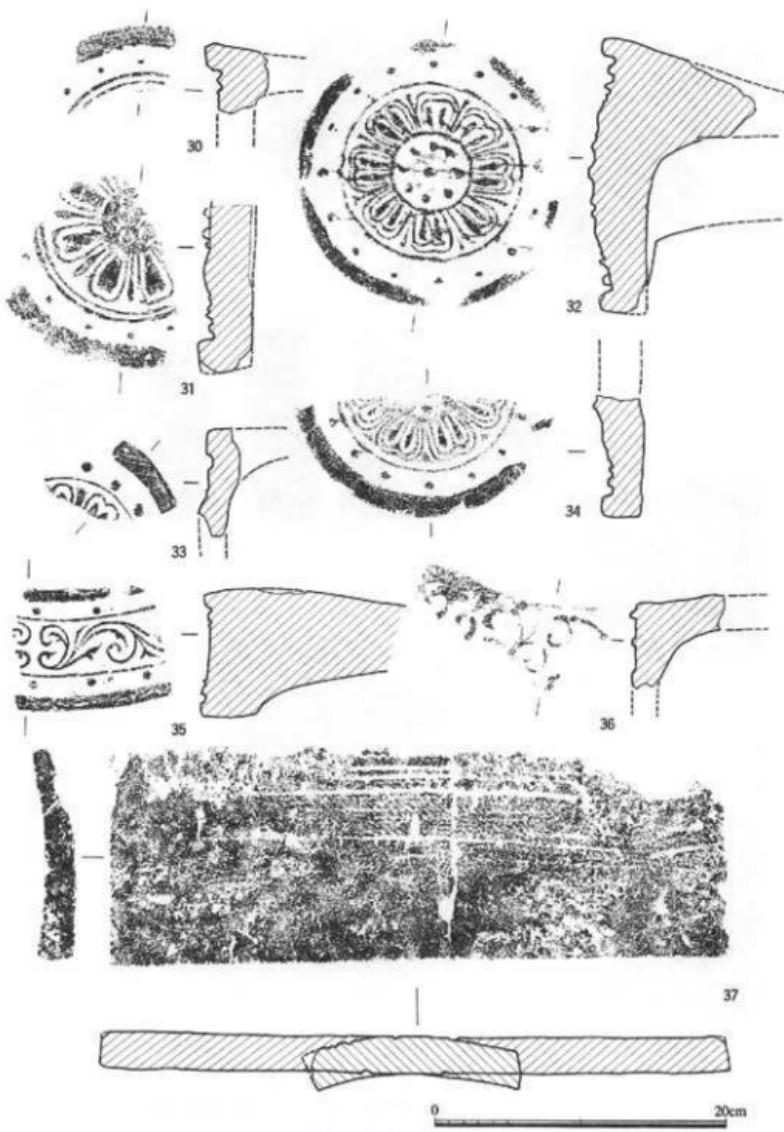


图44 遗物实测·拓影图 (1/4)

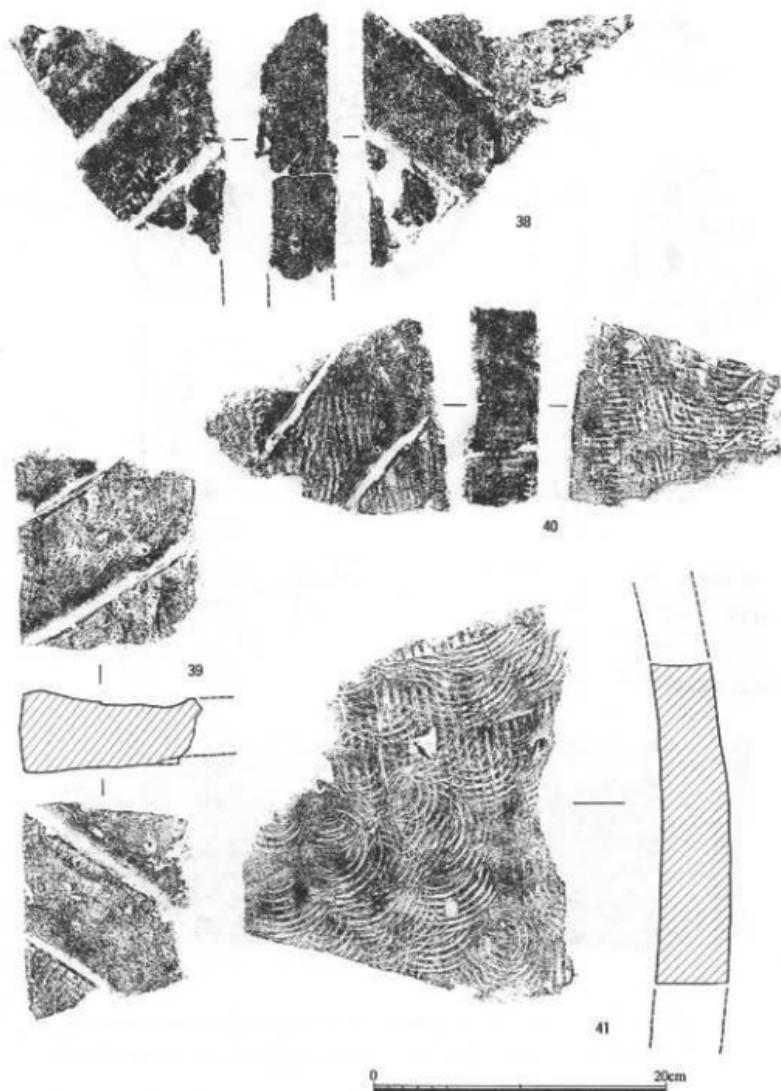


図45 遺物実測・撮影図 (1/4)

4種類に分類できる。口径8cm前後、器高1.7cm前後を測るもの（I類）、口径12cm前後、器高2cm前後（II類）、口径14cm前後、器高2cm弱のもの（III類）、口径19cm前後、器高2.5cm前後のもの（IV類）がある。I類からIV類は口径を限ればほぼ3寸、4寸、5寸、6寸の数値に対応しており、製作時の規格と捉えることができよう。各類に属する土師器皿は、全体的に底部が広く浅いもので、口縁部の形態はゆるく斜め上方に立ち上がり内外に肥厚しながら外反気味におさめる。口縁部先端内外を横方向にならべて、端部の器壁がやや薄くなる。小口径のものに軽く上方につまみ上げるタイプの器形が残る。42~53はSK2、54~57はSK3、58~62はSK4から出土した。

4 まとめ

今回は栗栖野瓦窯跡を中心として、重複した遺跡の範囲を立会調査した。その結果をまとめると次のようになる。

瓦窯跡が点在する丘陵部の南から東の周辺部は、現在は田園や宅地となっているが、当時は、流路・湿地であったということ。地質的には、丘陵部は岩盤を核として、その上層を黄褐色系の粘土質の土層に覆われており、多量の粘土と薪を必要とする窯業生産をおこなうには最適の環境であったということ。

1985年に当研究所で立会調査時に検出した13号窯の灰原と考えられる落込み構からは、多量の瓦・土器が出土した。出土遺物の形式から、時期は平安時代前期である。

多量の16世紀前半に属する土師器皿を含む土壌を連続して検出した。土器の密集した出土状況などから、No.24・25の周辺に土師器皿を焼成した窯があったと考えられる。

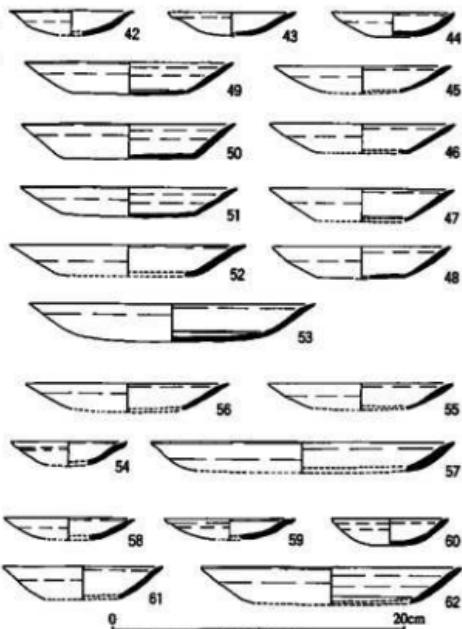


図46 遺物実測図 (1/4)

栗栖野瓦窯跡からは北にはずれているが、No18~23地点では、平安時代の整地層・包含層、落込みを検出したことから、No19地点より北側の南北道路沿いにも遺跡は広がると考えられる。

- 註1 平尾政幸・家崎孝治「栗栖野瓦窯跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 註2 北田栄造『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 註3 島田貞彦「山城幡枝の土器」『考古学雑誌21-3』昭和6年 15世紀初めに嵯峨より岩倉幡枝に移住し、16世紀後半に現在の岩倉木野移りすんだ椎木家は、中世から明治維新に至るまで土器を製作をしていた。
- 註4 坂東善平「京都市幡枝町発見の土師器窯址」『古代文化第34号』1963年 国立京都国際会議場建設のための土取場において、1963年にNo24・25から約50m北の交差点西側にて、多量の室町時代の土師器皿片・灰・焼土を発見しており、この遺構を坂東氏は土師器窯址と述べている。
- 註5 「平安京古瓦図録」平安博物館 1977年
- 註6 註1と同じ

XI 主要な出土遺物

1 平安京右京三条二坊 (91H R75) (図47~49)

経過 本調査は、中京区西ノ京南原町50で実施した建物建設工事に伴う立会調査である。当該地は平安京右京三条二坊六町にあたり、西朝負小路西側溝が推定されている。1991年5月29・30日に調査を実施した。調査地は掘削深が現地表下1.4mと浅く、地山まで達していない。地表下1.1mまで擾乱、以下10世紀の遺物包含層である暗灰色泥土層となる。

遺物 出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・縁釉陶器・灰釉陶器・軒平瓦・墨書き土器などがある。



図47 調査位置図 (1/5,000)

土師器 (1~15) この時期の皿と杯は區別が判然としないが口縁部が大きく外反し端部を小さくつまみあげるもの (2・6・10・11)、わずかに丸味をもつ底部に口縁部が強く屈曲し端部をつまみあげるもの (3~5・7~9)、平坦な底部から直線的に外方へ開く体部に強く屈曲した口縁部がつくもの (12~14) がある。いずれも底部外面はオサエ、他はナデ調整であり、器壁は薄い。墨書き土器 (15) は底部内面に人面とみられる墨書きが描かれている。この他皿には小型のもの (1) がある。平底で口縁部は外上方へのび端部は丸くおさめる。全体に厚い、底部外面にはヘラ切り痕が残るが他はナデ調整されている。

黒色土器 (16~18) B類の椀 (16) は小型の器形で口縁部内面端面直下に1条の凹線をめぐらす。内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキ調整を施す。A類の椀 (17・18) は、底部が大きく丸味の小さい体部をもつもの (18) と、やや浅めて体部の丸味が強く底部の小さいもの (17) とがある。口縁部外面はナデ、体部外面はオサエのち粗い横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。(17) は内面口縁部と体部の境界付近に2条の凹線をめぐらす。

須恵器 (19・20) 椥 (19) は体部が丸味をもち口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。ロクロ痕が残る。鉢 (20) は底部で、回転糸切り痕が残る。

縁釉陶器 (21~25) 盆 (21) は体部が浅く開き口縁部は外反する。体部と口縁部との境は外面に鋭い棱をもつ。内外面ともヘラミガキを施す。椀 (22~25) はいずれも底部片で、削り出しの輪高台で断面が方形を呈するもの (22・23)、貼付けの輪高台で高台接地面内端に段差を有するもの (24・25) がある。前者は器面にヘラミガキ調整がみとめられるが、後者はヘラミガキが欠如している。(24) は体部内面見込みを巡る 1 条の凹線を施す。

灰釉陶器 (26) 底部の破片で高台は外側が少し丸味をおびる。

均整唐草文軒平瓦 (27) 瓦当部右端のみ残る。瓦当面には文様の接合部分に横方向の小さい范傷が数多く走る。瓦当上部には横方向のヘラケズリ、側面も平瓦軒端部へ向けてヘラケズリを施している。胎土は砂粒を含み、焼成はやや甘く、淡灰黄色を呈する。西賀茂角社西群瓦窯産。



図48 墨書き土器 (15)

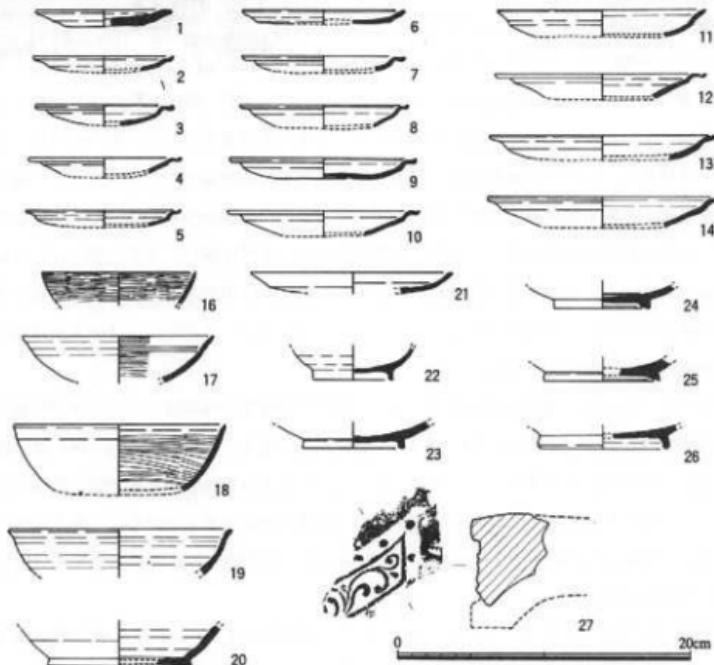


図49 遺物実測図 (1/4)

2 平安京左京四条四坊 (91H L170) (図50・51) (図版44)

経過 調査地は、中京区蛸薬師通東洞院東入泉正寺町326、328に所在する。当地に事務所兼住宅建設が計画されたため、工事掘削にあたって立会調査を実施した。

掘削は、東・西半分づつを2回に分けて行われたが、敷地の北東部分で調査したところ、北壁断面で流路西肩部を検出し、その底部西肩近くで古墳時代～奈良時代の遺物が出土した。調査は1991年8月19日から8月31日まで、敷地内計5箇所を調査した。

造構 調査地の標高は38.93mである。基本層序は、上層より、地表下0.5m以下に黄灰色泥砂層、0.75m以下に暗茶灰色泥砂層、1.05m以下に平安時代後期の包含層である暗黃灰色泥砂層、1.4m以下に泥砂層(礫混)1.57m以下に飛鳥時代の流路堆積である黄灰色粗砂層(混礫)があり、1.65m以下に黄灰色微砂層、1.84m以下に灰色細砂層とつづき、1.90m以下に地山である暗黃灰色粘土層、灰色粘土層とつづく。

飛鳥時代の流路は、観察断面では西肩部しか検出できなかったが、黄灰色微砂層を肩として、深さ27cmまで確認した。流路の埋土である黄灰色粗砂層(混礫)は上下2層に分かれ、上層は粗砂が多く、下層は微砂が多い。流路肩部を検出した場所は、北側道路境界から南へ5.9m東側隣地境界から西へ8.2mの地点である。

流路内より出土遺物は、土師器杯・鉢・甕・須恵器杯蓋・横瓶・甕である。

遺物 土師器 杯(7)は、口径15.2cm、復原高4.0cmで、体部は外上方へ立ちあがり、中段で内側へかるく折れ曲る。端部は内側へかるく肥厚し、丸くおさめる。内面にやや粗い放射状暗文を施す。鉢(8)は、口径30.6cm、復原高10.4cmで、体部上段で内側へやや屈曲する。端部は外側に肥厚し内傾する端面をもつ。内面は斜格子状暗文、外面は体部上半に粗いヨコ方向のヘラミガキ、下半にタテ方向のハケメを施す。

須恵器 杯(4～6・9)(4)は、口径11.0cm、復原高2.9cmで、器壁は薄く口縁部は外反する。体部外面下位にケズリを施す。(5)は口径12.4cm、器高3.0cmで、底部は平らに近く、体部はかるく丸味をもって立ち上がり、端部はやや外反し丸くおさめる。底部外



図50 調査位置図 (1/5,000)

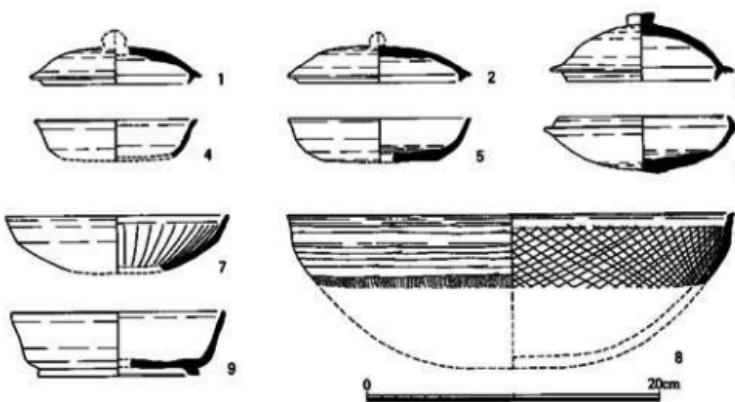


図51 遺物実測図 (1/4)

面から体部下段までヘラケズリを施す。(6)は、口径11.6cm、器高3.9cmで、底部は丸底を呈し、外上方にのびる。受部はやや外上方にのび端部は丸い。立ち上がりは内傾しながら上方に立ち上がり端部は内傾する面をなす。胎土は砂粒を多く含み、青灰色を呈する。(9)は、口径14.4cm、器高4.4cmで、高台は下方向にひらいた台形を呈し、端部は外傾する凹面を有する。底部は平らで、体部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。胎土は、淡青灰色を呈する。蓋(1)は、口径10.0cm、現存器高2.5cmで、天井部はやや低く丸く、口縁部は丸く、やや内傾するかえりを付し、その端部は鋭く下方に突き出ている。胎土は、白色砂粒を含み青灰色を呈する。(2)は、口径11.0cm、現存器高2.5cmで、天井部はやや低く水平で、口縁部は丸い。かえりは口縁部より下方に突出している。胎土は、小石を含み青灰色を呈する。(3)は、天井部は深く丸い。その中央部に、円筒状で中央の凹む擬宝珠様のつまみをもつ。口縁部は短く内傾し、下方に張りだす。かえりは鋭く下方に突出する。杯身につまみをつけたような形状を呈する。胎土は小石を少量含む。

まとめ 今回の調査は、工事掘削に伴う立金調査という制約された状況下での調査のため、流路の西脇部の一部のみの検出という限定されたものであった。当地周辺の調査では、縄文時代から古墳時代と平安時代以降の各時代の遺構・遺物が密度濃く検出されている。今回の遺物は、その隙間を埋める好資料となるであろう。

3 平安京右京四条二坊 (90H R91) (図52) (図版44)

調査は、中京区大竹町地内における上水道埋設工事に伴う立会調査である。調査では、地表下0.54~1.04mで平安時代中期の包含層を検出した。

唐草文軒平瓦（2） 瓦当部の左半部の破片。巻き込みの大きい主葉が反転し、枝葉を持たない唐草文である。珠文の間隔が広く、幅の広い外区に比べ内区は小作りである。平瓦部四面の瓦当上面に横方向のケズリとナデ調整を施している。

石製品（7） 鳥類の頭部を形どる石製品である。頭部には線刻によるトサカが描かれ、くちばし付近には同じく線刻によるくちばしを描いている。眼と考えられる付近にはひも通しの穴が開けられる。用途については不明である。

4 平安京右京五条三坊 (91H R31) (図52) (図版44)

調査は、右京区西院坤町102におけるマンション建設に伴う立会調査である。調査で、地表下80cmで鎌倉時代の土壙を検出。土壙内から軒平瓦、土師器皿が出土。

唐草文軒平瓦（4） 瓦当部右端の破片で、蕨手の最後の一巻きが確認できるが、枝葉が多数みられ主葉との違いが不明瞭である。内区と外区を分かつ界線は存在するが、外区に珠文はない。平瓦部両面に凹線が斜めに引かれているが、糸切り痕かタタキ痕かは、細片であるため確認できない。胎土は砂粒を含み、焼成は良好、灰白色を呈する。

土師器皿（6） 口径8.9cm、器高1.4cm、口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。口縁部内外面をナデ調整する。

5 平安京左京八条三坊 (90H L161) (図52) (図版44)

調査は下京区木津屋橋通室町西入東塩小路町579における旅館建設工事に伴う立会調査である。調査地の西南地区で地表下1.7mを測る位置で平安時代後期の井戸を検出した。井戸内より軒丸瓦などが出土する。

三巴文軒丸瓦（1） 瓦当面の直径が推定で12cmの小型。文様の左巻きの巴は頭が丸みを持たず尖頭形をなす。瓦当部と丸瓦部の接合部は、丁寧な指押えを施している。

6 仁和寺院跡 (91U Z57) (図52) (図版44)

調査地は、右京区常盤出口町8-3におけるマンション建設工事に伴う立会調査である。調

査では、地表下40cmで室町時代の包含層、鎌倉時代の土壤を検出。包含層からは土師器、焼締陶器片、白磁片など出土。土壤からは軒平瓦、須恵質陶器鉢、土師器片など出土。

唐草文軒平瓦（3） 繊片のため瓦当面のどの部分か不明である。巻き込みの様い反転しない主葉を二巻き確認できるのみである。額部分の整形手法は非常に粗い作りである。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好、オリーブ灰色を呈する。

須恵器 鉢（8） 口縁肥厚部の外側をほぼ垂直な面に作る。口縁部内外面ナデ調整。

瓦器 釜（5） 口縁部が高く体部はやや偏平で鋤はやや短い。鋤から口縁部にかけて丁寧なヘラミガキで成形され、体部下半はススが付着する。

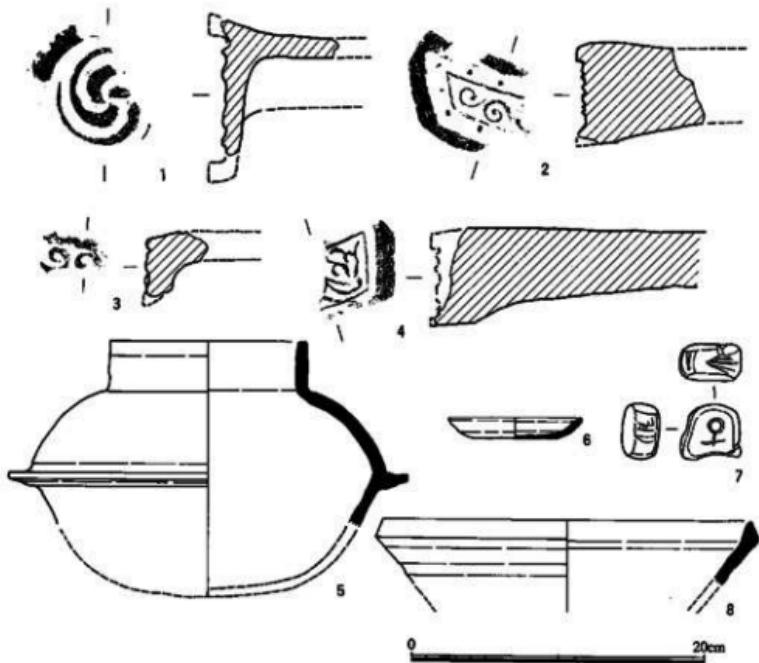


図52 遺物実測図 (1/4)

調査一覧表

I 1990(平成2)年度 1~3月期

平安宮(HQ)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
右近衛府	上・御前通下長者町下る三助町281	1/29	検出できず。	3-91
#	上・御前通下立売上る三丁目西上之町245-30	2/8	盛土のみ。	3-96
右馬寮	中・西ノ京右馬寮町11-17	1/7	盛土のみ。	3-88
左近衛府	上・出水通松屋町西入西天秤町147-2	2/5	盛土のみ。	3-95
#	上・上長者町通松原西入州浜東町449	3/12	検出できず。	3-99
真言院	中・聚楽園西町165	1/10~16	GL-0.63mにて平安の土壙1.	3-89
大乗院	上・中立売通六軒町東入四番町122-15	2/4	検出できず。	3-93
朝堂院	中・聚楽園東町15	2/4	盛土のみ。	3-94
#	中・聚楽園東町31-28	2/12	検出できず。	3-97

平安京右京(HR)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
一条二坊十五町	中・西ノ京中保町1-4 北野中学校	3/4	GL-1.41mにて室町の包含層。	5-98
一条三坊十三町	右・花園坂ノ下町5	3/18	検出できず。	4-102
三条二坊 四町	中・西ノ京極ノ口町107	3/4	GL-0.5m以下、時期不明の池状堆積。	5-97
三条四坊 六町	右・山ノ内大街4-3	3/18	検出できず。	4-103
四条二坊 一町	中・壬生大竹町地内	1/30~2/20	GL-0.35m以下、平安前期の落込み、土壙、平安中期の包含層、時期不明の推定六角小路剥清、溝状落込み。本文67ページ 検出。	9-91
五条一坊十一町	中・壬生下溝町17-1	2/6	GL-0.81mにて平安前期の溝状堆積。	9-93
五条三坊 九町	右・三条通南側、春日通~西大路地内	12/10~1/16	GL-0.65mにて江戸の包含層。	8-81
六条一坊十六町	下・中堂寺庄ノ内町1-131	2/18	GL-0.48m以下、平安前期の包含層2。	9-94
六条二坊 三町	下・西七条東前田町地先	3/4	検出できず。	9-96
六条二坊十六町	右・西院西高田町地先	2/26	GL-1.0mにて時期不明の佐井川の東屑 検出。	9-95
六条四坊 九町	右・西院月双町78-1	3/13	検出できず。	8-100
八条二坊 八町	下・七条通南側、西大路通~御前通	3/12~5/9	GL-0.25m以下、時期不明の路面7、平安前期の池状堆積、平安の土壙、室町の包含層。本文3ページ 検出。	13-99
八条二坊十一町	下・七条御所ノ内中町52-2	1/25~28	GL-0.2m以下、平安前期~中期の溝状堆積。	13-90
九条一坊十一町	南・唐橋平坦町地先	1/9~3/4	GL-0.06m以下、古墳・平安中期の包含層各1、平安前期の土壙、時期不明の推定大宮大路東剥清。	13-87
九条二坊 五町	南・唐橋大宮尻町10-1.2	3/18	GL-0.97m以下、流れ堆積。	13-104

平安京左京 (H L)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
北辺三坊 七町	上・鏡三橋町～春日町 (京都御苑)	2/15	GL -1.65m にて時期不明の包含層。 近世以降の堆積のみ。	7-157
二条二坊十五町	中・小川通丸太町下る中之町80	3/4	GL -1.2m にて石列、長方形の大石が二段に並ぶ。-1.5m にて時期不明の整地層、包含層。	6-163
二条三坊 一町	中・丸太町通西洞院東入梅屋町166-7	3/28・4/1	GL -1.2m にて石列、長方形の大石が二段に並ぶ。-1.5m にて時期不明の整地層、包含層。	7-174
二条三坊 五町	中・丸太町通～二条通・新町通～烏丸通	1/8～4/23	GL -0.22m 以下、時期不明の路面敷面検出。	7-143
二条四坊 二町	中・高倉通竹屋町上る桜本町701-2他	1/28	GL -0.95m にて室町・江戸の遺物を含む湿地状堆積。	7-148
二条四坊十二町	中・夷川通柳馬場東入後屋町294	3/4	GL -2.2m 以下、江戸の流れ堆積。	7-164
三条一坊 一町	中・西ノ京小畠町2-10	3/25	GL -0.39m 以下、時期不明の包含層3、土壌、平安の路面、推定朱雀大路と二条大路の交差点。	6-173
三条三坊 二町	中・新町通御池上る中之町47	1/29	GL -1.15m にて時期不明の湿地堆積をきて桃山～江戸の土壌。	7-149
三条三坊十一町	中・烏丸通御池下る虎屋町576-1	3/7	盛土のみ。	7-166
三条四坊 八町	中・柳馬場通二条一御池通他	1/25～2/21	GL -0.19m 以下、近世の路面、南北溝、平安前期・後期・室町の包含層。	7-146
四条二坊十二町	下・四条通醍醐ヶ井東入柏屋町17他	2/13	GL -1.05m にて室町の土壌2。	10-155
四条四坊 七町	中・六角通源町西入堀之上町119	1/29・2/1	GL -0.36m にて花崗岩検出。-1.08m にて鎌倉～室町の包含層。	11-150
四条四坊 十町	中・富小路通六角下る骨屋之町565-1	3/25	検出できず。	11-172
五条一坊 二町	中・壬生郡ノ宮町 壬生寺	2/13	GL -0.9m にて時期不明の流れ堆積。	10-152
五条三坊 一町	下・西洞院通四条下る妙伝寺町694	3/7～15	検出できず。	11-167
五条三坊十六町	下・東洞院通四条下る元源王子町37	3/8	GL -1.43m にて鎌倉の包含層。	11-168
五条四坊 八町	下・四条通柳馬場西入文光寺中之町99他	12/19～2/4	GL -1.4m 以下、平安前期・室町・時期不明の土壌各1。	11-142
六条三坊 十町	下・源助町通五条上る高砂町384	2/26	GL -0.8m 以下、江戸の包含層。	11-159
六条三坊十一町	下・烏丸通西側、五条～七条通	2/8・3/14	GL -1.6m 以下、時期不明の推定島丸小路路面3。	11-151
六条四坊 一町	下・万寿寺通高倉西入万寿寺中之町78	1/25	検出できず。	11-147
六条四坊 三町	下・東洞院通五条下る二丁目福島町513	3/13	盛土のみ。	11-170
六条四坊十三町	下・七条通南側、烏丸通～高倉通他	2/14・20	検出できず。	11-156
七条二坊 四町	下・御器屋町地先	3/4～4/10	GL -0.25m 以下、路面、推定堀川小路と七条大路交差点、推定鎌倉小路、平安の推定七条大路、平安の包含層。	10-165
七条二坊十四町	下・油小路通正面下る玉本町193～195	2/27	GL -1.43m 以下、室町・平安末期の土壌。	10-160
八条一坊 八町	下・觀喜寺町3 大内小学校	3/2	検出できず。	12-162
八条二坊 十町	下・北不動堂町他地内	1/22	GL -1.1m にて鎌倉の井戸検出。	12-144
八条三坊 七町	下・木津屋櫛通室町西入東塙小路町579	2/27・3/1	GL -1.1m 以下、平安前期・平安後期の包含層、鎌倉の井戸2。本文67ページ	13-161
八条四坊 九町	下・郷之町10他	2/13	盛土のみ。	13-154
九条二坊 四町	南・西九条南小路町1 九条中学校	1/18	GL -1.3m にて時期不明の包含層。	12-5
九条四坊 五町	南・東九条西四町地先	2/13	GL -0.45m にて鎌倉・鎌倉～室町・時期不明の土壌。	13-153

南・桂地区 (MK)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
下津林遺跡	南・久世高田町336	12/5・1/30	GL-0.4m以下、弥生の土層7、時期不明の土層9、古墳期の包含層。本文20ページ。	-8
中久世遺跡	南・久世中久世町四丁目20	12/26・4/17-23	古墳時代中期及び弥生時代末-庄内期の住居址。弥生の柱穴群。本文24ページ。	14-9
#	南・久世中久世町一丁目97-2	2/18	巡回時、工事終了。	14-11
福西古墳群	西・大枝東長町1-211	1/23・25・30	南開口の横穴式石室、円墳。本文13ページ。	-10
#	西・大枝東長町1-121他	2/25	検出できず。	-12

長岡京地区 (NG)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
長岡京跡	伏・納所145-1他	2/21	GL-1.6mにて時期不明の包含層。	-19
長岡京跡淀城跡	伏・淀池上町37-39	3/13	GL-0.1mにて石垣。-0.45mにて整地層。	-21

鳥羽地区 (TB)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
道跡外	南・東九条下殿田町56 陶化中学校	3/2	検出できず。	-37
下鳥羽遺跡	伏・竹田松林町27-2他	2/25・27	GL-1.31m以下、時期不明の包含層。	15-35
鳥羽難宮跡	伏・竹田中殿町20他	2/14	GL-1.36m以下、弥生・鐵柵の包含層各1。	15-33
唐橋遺跡	南・吉祥院九条町23-1	2/4	GL-0.97mにて植物遺体を含む湿地状堆积。	-32

伏見・醍醐地区 (FD)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
向島城跡	伏・向島立河原町	1/10・4/20・5/9	検出できず。	-29
#	伏・向島二ノ丸町他	2/20~4/20	検出できず。	-31
伏見城跡	伏・御香宮門前町198	2/21	GL-0.5mにて桃山の東西溝。	16-32
#	伏・新町五丁目488	3/4・5	GL-0.9m以下、桃山の包含層、時期不明の整地層、江戸の土壌。	16-33
#	伏・桃山伊豫部西町5-32・33	3/5	検出できず。	16-34
#	伏・鐵座町一丁目362	3/14・19	GL-1.6mにて弥生の遺物出土。	16-35
伏見城跡板築墓寺跡	伏・石屋町地先	2/18	GL-0.51m以下、時期不明の路面、時期不明の包含層。	16-30

洛東地区 (RT)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
人頭鏡王山莊跡	山・安朱東海道町地先	1/29	GL-0.15mにて時期不明の整地層。	-39
中臣遺跡	山・渠頭野狐塚町5-1	12/27・1/16	検出できず。	-38
#	山・勤修寺東金ヶ崎9-1	2/27	盛土のみ。	-42
#	山・西野山中臣町26-98	3/5	検出できず。	-43
法住寺殿跡	東・東瓦町964	2/4	検出できず。	-40

北白川地区 (KS)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
白河南殿跡	左・石原町281	3/2	GL-0.9m以下、平安末期の包含層。	14-20
白河街区跡	左・岡崎入江町1-1 錦林小学校	2/1・2	GL-0.3mにて平安後期の整地層。	14-18
#	左・岡崎天王町53-3地	2/12	GL-0.9mにて室町の落込み。	14-19
仲蔵町遺跡	左・修学院沖仲蔵町1 修学院小学校	3/7・14	GL-0.6m以下、縄文の包含層、平安末期～鎌倉の遺物を含む池状遺構。	-21
桜林寺旧境内	左・永鏡堂町48	1/22・30	検出できず。	-17
北白川鹿寺跡	左・北白川大堂町5	3/19・20	擾乱のみ。	-22

洛北地区 (RH)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
植物園北遺跡	左・下鶴野々神町25-3・4・5	1/8・9	検出できず。	-28
#	左・下鶴野々神町18-16、36	3/1・5	検出できず。	-29
栗柄野瓦窯跡	左・岩倉幡枝町地先	5/25-4/24	平安前期の落込み遺構、室町の土壙、平安の整地層、包含層。本文51ページ。	-7
上越町遺跡	北・小山上越町地内	3/25-4/23	GL-0.14m以下、時期不明の包含層。	-30

太秦地区 (UZ)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
一本木古墳	右・嵯峨大沢落久保町地先	3/19-4/2	GL-0.25m以下、路面敷面、時期不明の包含層。	-7
古墳群	右・太秦堀池町地先	2/14	GL-0.76mにて時期不明の包含層。	-5
仁和寺院家跡	右・常盤出口町9-1	2/13	盛土のみ。	-4

II 1991(平成3)年度 4~12月期

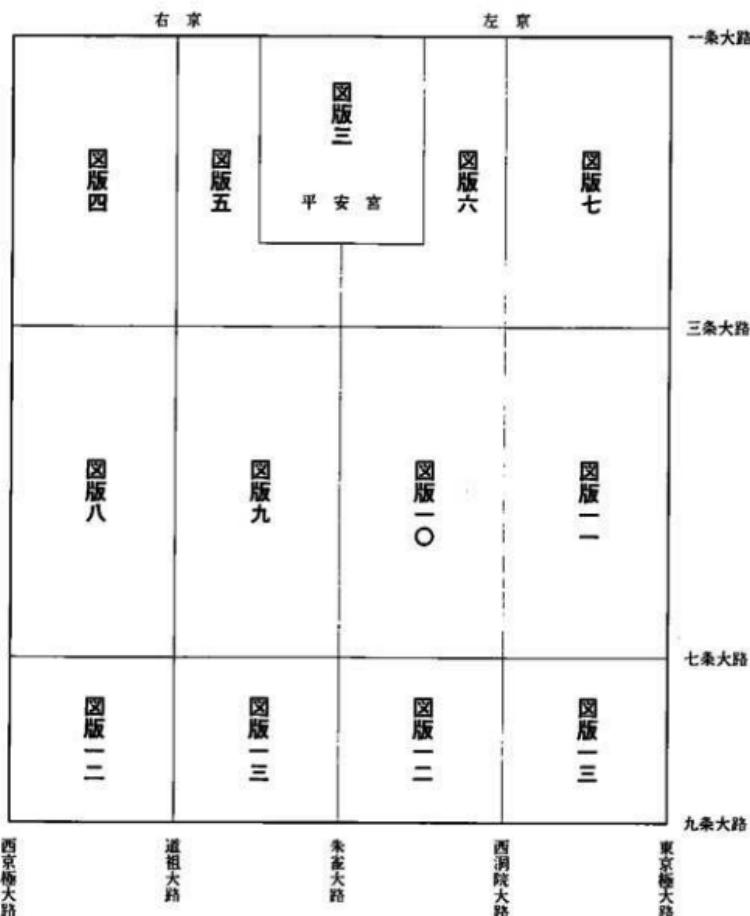
平安宮 (HQ)

遺跡名	所在地	調査日	概要	図版番号
右近衛府	上・御前通下立売上る三丁目西上之町 278-33	12/19	巡回時、終了。	3-309
#	上・御前通下立売上る二丁目仲之町290	10/28	盛土のみ。	3-247
#	上・御前通下立売上る二丁目仲之町289-15	12/3	盛土のみ。	3-289
#	上・下立売通御前東入西東町364	9/11	盛土のみ。	3-203
箕の松原	上・七本松通下立売上る七番町351-39	6/11	盛土のみ。	3-86
#	上・七本松通下立売上る七番町329-4	11/11・12	検出できず。	3-280
宮内省	上・竹屋町通千本東入生穂町115-1	8/20	GL-0.5mにて近世の層。	3-172
刑部省	中・西・京内畠町14	7/26	盛土のみ。	3-145
#	中・西・京内畠町14	8/5	盛土のみ。	3-157
#	中・西・京内畠町15-21	11/30	盛土のみ。	3-281
左近衛府	上・松屋町通出水上る南清水町131-1	7/8	盛土のみ。	3-121
#	上・出水通恵光院東入金馬場町178	7/12	盛土のみ。	3-126
#	上・下長者町通松屋町西入西反巴町115	9/26・30	盛土のみ。	3-214
#	上・松屋町通下長者町下も南清水町133-2	10/11	盛土のみ。	3-226

図 版

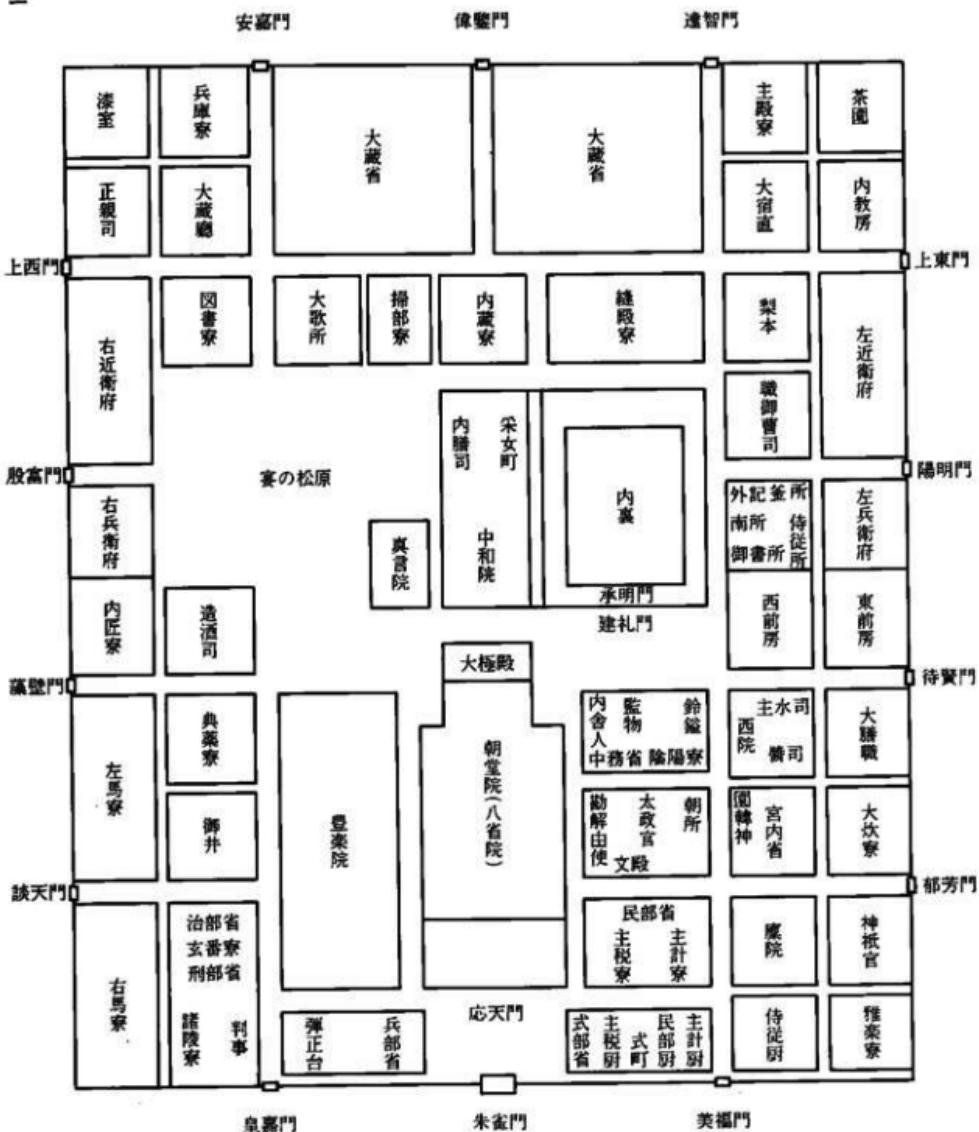
調査地点位置図

平安京図葉分割図

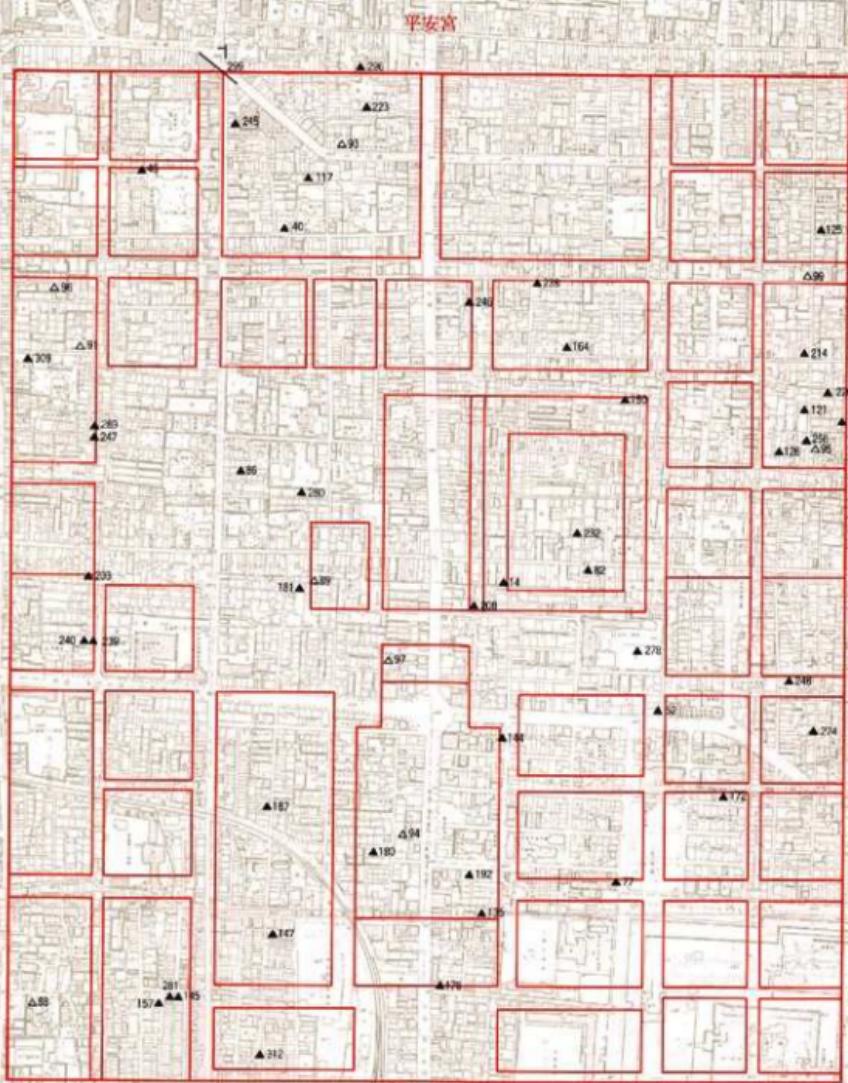


凡例

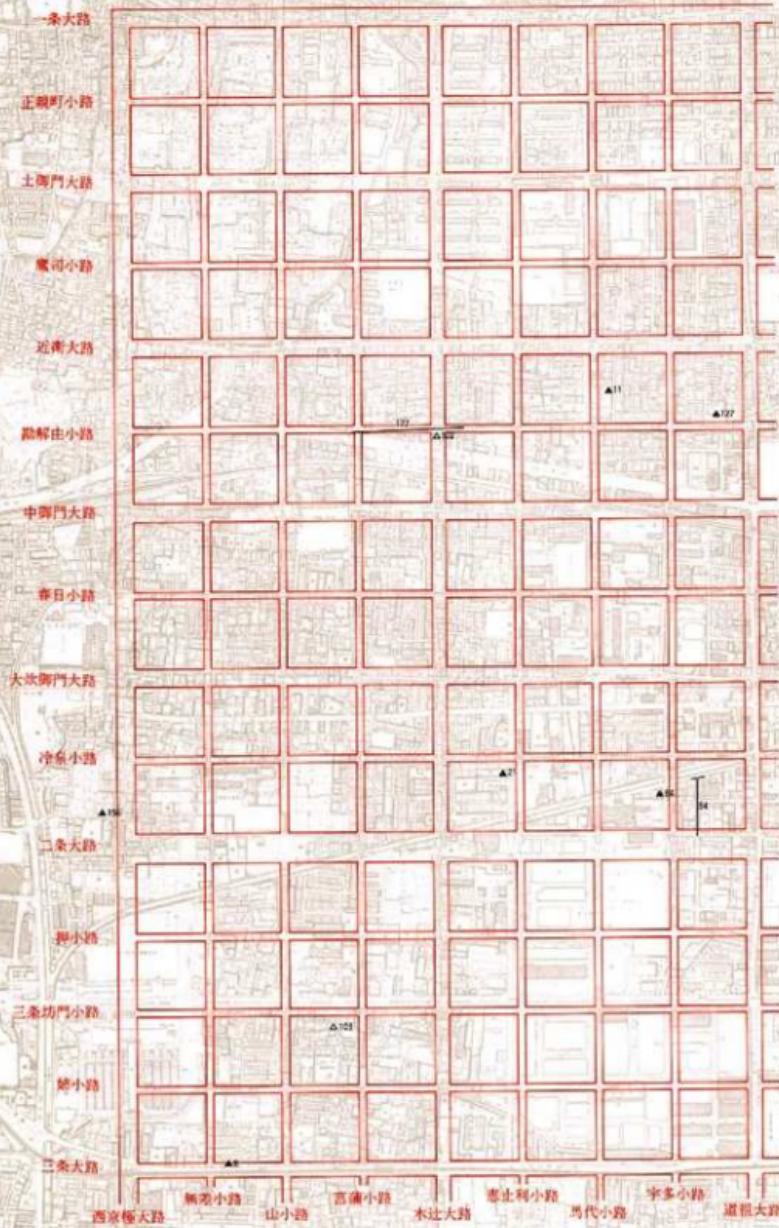
△----- 2年度立会調査地点 ▲----- 3年度立会調査地点
----- 遺跡範囲



作図は九条家本・陽明文庫本による



右京北辺一、二、三条、三・四坊



右、東、北邊・一、二、三条、一、二坊

一条大路

正親町小路

土御門大路

麁司小路

近衛大路

殿解山小路

中御門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

二条大路

押小路

三条坊門小路

鰐小路

三条大路

道祖大路
野寺小路西瀬川小路
西瀬魚小路西大宮大路
西柳宿小路西堺城小路
皇裏門大路

朱雀大路

左：東、北邊：一、二、三条、右：三、四坊

一条大路

正親町小路

七瀬門大路

瀧河小路

近衛大路

點解由小路

中瀬門大路

春日小路

大炊御門大路

冷泉小路

三条大路

△177

押小路

△21

三条坊門小路

△199

姥小路

△21

三条大路

△22

朱雀大路

坊城小路

壬生大路

都筋小路

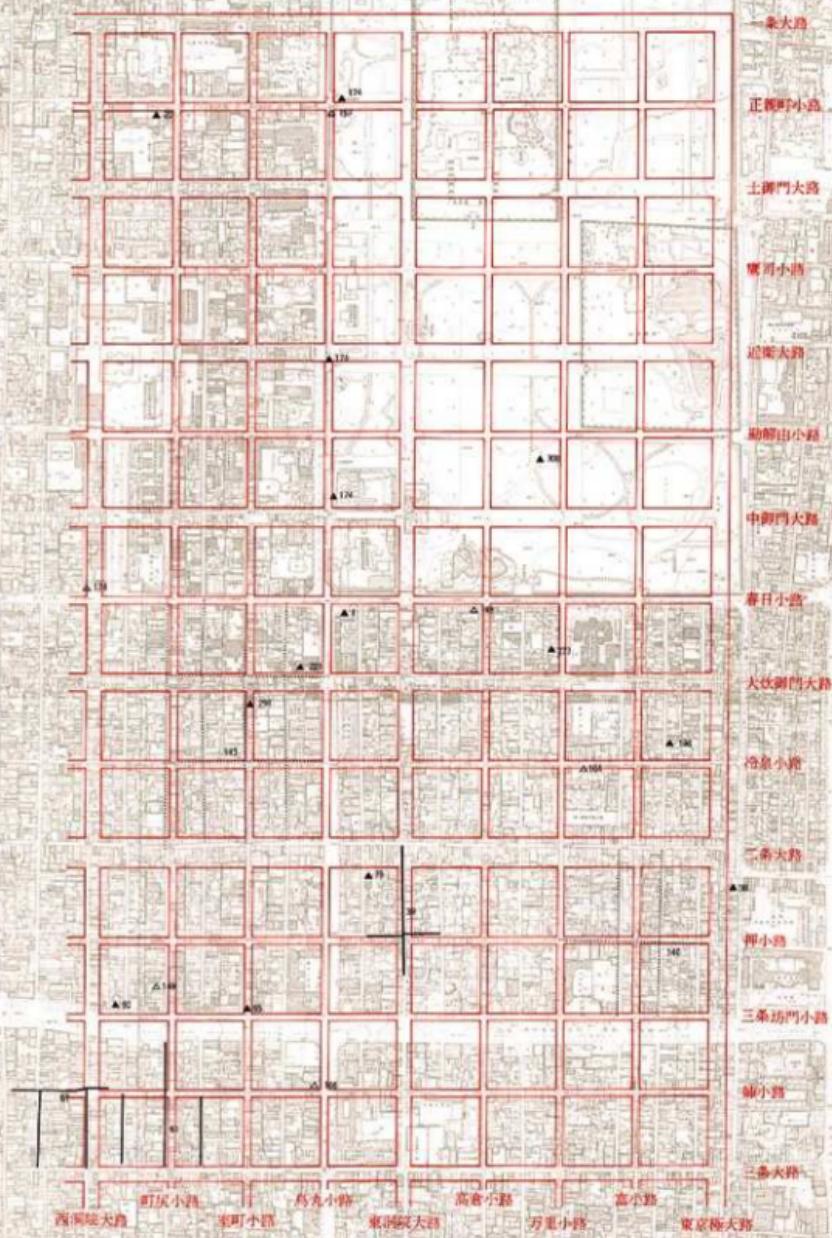
大宮大路

猪籠小路

應川小路

油小路

西洞院大路



右京一、四、五、六、七条二、四坊

圖版八

三条大路

六角小路

四条坊門小路

柳小路

四条大路

練小路

五条坊門小路

萬延小路

五条大路

通印小路

六条坊門小路

楊柳小路

六条大路

左女牛小路

七条坊門小路

北小路

七条大路

西京極大路

無差小路

山小路

菖蒲小路

本过大路

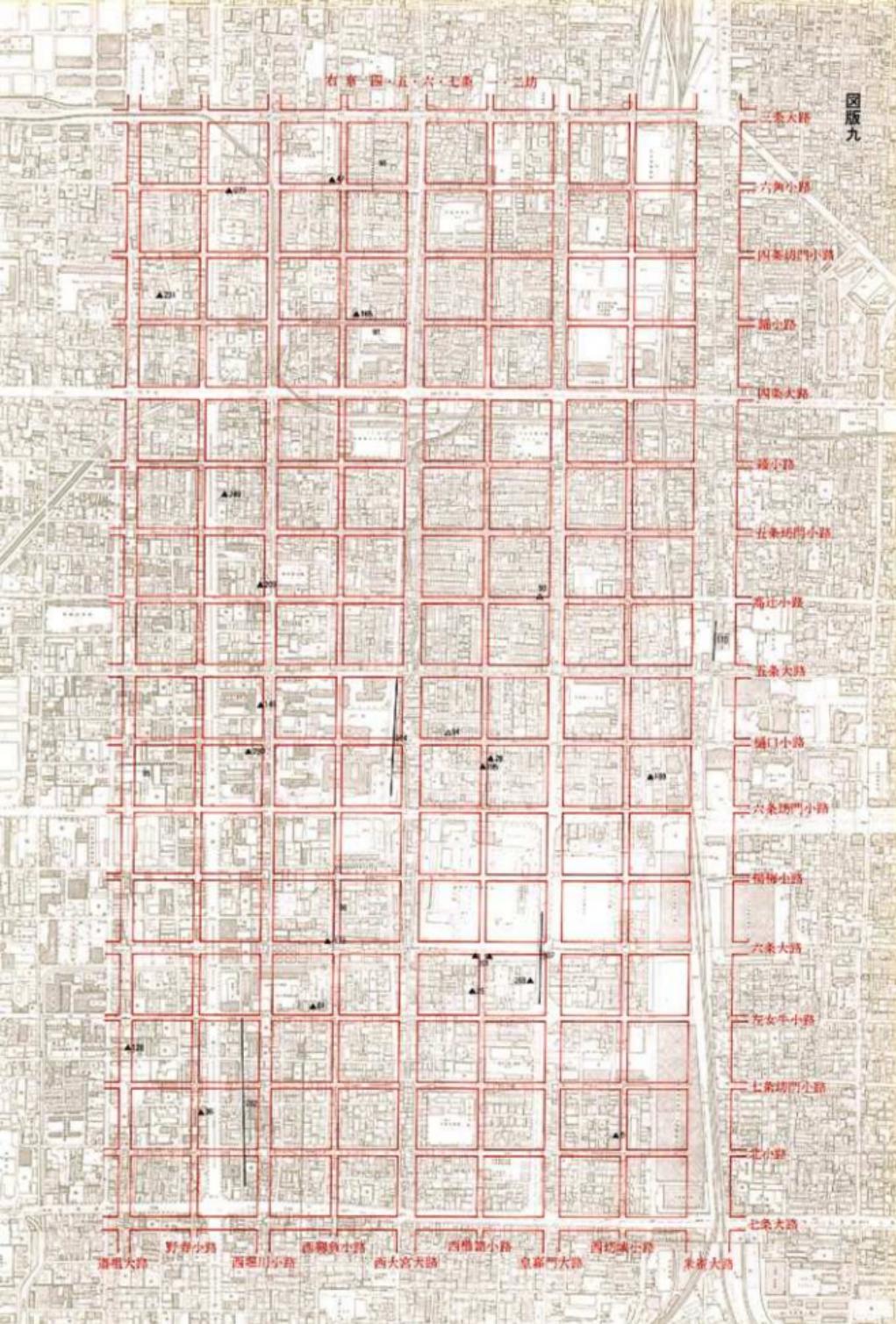
惠正利小路

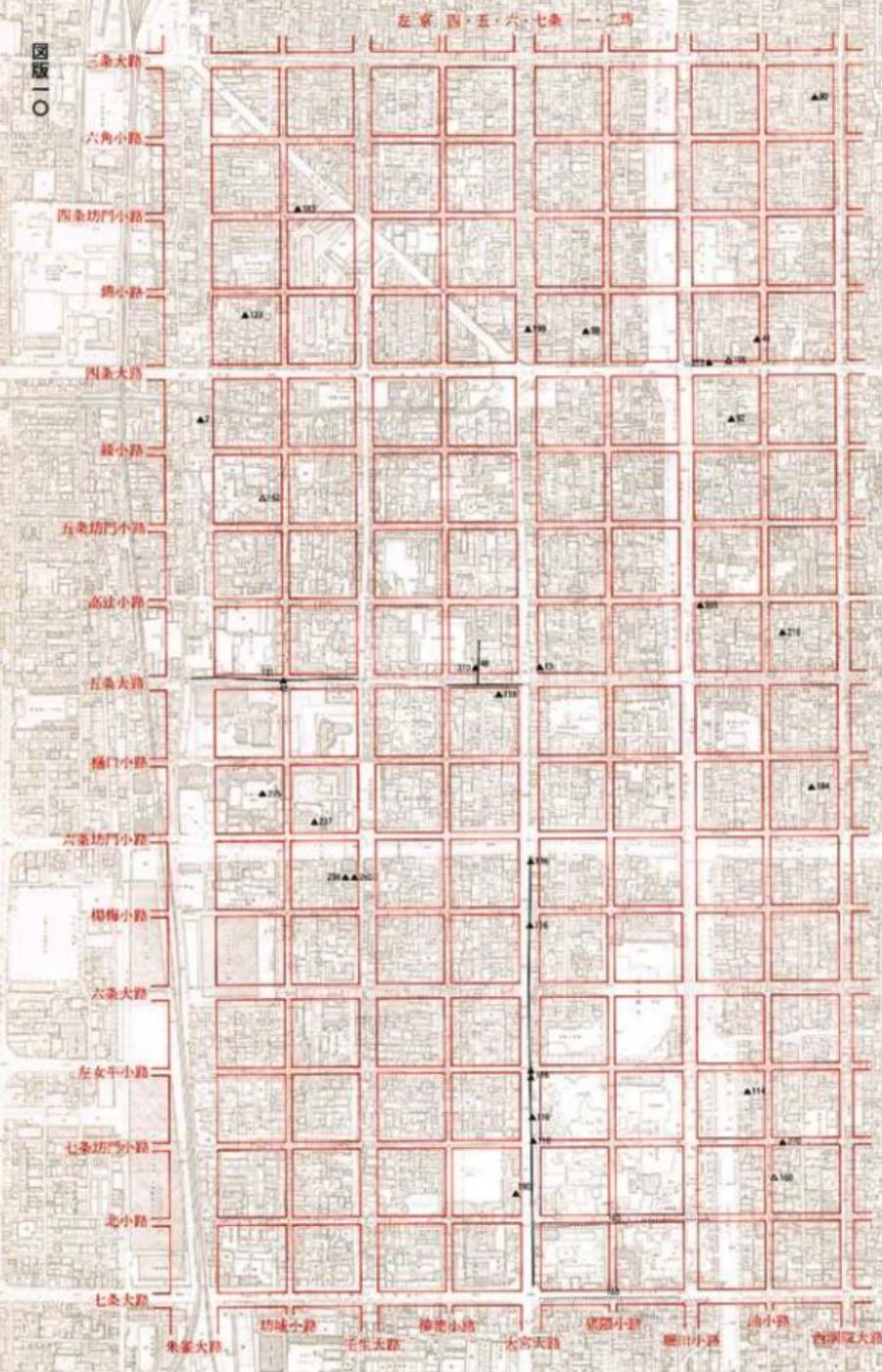
馬代小路

平多小路

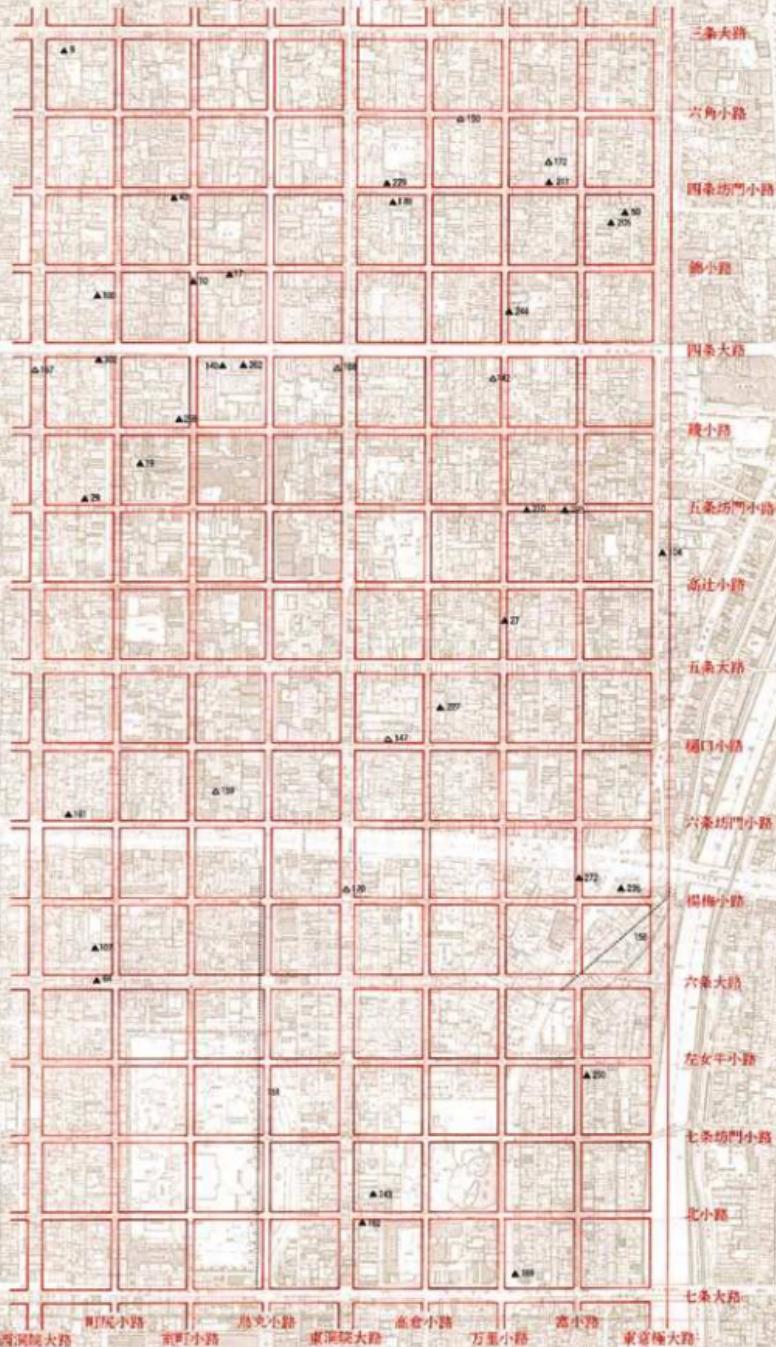
造坂大路

右第一、四、五、六、七街 一、二坊





左京四、五、六、七条三、四坊



右岸 八、九条 三、四坊

七条大路

圖版
二

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

信濃小路

九条大路

西京極大路 無差小路 山小路 西瀬小路 本郷大路 息亡利小路 宇多小路 馬代小路 道祖大路

左岸 八、九条 三、四坊

七条大路

堀小路

八条坊門小路

梅小路

八条大路

針小路

九条坊門小路

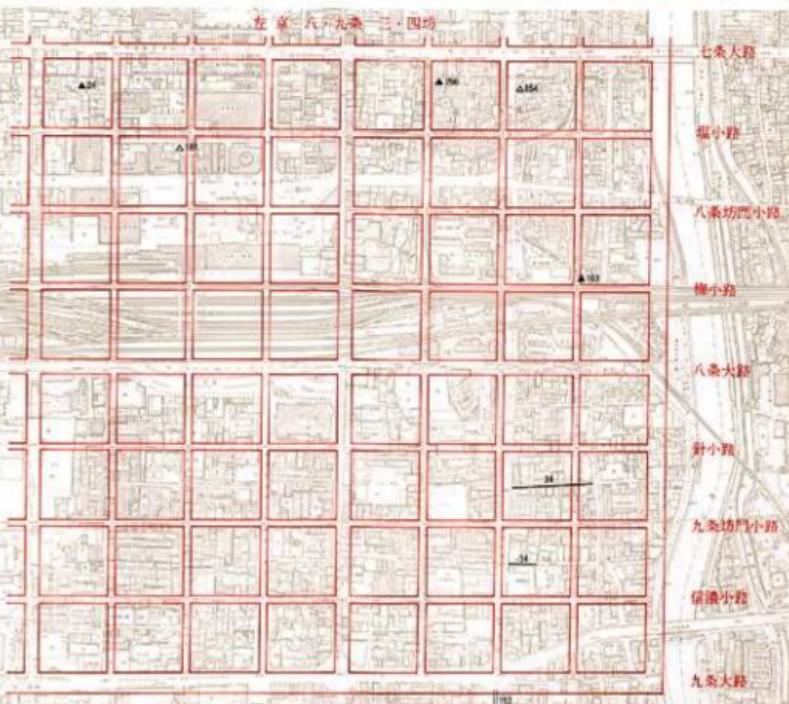
信濃小路

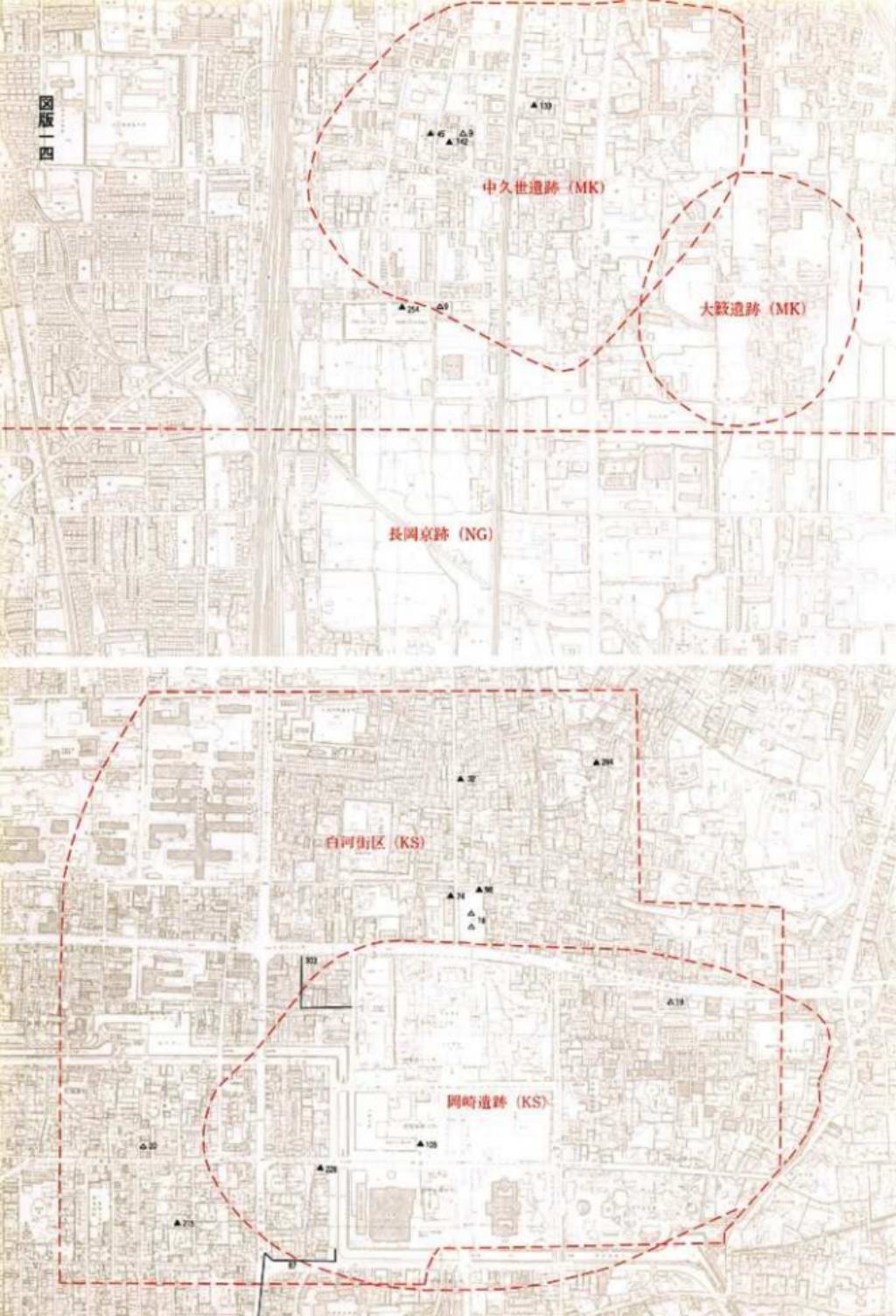
九条大路

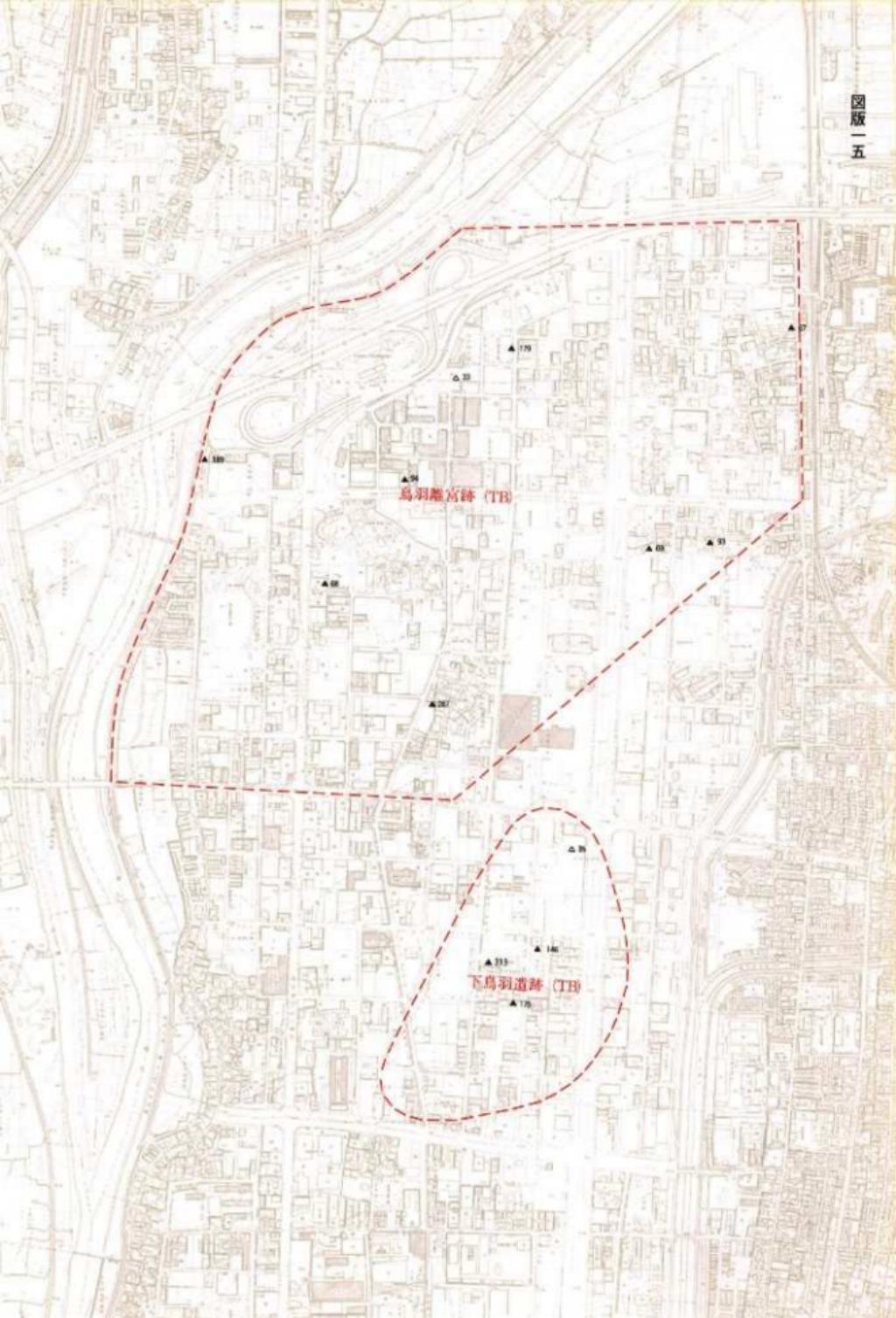
奈雀大路 坊城小路 生糸大路 横筋小路 大曾大路 橋瀬小路 一塊川小路 油小路 西湖院大路



左、八、九条、二、四坊









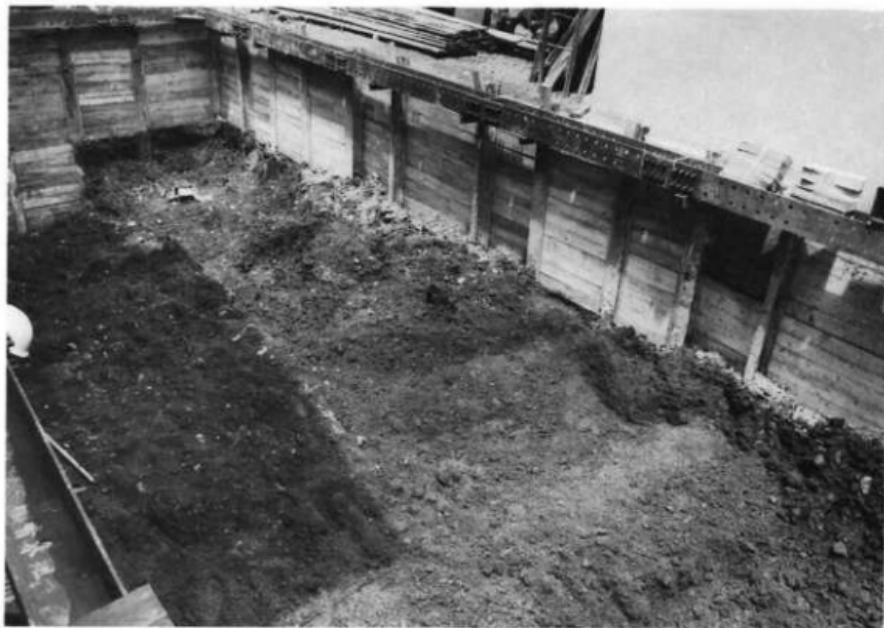




1 Na15土層断面（西から）



2 Na21七条大路路面断面（北から）



1 調査区全景（南東から）



2 東京極大路東側溝断面（南から）



3 落ち込み断面（東から）



1 調査前全景（南から）



2 全景（南から）



1 玄室部（南から）



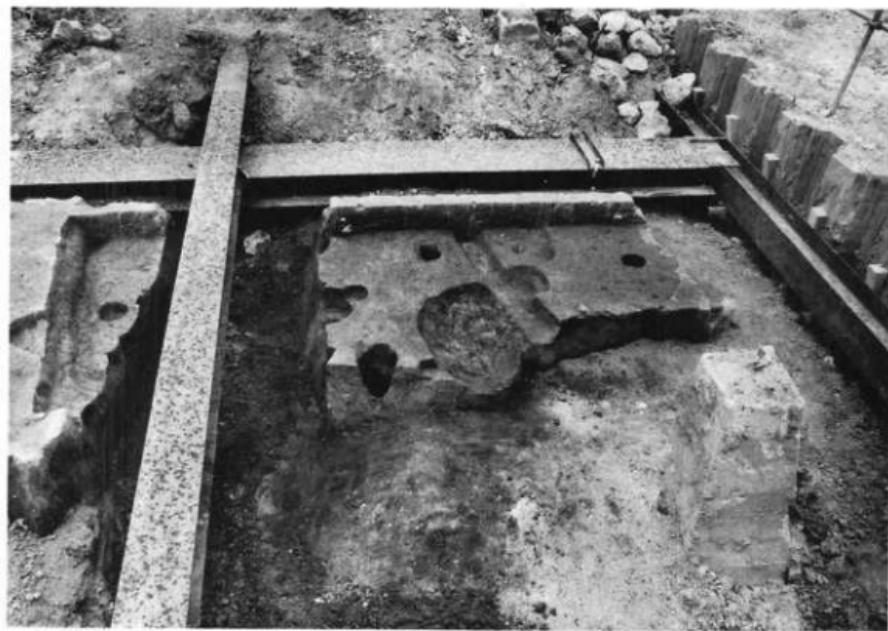
2 羨道部（西から）



1 No. 7 土壌断面 (北から)



2 No. 11 土壌断面 (北西から)



1 調査区全景（西から）



2 SX2 土器出土状況（西から）



3 ピット21（南から）



1 調査区全景（北から）



2 SK20断面（南から）



1 調査区全景（北東から）



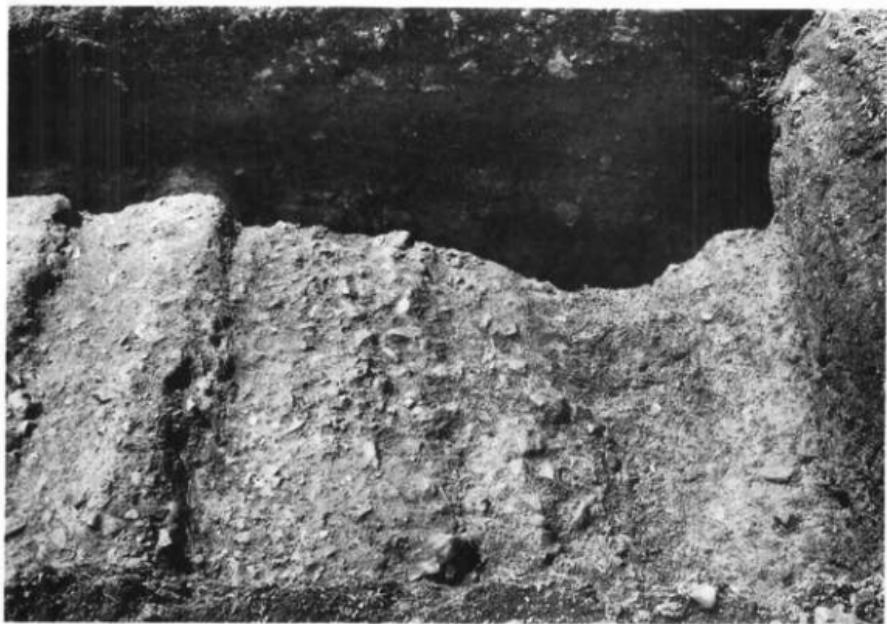
2 瓦堆積状況（南西から）



3 流路（北東から）



1 調査区全景（北から）



2 SD 3 検出状況（東から）



1 Na12土層断面（東から）



2 Na24遺構断面（北西から）



3 Na24遺構断面（北から）



11



22



13



24



17



23



—



30



—



31



—



32



29

須惠器(11・13・17)、綠釉陶器(22・23)、灰釉陶器(24)、錢貨(30～32)、木器(29)



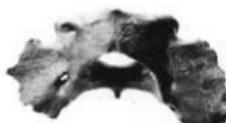
33A



33B



35



37



38

33 イヌ頭蓋骨(A 上面, B 側面), 35 イヌ下顎骨, 37 イヌ環椎, 38 イヌ寛骨



34A



34B

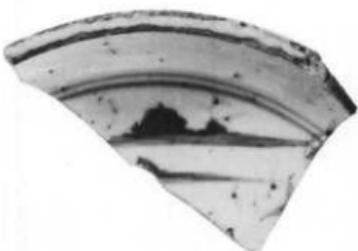


36

34 イヌ頭蓋骨(A 上面, B 側面), 36 イヌ下顎骨(右)



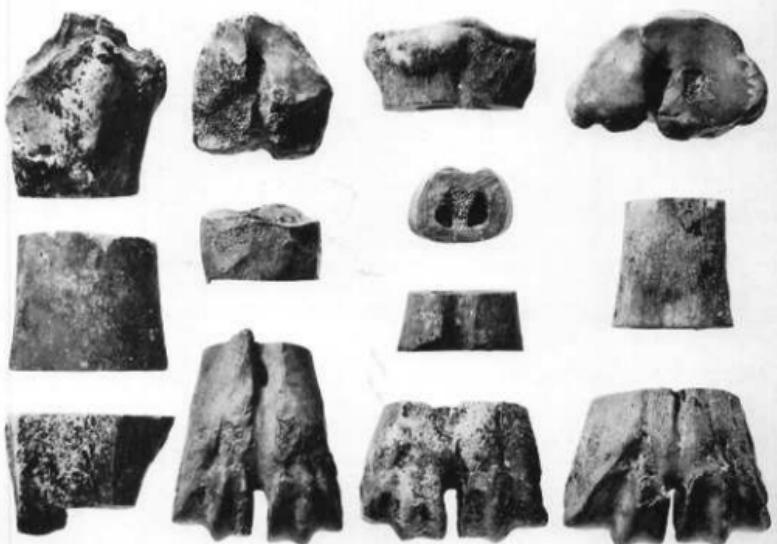
5



7



8



9

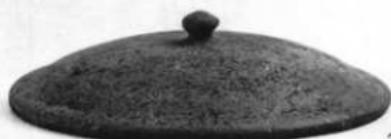
落ち込み出土 (5 土師器羽釜, 7 染付平鉢, 8 獣骨加工品, 9 獣骨切断片)



1



8



2



9



3



7



10



4



5

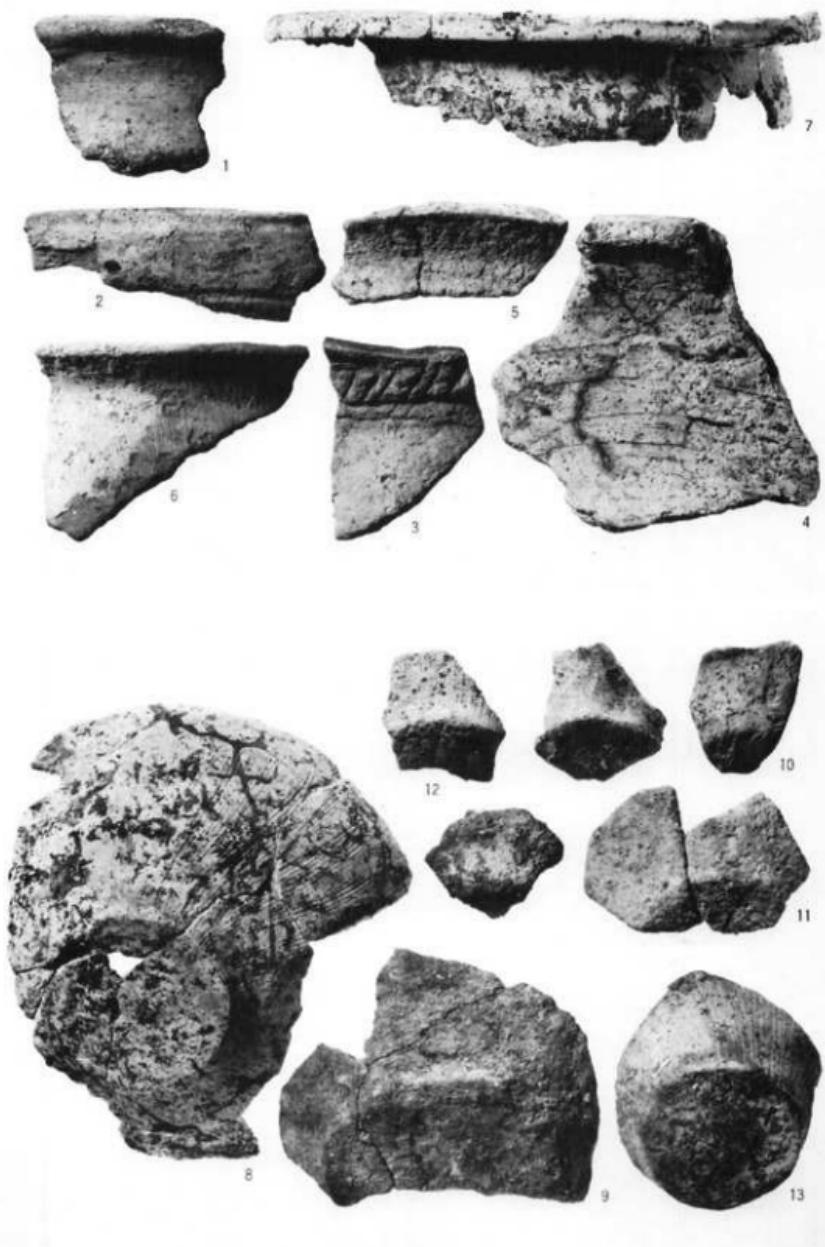


6



11

出土須惠器



出土土器



1



7



2



8



3



20



21



22

出土土器、石器



2



3



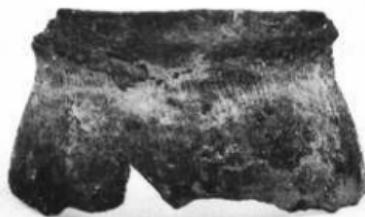
9



7



5



6



10



8





41



28



26



23



15



17



32



61



50



76



39



71



72



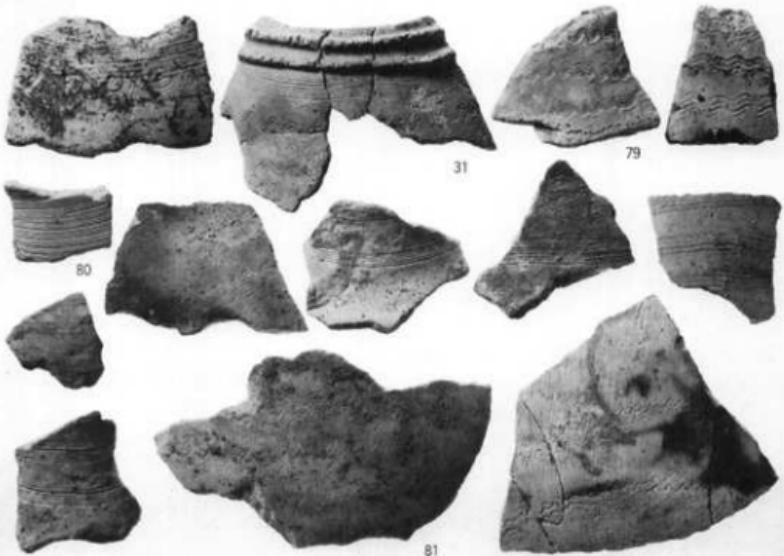
S K 20出土土器



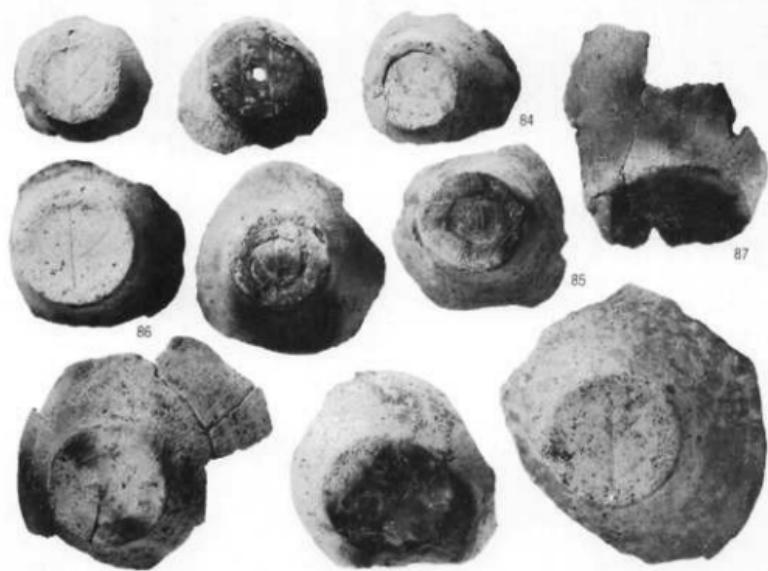
S K 20出土土器



SK20出土土器



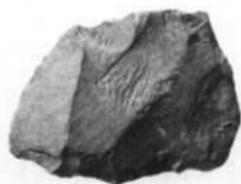
SK20出土土器



S K 20出土土器



88

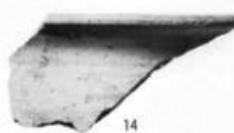
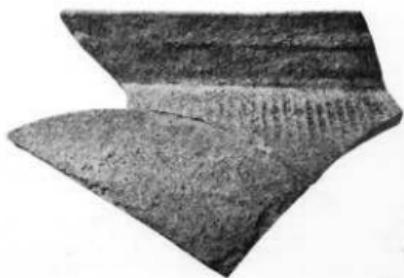
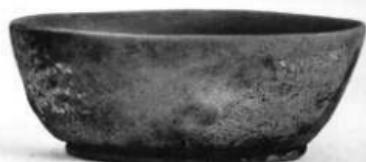


90



89

S K 20出土土器



19



16





26



27



—



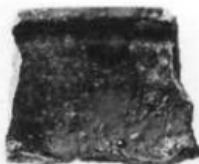
25



—



24



22



23

須道器(上段), 窯道具(中段), 緑釉陶器(下段)



30



32



31



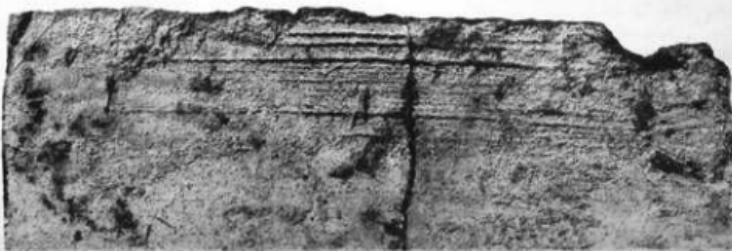
34



35



36



37

軒丸瓦(30~32・34)、軒平瓦(35・36)、熨斗瓦(37)



38



41



40



63



66



39



64



65



67

綠釉 鷓尾(38~41), 煙斗瓦(66), 丸瓦(63·67), 軒丸瓦(64·65)



図51-3



図51-6



図51-9



—



図52-7



図52-3



図52-1



図52-2



図52-4

須恵器(51-3・6・9), 石製品(52-7), 軒丸瓦(52-1), 軒平瓦(52-2~4)

京都市内遺跡立会調査概報
平成3年度

発行日 平成4年3月31日
発行 京都市文化観光局
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内
編集 効京都埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1
TEL (075) 415-0521
印刷 真陽社